

新婦人訓

總論 予の觀たる現代の婦人

一 婦人の世紀

「二十世紀は婦人の世紀である」とは十九世紀の入相に響き渡つた警鐘である。此の深い暗示、強い刺戟は、醉生夢死の婦人を覺醒し、弱い者、小さい者と見える婦人に、二十世紀に於ける最大の使命を負はせ、婦人自身も亦これを果すに足るの力を有することを自覺して來た。併し其の力は形に見える力ではなく、無形に働く不思議な力である。恰も世界歴史の古代を飾る最小國のイスラエルに、世界最大の宗教が生れたやうに、又彼の地中海の小半島の希臘に世界の大藝術が發現されたやうに、今日の世界の最も榮譽ある運命は、今まで有れども無きが如く取扱はれて居た婦人の雙肩の上に掛つて來たのである。若し婦人が眞にそれを信ずることが出來たならば、其處に偉大な力が現れて、今世紀は實に婦人の有に歸すべきことは誰しも信ずる所である。否今日は既に斯かる婦人の潜勢力の發顯を待ち望んで居るのである。

現に歐洲では彼の獨逸を中心に世界の大戦亂が渦巻いて居る。獨逸の軍國主義を以て世界を統一しようとする暴舉は、遂に今日の聯合軍を蹴起せしめた。即ち今では主義と主義との戦となつて居る。これが爲めには哀れ白耳義は焦土となり、塞爾比亞は塗炭の苦を嘗めて居るのである。而も獨逸はなかく強いに強い。開戦以來早二ヶ年近くになる。けれども平和の克復は何時の日であらうか、容易に推定することが出來ない。此の戦争は單に兵力の争ではなく、人間の野心と世界の大勢との戦である。侵略主義と共同主義、利己主義と人道主義、物質主義と精神主義、霸道と王道

との戦である。今獨逸が如何に強く見えようと、その主義に於て既に世界の大部分に反して居るのである。況や兵馬には限がある。人智にも限がある。領土にも限がある。その限のある力を以て、世界の大部分に反抗して戦ふ獨逸の最後の運命は寧ろ氣の毒なものである。かの白耳義や、塞爾比亞や、肉の眼を以て見れば慘澹たる犠牲者の如く見えるけれども、靈の眼を以て見れば實に正々堂々たる勝利者である。彼は洋々たる世界の潮流と趨勢を共にして無窮に滅びざる精神に生きて居るのである。

説いて茲に至れば益々世の婦人の自重を促さねばならぬ。腕力の弱い者、必ずしも價値のない者ではない。否腕力は如何に偉大であつても、若しそれが主義に於て精神に於て滅び行くものであれば、其の力とするものも亦遂に滅び行くべき運命のものである。けれども、たとひ一見弱者の如く見えても、強い自重が内にあれば、それこそは眞の強者である。婦人に俟つものはこの強者である。この強者に依つて始めて婦人の世紀も拓かれて行くのである。

二 戦後の婦人の覺悟

近來歐米では婦人の活動が段々と社會の輿論を動かすやうになつて來て、政治や社會政策の上等にも有效なる勢力となつて居る。婦人が今後各種の方面に活動するといふことは、啻に其の社會又は國家の精神的氣風を高めるばかりでなく、延いては、國際間の道德にも其の感化を及ぼし、正義人道を基として之を律して行く上にも多大の貢獻あるべき事は、誰しも疑を容れぬ所である。

近頃婦人の運動として國際的の性質を以て開かれた會合では、昨年スウェーデンの四月に瑞西で催された萬國家政大會といふのがある。其の時論文を讀んだ婦人の代表者は七十人に上つたといふことである。又彼の和蘭オランダのヘーグで開かれた平和會議には、十二ヶ國の婦人代表者が集つて、米國のミス・アダムスが會長となつて、今日の歐洲の戦局に對して婦人

の平和問題に關する意見を述べ合つたのであるが、其の時の決議に據つて、今度の戦争が媾和の終局を告げる場合に、其の媾和談判の開かるゝ土地に於て、再び婦人國際平和會議を催す事となり、それに就いて我が日本へも五名の代表者の外に二十名の會合を希望して來たやうな次第である。

此の婦人運動に對してはまだ研究を要すべき點も尠くないやうであるが、兎に角日本婦人も果してこれ等の世界的婦人に伍して後れを取らぬことが出來ようか。遺憾ながら疑問とせねばならぬ。殊に日本の社會では、眞に覺醒した婦人が乏しいから、社會も亦唯其の弊害ばかりを知つて眞の婦人の持つて居る力を有効に導かないといふことも、日本婦人の進歩を遅れしめる一原因であらうと思ふ。

婦人が國際間の道徳を進め、世界的良心を高めるために働いて效果の少くない事は前にも述べたやうな次第であるが、現に英米では婦人の働で社會の弊風を矯正して居る實際の效果は決して尠くない。殊に社會の輿論を支配する力が益々増進しつゝあるといふことは、婦人の中に有力なる新聞雜誌記者、思想家、社會政策家の輩出するのを見ても明である。

婦人は從來の男子の眼から見た如く決して弱いものではない。否、從來の男子が動々もすれば軍國主義的野心を活動の根柢に潜めて居るが如きものではなく、眞に教育を受けたる婦人の覺醒は從來の婦人の弱點を棄て、冷靜な理性を以て判断し、而も止むに止まれぬ熱情的な信仰によつて働くのであるから、例へば社會救濟事業にしても、又何にしても、其の熱心は如何なる力をも動かすのである。それ故國際道徳の爲めに眞に教育ある婦人の活動を盛にすることは、今後世界の國際關係の上に確に好影響を與へる事は疑のない所である。

今後婦人の感化が、單に一國一社會の内のみならず、世界の國際問題にまでも普及し來るものとすれば、今度の戦争は益々此の傾向を増進せしむる機會となつて居るわけである。かゝる世界の大事に對して、我が日本の婦人も之を

餘所事と考へず、大に之が爲めに備ふる所があり、覺悟する所がありたいと思ふ。又我が國の社會も、唯從來の消極的婦人觀に囚はるゝことなく、大に國家の發展進歩の爲めに、日本の婦人をも世界の仲間人をさせるやう、これを誘導し啓發しなければならぬのである。

三 日本に於ける青年男女の思想生活

今日の青年男女は何れも明治の新教育を受けた人々である。此の人々が組織する現代社會はどんなものであるか、又此の人々の活動が國家の上はどういふ風に現れつゝあるかを見るのは、同時に現代の婦人の生活がどういふ風になつて居るかを知るのにも好適な研究材料である。ところが此等の消息の多くは實に悲むべき失敗、行詰り、問題紛擾といふやうな事ばかりで、而もそれを解決する輿論も出なければ、其の人心を統一する大人格も表れないのである。それ故教育を受けた青年男女の就職難をかこつものが年々に多くなる。かと思ふと一方には人材缺乏の歎聲が盛に洩れる。斯様な有様であるから、今日の社會の真相は、探れば探るほど、其處に現れて來るものは、困難、煩悶、失敗、自殺、墮落、意氣鎖沈、失望落膽といふやうなことばかりである。

今日は最早國民の總てが此の疾病に罹り、國家の柱石となるべき少壯の男女が何れも神經衰弱に呻吟して居るといふ有様である。然るに、此の病氣の根本診斷を行ひ、其の養生法を確定して實行するに至るまでの根氣もないのは、實に憂ふべきことゝいはねばならぬ。されど唯此の現狀暴露だけでは何等の利益もない。我等が今日最も知らんとすることは、いふまでもなく此の現狀を如何にして革新するか、自己の問題、國家の問題、人類の問題を如何にして解決するかの方法である。言ひ換へれば此の青年男女の病源を見出して、それを如何にして治療するかの方法である。

四 自殺者の多い理由

世は屢々青年男女の自殺者を出す。これ程悲しい事はない。人間にとつて生きるといふ事ほど重大な問題はないのに、その希望を棄て、自ら死ぬるといふのは何等の悲惨であらう。慥に人間生活の變調である。

自殺者は青年男子に多い。けれども最近の統計によれば、年若い女子の病死は著しい増加を示して居る。これにも亦何か其處に重大な原因がなくてはならぬ。

若し其等の自殺者の一人に就いて調べて見たならば、種々複雑な原因があるに相違ないが、予は此等に共通する一個の原因を見出すのである。即ちこれ等の人々は何れも自分を知らないのである。随つて自分を信ずることが出来ないのである。かくて又自分の困難な境遇を切拓く力もなく、自分の生活を物質的にも精神的にも見出すことが出来ず、煩悶を生じ自棄を生じ、所謂生存競争の落伍者となるのである。かくて此の精神的病源が因となり、終に肉體的病源といふ果をも結ぶに至るのである。

これを唯一言に意志薄弱といへばそれまでであるが、これは當今青年男女の内面的病源の重大なるものである。これを根治するには、彼等の精神を鼓舞振作すべき信念の涵養の大切なるはいふまでもないが、之と同時に又これ等意志薄弱なる、心身虚弱なる青年男女を益々多く造り出す所の社會——即ち彼等の境遇を改めて行くといふことも重大なる問題の一つに考へねばならぬ。

それに就いて予が今年感じた一例がある。それは予の書齋の裏庭の方に數十株の孟宗竹が植ゑてあるが、予は其の若竹を益々殖して夏の日の涼しい葉蔭を作りたいと思ひ、兩三年來は春に出る竹の子も成るべく掘らせないやうにして育て上げた。ところが折角ぬつと抜け出た若竹がどういふものか大きくならない。そして古い方の竹も十五本枯れ

てしまつた。予の感じたのはこれである——生きて行くものに與へられた境遇と、其處に生きて行くものとの關係はこの通り微妙なものである。一本々々の竹の爲めにはそれが繁殖するに従つて其の境遇の配分は尠くなつたのである。かくの如く人間界も限のある物質世界に限のない人口が繁殖し、それで年と共に段々究極に近づき、物質的満足を得る事が益々困難になつて来るわけである。所謂生存競争が其處に始まり、弱いものは其の境遇の壓迫に堪へずして遂に自滅するの止むなきに至るのである。

社會が弱者の爲めに考へねばならぬことはこれである。限のある物質界に、辛うじて立混つて喘えぎ苦んで居る彼等を生の樂みに導くには、如何にしたらよいかといふことである。それには種々なる方法もあらうが、予は其の根本である唯一つの方法を述べて見たいと思ふ。

五 原動力を與へよ

明治の教育が物質的文明の開拓者を作ることに急ぎ過ぎて、ただ知識にのみ偏したといふことは、今日の意志薄弱なる青年男女を作つた一大原因であるといはねばならぬ。

勿論知識を與ふことも必要であるが、唯これにのみ偏して人格根本の培養、生命永久の道を打捨て、置いては、知識の授與は徒に人間を機械的にし、目前のことに没頭させてしまふことになり、其の結果常に根本要求を満たす能はず、終に煩悶、疑惑、絶望に陥らしめるのである。

然らば人格根本の培養とは何であるか。これは言ふまでもなく、人間の本質の發展を指すのである。此の人間の本質が自由に開拓され、人格生命の泉が滾々として湧く所に、人々の知識の芽は育ち、葉は繁り、文明の華は爛漫と開くのである。其處には失望もなく、煩悶もなく、自殺もなく、自滅もない。斯くの如き個人は、難に當つて益々向上

發展し、齡を重ねて益々鑠鑠を加ふるのである。

併し又人格養成といふことは、從來の如く唯教訓を與ふることによつて出來ると思ふのは間違である。徒に言葉の形式に捕はれて、却つて個人の人格の泉を涸渴せしめるやうな結果になることは尠くないのである。夫の尊き教育勅語にしろ、儒教の經書にしろ、又は佛典にしろ、聖書にしろ、何れも偉人の教訓書であるけれども、其の教訓を諳んじたからとて直ちに偉人の班に列することが出來ると思ふのは愚の極である。即ち是等の教訓は、勿論偉人の人格を知るべき良方法である。偉人の高潔なる人格の經驗を學ぶべき好機關である。けれども書や文字や所謂教訓を記したものに過ぎない。それを讀みそれを覺えただけでは、所謂教訓的知識の注入に過ぎない。

元來人格は心の交通に依つて育てらるゝものである。又個人の心と宇宙の靈とが交々相應して、其處に始めて生命が生れ發展するのである。反覆していへば人格と人格、人格と宇宙との交通を爲し得る力其のものが即ち人格である——人格の本質は人の靈である。此の靈が寔に鋭敏に、寔に完全に、能く磨かれ能く鍛はれて、眞に生きた活はたらきをなすといふことが即ち人格の價値である——生命を養ふと云ふ事である。生命を養ふといふ事は即ち眞の人格教育である。

ゼームスの口調で言へば、かの聖典、經文は偉人の生命を我等人間に通はす所の電線である。我等の靈を養ふ材料であり、又道具である。されどこれが直ちに生命を養ふものと思ふのは間違である。何故ならば、同じ電線にも活ツグきた電線ワイヤと死んだ電線デッドワイヤとがあるではないか。此の活きた精神の通はぬ經文、聖典、其の他の教訓書は、皆死んだ電線に過ぎないのである。

今日の所謂教訓といふもの、所謂宗教といふもの、それ等はすべて尊い偉人の人格精神を傳ふる電線である。併しそれを受け入れる人々の方法があまりにその型に嵌り、あまりに末に走つて知識注入のみに傾いた爲め、電線は凡て

死線となりつゝあるのである。教訓はあつても、宗教はあつても、青年の生命が育たない原因は其處にある。煩悶し迷惑し、悲んで慰められず、求めて與へられず、失望落膽に終るその病源は其處にあるのである。縮めていへば、これまでの修養教育は全く熱なく生命なき知育だけに止まり、之を消化し、之を徹底し、之を確信し、之を意志し、之を生活し、終に之を人格化する信念生活にまで到達し得なかつた爲めに、終に今日の病弊に陥つたのである。

思想篇

第一章 現代婦人の行くべき道

一 今日吾等の最も知らんとする問題

武器と威力とを以て世界を統一せんとするものは必ずしもカイゼルばかりではない。歴山王^{レキサンドル}然り、シーザー然り、ナポレオン然りである。併し何れも今日カイゼルが失敗しつつあるやうに、武器や威力は到底よく世界の秩序を保ち得るものではない。歴史は常に失敗を語つて居る。次には商工業の機械的組織によつて世界の平和、人類の正義を維持せんと試みた者もあつた。けれどもこれも亦失敗に終つて居る。

斯くの如く、世界の人々は有史以來ありとあらゆる種々の試を以て世界の統一と保安とを計つたけれども、それ等は常に極端に達しては失敗し、失敗しては行き詰りになつたのである。「吾等是如何に生活すべきか」といふ疑問は、現代に生ける凡ての人々——男女を問はず、老幼を問はず、——萬人が異口同音に絶叫する衷心の聲である。宗教家も悶え、教育家も迷ひ、男子ももがき、婦人も泣いて、皆之が解決に苦心慘澹してゐるのである。

斯くの如く、現代の生活は凡ての方面に於て行き詰つて居る。その暗黒の中にありて、唯一條の望の光を放つものは精神力である。精神力を以て世界の統一を計り、文明の根柢を堅むべきことは、近來漸く気づき初めたのである。宗教問題、教育問題、婦人問題、児童教育問題、いづれの問題も、皆此の赫々たる光明に照らされて眼を醒まし、悔

悟し感奮して發展するであらう。

併しこれ等の問題、いづれも緊要ならざるはなきも、就中子が今茲に言はんと欲する所は婦人の問題である。現代の日本婦人の問題である。今度の世界大戦亂に就いては、必ずや數百萬人の青年男子は名譽の戦死を遂げる運命の下に居る。随つて第二十世紀の數百萬人の青年女子は、不配遇者たるべき覺悟をなさねばならぬ境涯に立つて居る。此の結果種々の方面に於て、實際必要上女子の覺悟を促して居り、其の責任に重きを加へて居るのである。即ち之が爲め、時代精神の刺戟は痛く當代女子の心をそゝり、古來未曾有の新紀元を開始せんとすることは殆ど間違のない豫言である。さすれば其の當本尊である現代婦人は、先づ第一に自己に關する研究をしなければならぬ。そして其の境遇を如何に開拓して行くべきかを知らねばならぬ。現代の婦人が最も知らんとする問題の要點を掲げて見ると、

第一

- 一、婦人は如何にして自己の本性を徹頭徹尾發揮し得るか。
- 二、吾等に内在する精力の眞の秘密は如何にして知り得るか。
- 三、吾等は如何にして永久發達して止まざる人格を開拓し得るか。
- 四、如何なるものにも毀らるゝことなく、挫かるゝことなく、消さるゝことなく、眞に幸福、平和、喜悅の満足なる生活を營み、互に増進して減退せず、常に活氣に満ちて失望せず、如何なる逆境に遇ふとも必ず最後の勝利の冠を獲得するの生活は如何にして實現し得るか。

第二

- 一、斯かる生活に必要な生活は何處に求むべきか。
- 二、如何にして現在の境遇を改善し又開拓し得べきか。

等である。英の文豪ラスキンは

- 一、汝、自己を知れ、又汝の境遇機會を知れ。
 - 二、汝、自己を樂め、而して汝の現狀に幸あらしめよ。
 - 三、汝、自己を改善せよ、又汝の關する社會を修理改善せよ。
- と云つて居る。

先づ知つて而してそれを自己の感情意志となし、次にそれを社會に及ぼして行くといふことは、即ち自己の研究に始まり自己の開發に及ぶのである。

二 自我とは何ぞや

女を男も、人間といふ人間が先づ知らねばならぬことは自分といふことである。自分で自分の價值を知ることである。併し此の自知といふことは何うして出来るかといふと、自分を知ることであると同時に人を知らねばならぬのである。されば我と人との關係、我と社會との關係を知らねばならぬ。即ち人と我との關係が解つて來て、始めて自分といふものが何んな價值を持つて居るものか、又自分といふものは何ういふことを爲る筈の者であるかといふことが解つて來るのである。

それだけの事は實に簡単な事のやうにも考へられる。併しなか／＼難しい。第一、自分といふものにも種々な階段がある。所謂(一)身體我は、誰にでも備はつてゐる自分の身體といふものである。人間ばかりではなく、動物にでも自分の身體と他の者の身體との見分はつくのである。それが稍々進んだものになつて(二)本能我といふものになる。それから(三)感情我、(四)知識我、(五)精神我と、同じ自我と名が附いて居ても、種々の階段に分れるの

である。

前に述べたやうに身體我は誰にも解る。動物にさへ解る事であるから、一名動物我ともいふのである。第二の本能我も感情我も動物にもある。動物と人間との差の出来るのは知識我からである。物の道理を考へ、事の眞理を辨へるといふ自我は、人間に與へられた特權である。それがもう一つ進むと精神我である。人間の人格といふものは此の精神我の發現に外ならない。今日の人々が根本の力を養ふといふのも、換言すれば自分といふものを其の精神我にまで進めるといふ事である。又新しい經驗を積んで行くといふのもそれである。今日最も知らねばならぬ問題といふのもそれである。それ故此の精神我に達することは、人間の最も高尚な仕事である。故にそれを人間の生命ともいひ、或は意志ともいひ、或は神ともいふ。茲に於て人間の努力奮闘が必要となり、犠牲とか克己とかいふことも起つて來る。宗教の問題も起つて來るのである。

ところが人間の進歩といふものは誠に遅々たるものである。併し又一方からいへば、益々上へ上へと向上して行かうとする活動は旺盛である。自分といふ者と他との關係がだん／＼に擴く解つて來れば來る程、恰も今まで盲人であつたものがだん／＼眼が開いて來て、自分の見る所、知る所の範圍が殖えて來て、興味が益々湧くやうに、又疑問が起るやうに、今までは思ひも及ばなかつたことに考案を廻らし、思想を走らせるやうになるものである。今日の婦人は殊に新に眼醒め新に自覺しようとして居る。見るもの、聞くもの、思ふこと、考へること、凡て新しき經驗である。そこでどういふ道を辿つて行かねばならぬかといふことを今は左に述べようと思ふ。

三 婦人の行くべき四階段

第一は人として自覺を持つといふことである。即ち女も人格者となるといふことである。今までの女は單に、

であるとか思はなかつた。けれども、いんなも亦人であるといふ所まで至らねばならぬ。即ち自分の内に人間といふ價値がある——それは永久に發達進歩して行くことの出来る力である——それが自分に内在して居るといふことを信ずるのである。一言にいへば、自己に對する信念の自覺を得ることが必要であるといふのである。

然るに今日までの女子教育には此の考が缺けて居る。又女子自身にも痛切に之を要求しなかつた。茲に於てか女子は「三界に家なき」慘な生活を續けて、人と動物との中間に其の生存を保たざるを得なかつたのである。今や其の時代は過ぎた。女子も人格を持つて居る人間であるといふ根本の思想に立つて、自分の人格を尊重するてふ自意識的の力を發展することが、今後の女子の歩むべき標準となつたのである。

第二は眞實の信賴といふことである。婦人は自己の人格に眼醒めて自己を尊重すると同時に、又人の人格を尊重し信賴すべきである。此の考は即ち從來の日本婦人の特長として養ひ來つた從順の美德の根本思想となるべきものである。而もそれは從來誤り考へられた盲從ではなくして、眞の辨のある理解のある從順となるべき筈のものである。彼の制度に依つて強制されたり、又は習慣に依つて器械的に服従したり、又は自分の安寧幸福の爲めに人に信賴するといふやうな、所謂計算的の信賴ではなくして、眞に人の人格を尊重し、而して互に信賴し、互に協同して人道を全うして行くといふ考、即ち意志の選擇より起つた信賴であり、從順であり、相愛である。從來若くは今日もなほ此の事に想ひ到らぬ人々の間には、たゞ從順に親にたより、夫にたより、又老いては子にたよるのが婦人の踏むべき正しい道のやうに考へられて居る。かくては唯婦人に依賴心を増長せしむるばかりで寸毫の益もない。かくの如く、意志の選擇に基かざる信賴は、よし罪惡とならぬまでも決して健全といふことは出來ぬ。即ち斯かる人々は種々の關係に依つて僅に存在してゐるので、其の關係がやぶるゝ場合には實に慘なものである。のみならず、其の關係たるや動々もすれば商賣的計算的となつて純潔のものでない。殊に婦人が其の夫に對する信賴が習慣的、計算的な不純な愛であつ

たならば如何であらうか。人々は直ちに唾棄してそれを退けるであらう。併し世の多くの婦人の習慣的品性の中には、果して純潔なる信頼を以てのみその周囲との關係を平和にして居るかどうかといふことは疑問である。縦合表面は如何に見えても、斯かる打算的服従を以て婦人にとるべき道と考へて居る間は、婦人には何の權威もなく、何の人格もなく、唯男子に玩具視さるゝとも致し方ないことである。故に先づ婦人自らが己の人格を尊重し、そして他人の人格を尊重し理解し、其の人格に絶對の價値を認めて、始めて眞に敬虔の念を以て眞に奉仕の情を以て信頼するといふことが出来るのである。

第三は國民であるといふ自覺である。即ち國家に對する信念是である。今日までは「家」といふ事が女子の生活範圍であつた。けれども女子の人格が認められる以上、女子は國家といひ又人道といふ大きな範圍に於て、出來得るだけの力を盡すといふ確信を以て、すべての生活を律して行かねばならぬ。之と同時に、女子の興味も國家的に又世界的に擴大されねばならぬ。獨り興味ばかりではない、女子が盡すべき働も、男子と共に國家の進運に貢獻するものとなるべき筈であると思ふ。

從來女子は役人になれないとか、兵隊になれないとか、これらの理由を以て殆ど國民的に女子を認めないやうな僻見があつた。ところが今日では女子も役人になり、又時としては國防にも參加せねばならぬ時代となつた。此の事實は今回歐洲の大亂が明に證據立つる所である。例せば同盟國の英國の如き、役人の凡ての方面を女子が擔當して居るではないか。又戰爭の多くの範圍にも女子が立入つて、女子相應の仕事をなさん事を要求して居るではないか。傷病兵の看護等は勿論のこと、彈藥その他の軍用品の製造にも、女子が織手を揮つて居るその範圍は決して狭少でない。又今回の軍用金の募集に、いの一番に應じた者は女子であつたといふではないか。されば女子が精神的に國民たる義務を盡すはいふまでもなく、物質的にも男子同様、國家の維持に、國運の伸張に盡瘁すべき時代となつて居ること

は、何人も否定することが出来ないものである。單に社會といはず、又國家といはず、女子が人道的、換言せば國際的運動にまで參加すべき時代になつて居ることも亦留意すべき世界的現象である。

又總論で一言した如く、彼の婦人の平和運動の如きも、其の目的は今更喋々を要しないと思ふが、所謂目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふ政治家の手に依つて、國際道德は動々もすれば低下せんとするの傾向がある。即ち國際公法の如き成文も、實際の上には餘り多くの効果を示して居らぬ。斯くの如き現象は、世界文明の爲めに寔に憂慮すべきことである。それで此の國際道德を進めて、永久の平和運動を確實にしたいといふのが其の目的である。人或は婦人が斯かる運動を開始すればとて、國際的に何等の効果があらうぞと冷笑するかも知れぬが、そは思はざるも亦甚しいものである。世界の運動は必ずしも常に腕力のみで左右されるものではない。腕力以外に腕力を制して居るものは實に人道の叫聲である。わけて婦人の勢力の偉大な歐米に於て、其の有力な婦人が萬國の婦人と協同して、平和人道の爲めに擧げた叫聲には、如何なる政治家も耳を傾けざるを得ぬ。其の結果は今日から豫想することは出来ないが、而も間接に國際道德に寄與することの大なるべきは想像に難くないのである。聞く所によれば、昨年四月に開かれた萬國婦人大會には、日本は素より東洋からは一人の婦人も參加しなかつたさうで、大會は深くこれを遺憾として、來る大會には日本婦人が東洋を代表して來會することを切望するに至つたといふことである。又先年瑞西で開かれた家政研究萬國婦人大會の時にも、各國婦人の手になつた論文が印刷されて廻送されたものが七十餘通もあつた中に、日本婦人の一通もなかつたといふことは、萬國婦人大會が遺憾とするばかりでなく、決して日本婦人の名譽でもないのである。

戦争は固より、平和運動も學術研究も、國際的になつた今日に於ては、日本婦人も其の生活の範圍を「家」にのみ限つて置く譯に行かなくなつた。をんなも人である。人であると共に國民である。大にしては世界の安寧幸福の繋が

つて居る人類であるといふ自覺の上に立つことが、妻としても母としても大切なことである。

第四は宗教的になることである。其の宗派は兎も角、今後我が日本が今少し宗教的に覺醒せざる限り、到底偉大な國民たることは出来ぬとは、眞面目に國家の前途を思ふものゝ感を等しうする所である。過去五十年間に、我が國は物質的に非常な發達を遂げた代りに、精神界は動々もすれば荒廢に委せられんとして居る。これは獨り日本ばかりでなく、世界共通の現象であるが、今や此の形勢を挽回すべき時機が到來した。而してこれが挽回の道は宗教心の復活であるが、其の原動力は何人なりやと言へば、之に最も適當な資格を備へたものは婦人であると云はねばならぬ。そこで信念の涵養が大切なことは、社會一般の認むる所であつても、偕て之が實行といふ段になると、學校は學校で幾多の障礙があり、政府は政府で幾多の難關がある。唯自由に大膽に之を行ひ得る所は各人の家庭あるのみである。

されば今後の婦人が高等の教育を受けて先づ行ふべきは、其の家庭をして宗教的信念に充滿せしむることである。又これは婦人自身の天性から論じて、婦人は此の方面に於て男子の企及すべからざる特色を持つて居る。即ち宗教的に國民を復活せしむることが、婦人の天職といつてもよいと思ふのである。

されば此の際、婦人の生活が精神的生活にまで擴充して、靈性の覺醒を來すことが最大急務である。又斯くするところが、今日の婦人が懷抱せる煩悶に慰安を與ふる根本であると思ふ。

第二章 婦人の第二の誕生

一 人格の進歩

婦人が始めて自己に眼醒める、即ち自覺するといふことは、婦人にとつての大なる進歩であり、人格の向上である。此の進歩といふことは現代婦人の人格に於てのみいふ言葉ではない、人間を始め凡ての生物が生命を保全し、又之を永久に發展せしめて行く第一の要件である。近い例が、先づ人間の身體の健康も、常に進歩しなければ我等の身體は生れついたまゝの幼弱で居なければならない。けれども我等の身體は、生れてから死ぬるまで何時も同じものでなく、血も肉も骨も皮も絶えず新陳代謝して居る。それで常に新しい勢力を増進することが出来るのである。それと同じく、吾等の精神的生命も何時も動き進んで居る。若しこれが動かず停滯して何時も同じ状態に止まつて居つたらば、必ず衰へ必ず死なねばならぬのである。之を凡ての生物に就いて見るも、生物本來の特徴は静止停滯ではなく、常住の進歩不斷の活動である。進歩は即ち生を意味する。婦人が進歩したという事は、婦人が生きたといふことである。眼が醒めたというのは、その精神が蘇生したのである。言ひ換ふれば第二の誕生である。されば今婦人が自覺するかせぬかは、婦人が人格者となるか又は所謂養ひ難い小人の班に列して、何時までも眠つて居るかの分れ目である。即ち生きるか死ぬかの分岐點である。

二 進歩と努力

斯くの如く進歩は人間の尊重すべき進化向上の道である。けれどもそれは眠れるものが醒めたやうに、又息絶えた者が蘇生するやうに、我等の眼に常に著しく愉快なる現象を見せるものではない。即ち進歩は螺旋狀的に動き進んで行くのである。されば一見常に同じことを繰り返すかの如く見えるけれども、其の實は一回毎に高き基準に昇つて行くのである。それが即ち進歩である。

此の進歩は又常に困難が伴ふ場合が多い。殊に久しく停滯して居つた者、例へば今日の婦人の如き最も急激な進歩

を要するものは殊にさうである。されば困難は頗る烈しいことを覺悟せぬばならぬ。又向上心の熾な者は常に現狀に満足しない。進めば進むほど其の進歩は速度を加へて来る。されば常に進歩するといふことは、停滯閑散な生活とは正反對の繁忙複雑を意味するものである。

さて、誰の生涯にもさまざまな困難障害はある。しかも幾度か同じやうな困難に遭遇し、同じやうな妨害を蒙るやうなことが屢々ある。が、此の困難、妨害に逢ふ毎に、生命あるものは幾分の進歩發達をなすものであつて、決して無意味に同じことを繰返しては居らぬ。誰の生涯にも永い間には失敗もある過失もある。若し此の進歩というところがなかつたならば、同じ失敗を二度も三度も繰返すであらう。そして何時までも同じ所に停滯して居らねばならぬ。けれども生命ある者は決してそんな事はしない。昔から君子は過を再びしないというて居るのも、即ち君子は常に進歩向上する人であるからである。道に進み、向上し、發展して止まない人には、困難も失敗も妨害も逆境も、却つて進歩の階段となつて、其の度毎に一段の進歩をなすのである。

されば我等が困難と戦ひ逆境と戦ひ、奮闘の生活に無限の興味を感じ慰安を味ふことの出来るのは、此の進歩といふことがあるからである。斯様に吾々の身體も精神も進歩といふことがあつて始めてその生命を永久に持續し、其の精力を無限に増進することが出来るのである。そして人生の困難や逆境は決して進歩を停滯せしむるものではなく、却つて進歩を促し發展を遂げしむるものである。それ故偉人英傑は死をすら其の生命の大發展であると觀じて居る。そこで進歩といふことは言ひ換へれば活動である。而も同じ所に動いて居るのではなく、繰返すが如く見えても實は螺旋を描いて進むのである。迂廻するが如く見えても實は一步は一步と高きに昇るのである。避け得べき障害物は道を讓つて避けることもある。而も避け得べからざる困難には極力奮闘して打勝つて進まねばならぬ。要するに進歩とは吾々の生命、吾々の精神が刻々に擴大することである。日々に向上することである。年々に生長することである。

ある。今左に個人の進歩に就いて述べて見ようと思ふ。即ち進歩する人とは如何なる人であるかを論ずるのである。

三 進歩する人とは如何なる人か

第一、「其の人の意識は生長する。」他の語で云へば自覺の力が強くなるともいはれる。人間の性格といふものも初めは誰でも無意識のものである。それ故物の善悪、事の良否の辨別が出来ない。否自己といふことすら區別がたゞないのである。況や自己と他との關係に就いては殆ど無感覺である。嬰兒が乳を飲んでも、これに依つて自分の身體を養うて居るといふことは少しも意識しないであらう。けれどもその嬰兒にも天賦の本能、性向といふものはある。それがだん／＼に外來の刺戟に呼び起される。即ち光線に刺戟せられ、空氣に觸れ、音響に感じ冷温を感じて眼が見え、耳が聴え、手足が利くやうになる。そして漸次に自己といふものを覺知し、外界の事物と自己との關係を知るやうになる。それと同じく、我等の精神生命も教育や修養や經驗や思考によりて漸次に自己の眞價値を知り、自己以外の世界を知ると同時に、其の美醜を知り、善惡を區別し、正邪を辨へることが出来るのであつて、茲に始めて自己の中に潜んで居る意識が生長して來るのである。これが進歩する人の備へる第一の要素といふべきものである。

第二、「其の人は活動する。」自己と人との關係を知り、正邪美醜の區別を辨へ、事物の眞價値を知るやうになれば、其處に其の人の理想といふものが出來て來る。そして其の理想を實現せんと欲する。茲に始めて人間の活動が起るのである。そして活動によりて理想は益々正確にせられ、活動は理想によりて其の勢力を強大にするのである。即ち理想の價値は活動することによりていよいよ明白になり、確實になる。眞理も善も美も活動によりて確實に其の價値を發揮することが出来るのであつて、理想は活動を生み、活動は理想を實現するのであるといつてもよい。

第三、「其の人は將來の目的を構成する。」吾等の理想は活動によりて其の眞價を確め、前途の方向を決定すること

が出来る。即ち生涯の目的を確定して、活動の方針を一定するに至るのである。

一度將來の目的が定まれば、最早其の人の活動は一直線に進むことが出来る。一見茫茫として際涯なきが如き大洋の航路も、目的の彼岸があればこそである。目にも見えず耳にも聴えざる人生の目的を追究し、愛慕し、絶えざる活動、休まざる努力の續けらるるのも、我等の將來に目的が確立すればこそである。此の喜と此の興味とは、進歩して息まざる人のみが味ひ得べきものである。

第四、「其の人の活動は複雑の中に統一がある。」人間は其の面貌の異なる如くに、其の性向も趣味も異つて居る。而も究極に於ては、同じ彼岸を目的とするも、或は彼の道よりするもあり又此の道よりするものもある。或は左し或は右し、或時は古人の足蹟を辿り、或時は新しき道を拓き、千差萬別複雑極なきものである。

此の千態萬狀複雑なき人生の活動を調和統一するものは目的である。互に關せざるが如くにして實はすべての人に關係し、凡ての世界に關係して單獨に活動するのではない。茲に於て吾等はたゞ自己のみを知つて他人を顧みないといふことは出来ぬ。自國あるを知つて他國あるを知らないといふことは出来ぬ。我等の一擧手一投足は其の影響を一家庭に及ぼし、一社會に及ぼし、一國に及ぼし、全世界に及ぼすのである。即ち其の活動の範圍が擴張するに従つて、其の人の自我は擴大して複雑となり、そして其れは又目的に依つて統一せらるゝのである。これが所謂進歩の人である。

第五、「其の人の活動は常に改善である。」既に目的を永久の彼岸に定め、之に向つて進行することを忘れなければ、其の人は日々に新に進み、日々に理想に向つて憧憬する。茲に於て理想でも習慣でも品性でも、苟も其の目的に適はざるものがあれば、之を改善することに努め、苟も其の進路を妨げるものがあれば之を排除するに憚らないのである。

個人といはず、國家といはず、苟も國家の進路を妨げ、目的に適はざる習慣、風俗、若くは思想を改良せんとする活動の起つた時は、個人も國家も大なる進歩發達を遂げた時である。わが國の封建制度の宿弊に反抗して明治維新が現はれ、光明赫々の盛運を開いた。米國の奴隸制度を廢せんが爲めに南北戦争が起り、合衆國現今の強大の基礎を固めたのである。

四 進歩の價値

要するに、進歩の價値は人間の意識の範圍を擴大する。目的あり意義ある活動をなさしめる。惡習邪俗を改めて日々に新になす。艱難困苦を轉じて自己發展の利器となすのである。そして永久の目的に向つて活動させ、奮闘的生涯に満足せしむるにあるのである。

然るに人は動々もすれば、此の進歩の標的を將來に置かずして過去に置き、現在を蔑視して往古を崇拜する風がある。そこで、若し過去を理想の世界なりとすれば、世界は日々墮落して將來の發展は決して望まれない。然れども進化の理法は、宇宙の萬象が不完全より完全に、單純より複雑に、弱小より強大に進化しつゝあることを吾等に教へて居る。吾々は古人によりて、完全となり、複雑となり、又強大となるべき萌芽を植付けられたことを確信する。永遠不朽の目的は、幾千萬年の昔より人間の中に賦與せられたことも確信する。併しながら、其の萌芽を培ひ育て、成長せしめ、完全の域に進ましめることは之を將來に期せねばならぬ。幾分にもこれを完全に近からしめ、一段にても進化の階段を高め、一步にても前方に進むことが我等人間の使命であると思ふ。生物の特色は成長にあり發達にあり進化にある。天下何物か初め完全にして漸次に不完全になるものがあらうぞ。飛脚も郵便となり、電信となり、無線電信となつて一大進化の跡を示すではないか。又幾百年來の人間が僅に夢想しつゝ、ありし空中飛行も年々發達して、

今や完全に近きものが現はれんとするではないか。

古來の大聖、偉人の大理想、大目的も、一として其の完成を將來に期せないものはない。釋尊の理想にせよ、耶穌の目的にせよ、其の他聖賢の期する所にせよ、萬古不易の眞理を實現するの責任は、吾等の頭上に懸つて居るのである。徒に世の澆季を歎き、社會の墮落を憂ふる人は、眞理の萌芽、理想の源泉の胸底に潜めることを忘れた人である。之を覺醒し、其の萌芽を培養し、其の理想を實現せんが爲めに努力し、奮闘し、活動する人が眞に進歩の人であり、又古人の志を成し、聖賢の偉業を繼承し、天地の化育に資する人である。世にこれ程高尚で愉快なる事業はないのである。これ程尊重すべき使命はないのである。

五 自己發展と其の境遇

進歩といふことは、凡ての生物に備はつて居る性質であつて、進歩し得るものゝみが其の生命を保存し、自己發展をなし得るのである。殊に人間に於て其の進歩の度が頗る著しいのを見る。即ち夫の動物に近いやうな本能的原人時代から、我等が現に見るが如き文明の社會を作り上げ、尙駸々乎として將來に限なく進んで止まないものである。

併しながら、假令人間が其の固有の性質として進歩し得るものであるとしても、之を自然の儘に放任して置いては正に進歩して行くといふことは難しい。古代から人間の進歩の跡を尋ねて見ると、或は自然物又他の生物から受ける影響もあり、或は人類相互の與ふる感化もある。殊に後者は其の力強烈であつて、其の及ぼす所頗る甚深である。或は一人の天才の偉大なる感化によりて文明の一新紀元を開くこともあり、或は戰爭その他重大な出來事の爲めに一國一社會が擧つて奮激され、長足の發達を遂げることもある。かくてその跡方を見れば、必ず前にいつた進歩の成績を認めることが出来るのである。即ち一段の進歩を遂げるとに、吾々の意識の世界が擴大され、吾々の知識は複雑に

なり、吾々の目的は明になり、吾々の理想は高まり、現状に何程かづゝの改善を加へて來て居るのである。そこで我等人間の進歩の原動力となるものをつきつめて見ると、二つの力となる。一つは人間の自發的本能と名づくべきもの、他の一つはそれに應じてその力を誘ふ所の四圍の境遇の力ともいふべきものである。これは又主觀的方面と客觀的方面といつてもよい。此の兩方面は常に相引き相應じて、内に本能となり、感情となり、外に境遇となり、機會となつて居るのである。

人間の自發的本能、即ち主觀的方面の進歩の原動力は何處から來てゐるかと云へば、それは人類の經驗、遺傳である。これが我等人間の人類の又は國民的生活を繰返す所の所謂進化の持續である。他の一つの力即ち客觀的方面の進歩の原動力は、宇宙の進化の遺傳といつてもよい。宇宙の進化を繼いで宇宙の生活をして行く所の無形の傾向である。

故に我等の自己發展の本能は宇宙の進化が傳はつて居るともいひ得るし、又人類の歴史遺傳を承継いで居るともいひ得る。されば宇宙の傾向も吾々の本能となつて現れるし、又人類の經驗も吾々の本能となつて現れるのである。これが過去の歴史を我等が生れながらにして附與せられて居る譯である。故に我等の本能の一つは機械的に働くものと、又一つは自分の働きで新しいものとなつて更に發展しようとする要求となり傾向となつて現るゝものとのこの兩方面を備へて居るのである。

(1) 自己發展の危機

以上人間の生命に、進歩の大切なる事や、其の價値及び其の進む道筋に就いて説いたのであるが、此の外に尙一言を付け加へたい。それは此の進歩の本能、即ち自己發展に伴ふ人間生活の危機と、又此の危機に際する自己の教育に就いてである。人の生涯に於て、自發的本能の最も盛なる時は年齢でいへば十七八歳である。それ故人間は此の時機

に著しき自己發展を遂げるのであるが、又此の時若し其の本能の教育を誤ると、生涯取り返しのかかぬことになるのである。本能の教育といふことは、言ひ換ふれば感情の統一といふことである。即ち人間の心の内に起る感情を根柢から養ひ育て、行くのである。

第一、誰にも解る本來の儘の本能の事を説くには身體のことから始めねばならぬ。我等の日常の生活に於て、身體の變化は直ちに氣分に影響し、氣分の變化は又直ちに身體に影響することは常に經驗することであるが、此の身體の發達、即ち身體の變化の非常に盛なる時は十二歳から十七八歳の間である。此の時代は身體の凡ての機關凡ての筋肉が非常なる力で發達する。此の筋肉の力の増進が又意志の力に非常な影響を及ぼして、其の人々の性格をまで造るのである。故に身體の方からいへば、其の筋肉の働に満足の出来るやうに調節して行かねばならぬ。と同時に此の時代に起る心理状態にも、亦最も注意を要するのである。

斯くの如く身體の發達が盛であるが爲めに、身體にも精神にも非常な刺激を受ける。此の時身體には適宜な運動を怠つてはならぬ。然らざれば、その刺激に堪へかねて精神が憂鬱となり、煩悶を起し、遂に神經衰弱に罹る場合が極めて多いのである。故に此の時代の若い人々の生活に起る遊戯的、趣味的、又勞働的の興味を無下に虐げてはならぬ。否適當に清らかな遊戯的生活、趣味的生活を加へ養はなくてはならぬ。此の本能はやがて藝能となつて發達する大切な筋肉の教育となるのである。

第二に、此の時代に起る心理状態の中で特に注意しなければならぬことは、人は此の時始めて自分といふものが氣にかゝるやうになる事である。これは大きいへば、今日の所謂自覺の期に入る時なので、特に注意すべき精神傾向であり、又非常に大切に扱はねばならぬ感情の發展期であるのである。何となれば、人間に一番大切なことは自分が解るといふことであるとソクラテスもいつて居る。即ち人間の禍の本は無智から來て居る。此の無智を開く根本

は、先づ自分を知り、人を知り、社會を知り、歴史を知り、將來を豫知するといふ順序になるのである。

さて此の自己發展の力の盛な年齢となると、誰でも先づ自分は何であるか、自分の長所は何であるか、又自分の使命は何であるかといふやうな事が大變に氣にかゝつて來る。此の時伴ふ危險はその非常に盛な自己發展の本能の爲めに、動々もすれば他の凡てを壓迫して顧みないといふことである。即ち自分を知らうといふ自我意識が非常に鋭敏になつて來て、自分の本能、感情、情操に映る自分以外の凡ての對象物を、自分の理想的に實現しようとするのである。

抑々人間の感情情操といふことは、一言にいへば愛といふことである。愛は人格と人格との關係である。即ち自己發展の力の盛なる時期には、同時に自己の愛の對象物を求め、自分と自分の對象物との理想的關係を要求するのである。故に此の時期に於て自分の生涯の知人、即ち親友といふものが出來易い。自分を知つて貰ふ所の一人の理想的人物を選択しようといふ心からである。ところがこれが極端に走ると、他を排斥し、社會一般の興味を捨て、自己の狭い感情狭い興味を以て、一人に對する感情にのみ集注しようとするのである。

斯ういふ風になると、凡ての事が主觀的になつて、遂には自分の未だ將來に發展すべき性向人格までを、自分の若い經驗未熟な批判を以て選擇した一人の人格の型に制限してしまふ。又その對照の人の人格をも自分一人の人格の型に箝めようとする。そして親に捧ぐべきもの、社會に捧ぐべきもの、國に捧ぐべきもの、神に捧ぐべきもの、凡てを無視して、唯一人の自分の對象とする人格に捧げて「我が天分盡せり」とするものになる。かく一人の人格に集注するといふことは、反面には他の凡ての人格を無視し畏忌して、偏頗の愛に陥る恐があるのである。斯くの如き愛は異性の間にも起り、又同性の間にも屢々見ることである。

これは個人と個人との事であるが、此の心理状態は社會に對しても同じである。いふまでもなく、社會は常に一個人の理想通りには行かない。自分の理想通りに行かない所から、社會を畏忌し、社會の壓迫を感じ、遂に社會に對す

る感情を平静に保つことが出来なくなつてしまふ。そして自分の意志を自由に發表し行動することが出来ないやうな、所謂臆病な性質になる事がある。かと思ふと前にも述べた通り、一方には非常に自我意識が強くなつて、人を無視し、世を無視して、所謂似而非唯我獨尊者が出来て来る。どちらにしても此の時期は人間一生の危機である。青年の死活の分れ道といつても過言ではない。

(四) 自己の教育

人の生涯に於て、自我意識が熾になるといふ時は、如上の如く非常に危機であると同時に、又非常に大發展大進歩の時であるから、最も注意を要するのである。畢竟、斯くの如く憂鬱に物を考へ、斯くの如く事毎に敏感であるといふことは、今までの兒童期の摸倣性時代を後にして、茲に始めて自分が自分を支配しようとする自覺の期に達したのであつて、今までは人に頼り、人に教育されて來たのであるが、今からは自分で自分を教育しなければならぬ。自分の運命を拓くのは自分であるといふ事を悟るのである。それ故、自分の運命は自分が持つて生れた目的を成し遂げることによりて開かれて行く。されば此の目的を果す爲めには、自分の意志の活動を自由にせねばならぬ。即ち自分で自分の教育をするのである。自分の教育をするといふことは、やがて自分の生涯に就いて考へることである。自分の力、自分の傾向、自分の境遇を省み、そして自分は如何なる生活を營むべきか、又其の生涯に於て如何なる事業を成就すべきか、又如何なる職業を擇ぶべきかといふことを考へるのである。

さて、斯くの如く限なく湧き起る複雑なる考を、どういふ風に統一するかといふと、先づ第一に自己の確信を得るといふことになるのである。即ち人間がその生涯に於て爲さねばならぬことを見出し、與へられて居る使命を悟るといふことに外ならない。

凡ての人には創始的能力といふものがある。即ち人間が自己の確信を以て、新しい理想を構成する能力である。所

謂精神的に再び生れる時であつて、第二の誕生とか、自己發展とか、又は生れかはるとか、一段高い階段に上るとか、色々の言葉をして此の活動を言ひ表はして居る。

人間は初聲を擧げた曉から此の世を去る夕まで、いつも／＼此の能力によつて生長するのである。その間人は不知不識種々な生活の経験を積んで行くのである。そこで、人間の十七八歳といふ時期に、始めて先づ自己を知らうといふ本能要求に始つて、それがだん／＼に教育され發展するにつれて、やがて自分の理想に合する對象を求め、そして其の人格に接することに依つて自己といふものを愈々明にする。同時に又自分以外の他の人格にも自己の反映を見る。是れ即ち自己の擴大である。

これは人間の社會的の本能といふ止むに止まれぬ根本要求であつて、これが人格に對する愛情となり、國に對する愛國心となり、人道に對する博愛心となるのである。又宇宙の靈とか、神とか、天とか、其處に無形の大人格を認め、それを對象として敬し愛する情はこれ又人間の根本要求から起る宗教的本能の發露である。それであるから、其の發展を慮けることは出来ない、束縛することは出来ない。否、自己發展の根本要求、自己教育の目的は其處に在るのである。

(イ) 宗教的本能と自己の信念

人間の宗教的本能といふことは、言ひ換ふれば、人々が其の一生涯を通じてこの身を獻ぐべき對象を見出さうとする態度、即ち人間以上の偉大なるものゝ實在を認めて、其處に自己を擴大しようとする態度である。

それ故此の本能を何の障害もなく自由に理想的に發展せしめようとするには、先づ現在の自己を信じ、他の人格を愛敬し、現實の社會を尊重するに始まらねばならぬ。

然るに現實の社會は不完全である。人々の態度は決して満足を與へない。自分とてもよく／＼内省すれば悲觀すべ

きことばかりである。これは動かすことの出来ぬ事實である。それ故或は自分は自分を初め世の中の凡てのものに自信を持つことが出来ないといふ人があるが、それは其の人の理想と稱する神をも宇宙をも信ずることの出来ぬ人である。又自己を現實以上に進歩發展させることの出来ぬ人であるといはねばならぬ。即ち宗教的本能に壓制を加へた人である。

何となれば、現實に不満を持つて、その爲めに自信を持ち得ないといふならば、その人は宇宙や神に對しても不満を持つ人である。即ち天道是非かといふやうな言葉もあつて、人間以上の絶對者に對しても、不満を感じ、不完全を感ずるといふ人は屢々ある。

人間が現在の立場から見た現實は、決して満足に出来たものではない。それで無限絶對に對する理想が立たない、信仰が出来ないといふならば、神も宇宙も崇拜することは出来ない。吾々は常に、出来上らないものゝ中に價値を見出し、それを信じて理想を立つべきである。自己以上人間以上のものを崇拜するといふことは、現在の價値から推して無形の理想、無形の將來を信ずることである。即ち絶對の神、絶對の價値といふやうなもの、つまり人間の信念に生きるより外にないのである。

されば宗教的態度の一つは人格の尊重である。自己を尊重すると共に他の價値を認め、他を尊重し他を崇拜することである。其處に美しい人格の感化があり、其處に美しい宗教的本能の進路がある。若し此の進路を認めて生活する人があれば、その人は自己の信念生活を美しく發揮するばかりでなく、その周圍の人々に如何に美しい感化を與ふるかは、今更いふまでもない。

六 進歩の自由は信念の賜

人間は要する所、自分の根本要求を充さうといふのが一生の願であつて、その要求の充されることが即ち自己發展であり、自己の進歩であり、又自己の改革、自己の甦生、自己の再生である。これは人間の自由であつて、其の意志のまに／＼行へば、必ず其の目的は達せらるゝのである。併し茲に一つの難關といふは、人間の意志の弱いことで、之が爲め眞の自由を得るまでに至らないといふことである。意志が弱く、爲めに自由を自由として、眞にその要求を充すことが出来ないといふのは、つまり人間が外から、又自分の心の中から、言ひ換ふれば物質的又精神的に、有形に又無形に壓迫を受け、束縛を受けることである。多くの人々は、皆この有形無形の壓迫束縛を脱却することが出来ない爲めに苦んで居るのである。自己の要求に基いて、自己の改革進歩を來すとすれば、極めて自由になるべき筈である。併し人間は、四圍の境遇から全く離れて生活することは出来ない。即ち自己の改革といふ事が、四圍の境遇から多大な影響を蒙むることは争はれないことである。否、其の四圍の境遇、四圍の習慣、四圍の壓迫を脱却して、自己の理想に直行するといふことは、世間普通の人間にはなか／＼の努力である。不幸にして四圍の境遇が自分の意志と逆行し、又種々な方面から束縛を受け壓迫を感じねばならぬやうな時、多くの人は此の困難と戦うて動々もすれば敗を取り、此の境遇を制御するよりも、却つて之に制御され、直ちに束縛を蒙り、直ちに壓迫を受け、直ちに人間の本能なる進歩の自由をも失つてしまふのは悲しい事實である。

これは外面から來る壓迫であるが、自分自身の心の中にも、常に二つの力が戦つて居る。それは人間の遺傳的習慣束縛に捕へらるゝ事である。これは人間の惰性といつて、人間本來の要求を虐げ、進歩を妨げるものである。人間の

目的理想を光明とすれば、壓迫束縛は其の光を蔽ふ黒雲である。此の黒雲を取り去る事、即ち其の壓迫束縛を脱して、其の理想要求に向つて、眞に公明正大な道を自由自在に往來せしめるといふことが人間を救ふ道である。

普通に人間の感ずる壓迫、束縛といふ事は四圍の境遇のことを指すのである。それに對して自由を得るといふのも、矢張大抵は四圍の境遇のことを指すのである。例へば物質生活に困らぬ人、種々な條件の伴はぬ人をさして、彼の人は自由な身體である、といふやうな場合である。成程それも自由の一つには相違ないが、此處にいふ眞の自由といふのは、如何なる場合にも自分の本心の思ふがまゝに行動するのをいふのである。

前にも少し述べたと思ふが、人間の本來の性格は、所謂神の心と一致するものである。宇宙の靈と同じものであるのである。それに人間の遺傳情性は、本來の要求と反對のことを屢々考へる。例へば功名富貴といふやうな、人間世界の極僅な差別のために、大切な理想目的をすて、しまひ、又少しの困難に挫けて、將來の大理想をむざ／＼と放つてしまふといふやうな、意氣地のないことになつて来る。斯くの如き間違は、四圍の境遇と自分といふのではなく、自分の心の内と内との戦である。自分の本心を一貫するか、迷の雲に蔽はれるかの戦である。

併し自分の本心と迷と、其の二つの區別が明に解つて居る場合に、誰もそのどちらに決めようかと狼狽するものはない。必ず自分の本心を行ふであらう。けれどもその區別の差は僅である。殊に人間の心の迷は目前の挑發的な事に動き易い。目前の逸樂安易に囚はれ易い。理想のうすれた、確信の定まらない人間には、それ以上の將來を見る事が出来ないのである。此の時人間の本來の要求を育て、本心を指導するものは、その人の信念の外はない。如何なる困難にも、如何なる誘惑にも迷はず恐れず、終始一貫して行くことの出来るものは、その理想を信じ確信を保つ人のみ與へられる偉大な力である。即ち精神生活の自由、信念の自由といふもので、此の力を以て有形無形の束縛を脱することが出来る。ところが此の信念といふことにも一種の迷信が伴うて居る。從來の過渡時代に於て、一切の信仰

といふ信仰を、凡て迷信の如く取り扱つたのにも深い理由があるのである。それは従來の倫理上、宗教上の信念といふものが、多くは宗派、傳説、教條に囚はれて、其の爲めに却つて人間の精神生活の自由を束縛し、其の進路を絶たしめたことである。これは宗教、倫理の束縛である。過去の精神教育がその効果を収めることが難しかつたのも、其の根據はこゝに在るのである。

信念に變りはない。唯此の信念の障害、即ち宗派傳説の束縛を排して、汎き理解を以て永久的な宇宙内の眞理に根據を据ゑ、深遠高大な精神生活に達するものでなければならぬ。

第三章 信念とは何ぞや

一 信念は人の全生命なり

信念は人格の根柢、道德の原動力、眞理の本體、愛の淵源であつて、これ以上の眞理、これ以上の價值、これ以上の理想、これ以上の善、これ以上の完全、これ以上の幸福、これ以上の意志はない。實に此等の總てを融合し含蓄する根本生命なのである。此の根本生命を、吾人の日常生活に於て體現してゆく努力が即ち自己發展の生活となり、向上學生の生活となり、自恃奉仕の生活となり、満足悅樂の生活となり、安心立命の生活となり、至誠敬虔の生活となり、普遍徹底の生活となるのであつて、此の唯一の根本生命の、具體的に現はれ行く姿を各方面から看取する時に、其れ／＼善美を極めた種々の向上生活となるのである。信念は實に吾人の全生活を支配し、衝動し、充實する全生命である。

それ故信念は善美を極めた力であつて、其の眞趣は到底口にも筆にも説き盡す事が出来ない。従つて之を明に捉へ知らうとするならば、身自ら之を體驗し之を直觀して、親しく其の内容に接觸し感銘するの外はない。けれども信念生活には知識的作用も加はつてゐる以上は、此の方面から出来る限り各要素に分解し、之を再び全體に組織統合して見るといふことが其の本質を摺む助となり、又實驗し修養する上に適切なる方針を發見する方法となるのである。それで此の立場から信念の形式的要素を觀察して見ようと思ふ。

二 信念と知識

(眞理の信念)

信念を缺いた單なる知識は死物である。さうかといつて決して信念には知識的要素がいらぬものであるとか、害になるものであるとかいふことではない。否、却つて知識は本當の信念を涵養し確立するために缺くべからざる要素である。若し信念が知識の要素を缺く時には、單なる盲目感情のみとなつて、或は偏狭に流れ、或は迷妄に陥り、遂に救ふべからざるものとなることがある。「鱗の頭も信心から」といふ諺があるが、此の諺は一方に信仰の力の如何に微妙な且つ強烈なものであるかを示すと同時に、一方には如何にその知識を無視し判断を暗ます傾向があることを示してゐる。人がよくいふやうに、信仰は知識の沙汰ではないといつて、若し善惡正邪眞僞を辨別することなく、全く無批判的受動的に信仰を受け容れることになる、其の結果は生活を向上させずして、却つて人格を墮落させ、甚しきは狐狸を怖れ、方角を忌み、日や時をも氣にかけるやうな迷信に囚はれる。斯うなると安心の道は却つて不安の本となり、精神の力は却つて逡巡の枷となり、解脱の門は却つて煩惱の關となつてしまふ。世の中に愚者の迷妄、偏見者の我執ほど困るものはない。殆ど救ふに道がないのである。かくの如き邪境に陥るを防ぐには、何うしても科學的

知識、哲學的理念を借りて、明晰な批判力と、「眞」に徹せざれば止む能はざる理智的良心とを養はなければならぬ。我等が信念涵養の爲めに知識を必要とするわけは、啻に斯くの如き内面精神上の危険に陥ることを防ぐがためばかりではなく、外界に於ける思想の混亂と誘惑とに對しても、適當に批判選擇を加へなければならぬからである。即ち外界社會から迫り來る危険に對して、自己の精神生活を防護するために最も必要なのである。今日に於ては倫理主義にも、哲學思想にも、宗教信條にも、又藝術思潮にも、種々様々の學説があり、流派があつて、互に相爭議し、辯護し、衝突し、扞格し、異論百出紛然雜然たる有様であるから、其の中から最もよく我が要求に適合するものを選び採るのは容易なことではない。又其の總てを整理して取捨し按配し、之を我が生活に統一するが如きは非常な難事である。さらばと言つて、此等の外界潮流に對して全く眼を塞いで無關係で居るといふことは、社會的生活を營んでゐる限り到底出來ないことである。我に外界刺戟に反動する力のある以上は、どうしても人の好奇心を惹くに足るべき魅力ある精神的刺戟に接して、之が爲めに動かされなわけにはゆかないのである。又此の性質が外界から滋養分を吸収して、自己の精神を育て、行くのに缺くべからざる要件なのである。果して然る以上は、我々は内に於て此の力を指導し統御し、外に諸種の學説主張を批判し選擇し、以て確乎たる信念の涵養に資すべき理智の力を具備しなくてはならぬ。知識は我が精神生活に於て、退いて守らんが爲めにも、又進んで戦はんが爲めにも、缺くべからざる武器である。如何に勇猛なる向上精神の意志があつても、此の武器を忘れ、赤手空拳敵に立ち向つたのでは勝利を獲る事は甚だ覺束ない。夫れ故信念涵養には、大に此の知識の鋭利堅硬を要求するのである。

そこで信念の圓滿充實を期せんが爲めには、先づ知識と信念との差別を明にし、而して兩者の一致共同すべき要點を發見しなければならぬ。けれども此の兩者は共に同一精神力の異なる作用異なる方面なのであるから、根本的に區別さるべきものではないので、知識とは重に洞察力批判力の働きを指し、信念とは重に感情内省の方面を指す。一は客

觀的にして明瞭ではあるが、卑近有限である。一は主觀的にして朦朧ではあるが、深遠無限である。兩者が同一精神の働きのして現はれるにつれ、同一對象であつても、其の見方によつて、或場合には知識として取り扱はれ、又或場合には信念として取り扱はれる。而して信念は重に情意作用の上に立脚地を置いてゐるのであるから、理智の上に優勢を占めて居るのであるが、信念を合理的ならしめ、信念の信念たる形と活きとを支持させる爲めに缺くべからざる要素は此の知識である。即ち信念をして徹底せる眞理たらしめ、確定不動の基準たらしめ、實地の發動に妥當を得しめるといふ役目を務めるものは實に知識である。

知識は斯くの如く健全妥當なる信念を作るに缺くべからざるものであるが、其の知識は普通によく理解されるやうに、分析、比較、推論、判定の如き科學的哲學的研究、更に言へば論理的方法と其の成果とのみに限るのではない。直觀的洞察力、微妙なる想像力等をも働かせなくてはならぬのである。否、寧ろ吾人をして眞の信念を捕捉せしめる主なる要件は、實に我が人格に内在する最深の理性、即ち睿智の靈力に外ならぬのである。換言すれば、吾人が各自の合理的實體を以て、其れ以上の合理的靈體たる宇宙の實體に到達し、そこに信念を發見し、捕捉し、構成するには、是非とも此の人々生得の最深の理性、睿智の靈力の活動に依頼しなければならぬのである。成立上及び實行上に徹底した意味で言へば、知識の伴はない信念は無いと同時に、信念の伴はない知識は無いのである。若しさういふ知識と信念とがあるとすれば、それは孰れも生命の拔殻である。無力無能、何の役にも立たないものである。

三 信念と感情

(興味及び感情の信念)

信念と知識(眞理の信念)に次いで、茲に又當然言はなければならぬ事は信念の基礎、信念の眞髓たる感情、情

緒、情操等である。信念が行爲の動力であるのは即ち之に由るのである。そして其の最深の根柢は實に人類的遺傳、宇宙的本能に外ならぬのであつて、所謂宗教的本能と稱するものである。此の本能には各種の力が融合され含蓄されてゐるのであるが、それは常に何等かの目的を追求してゐる。そして吾人の人格に現れて吾人の傾向となり、趣味となり、動機となり、欲求となり、意志となり、種々の様式と程度とに於て活動するのである。而して又此の本能の力は多くの根幹に分れて、深く吾人の潜在意識の土壤中に入り込んでゐるのであるが、其の中の最も強い力、最も大なる根を成してゐるものは、即ち「愛」と稱する情緒である。孔子も「仁者に敵なし」と言つてゐる。即ち愛のある所、凡ての恐れを除き、人をして無私無我の境地に置くが故に、向ふ所敵なき力となるのである。

又泰西の學者は「女は弱し、されど母は強し」と言つて居る。これも母が其の子に對する無我の愛の力の宏大なることをいつたものである。如何なる人にも如何なる場合にも、愛より出る力以上の力はないといつても過言ではない。此の愛情の系統脈絡の中には、同情とか、惻隱とか、諒察とか、慈悲とか、親切とか、敬虔とか、至誠とか、犠牲とか、堅忍とか、喜悅とか、幸福とか、満足とか、渴望とかいふやうな、種々の感情的の作用が含まれてゐる。そして諸種の刺戟に應じ機會に現れて、相互扶助、共通恐怖、共通運命、共同事業、四海兄弟關係、國家關係、家族關係等となつて、人生社會の基礎組織を成すのである。

愛の脈絡系統は、啻に斯くの如き有形の社會關係を成すに止まらず、遂に高く進展して、遂に神聖なる普遍無限の愛の實現となる。即ち神の愛と人間の愛との根本關係が現實に發展して、そこに感覺以上の精神世界が築造されるのである。即ち人と人との關係、人格と人格との反應に始まつて、此の關係は時々刻々に完全なる愛に近づいて行くのである。尤も茲に一言して置かねばならぬことは、人間の情緒は必ずしも積極的のみに進むといふ事は言はれない。或場合には愛し親む反對に、又完全なる愛の關係を追求するあまりに、其の關係範圍が偏狭に流れ潔癖に陥つて、そ

れはやがて憎、嫌の情となることがある。これも情緒の消極的方面である。併し此れ等の情がだんだん理性に依つて判断され、人間の宗教的本能に従つて發展して來ると、曩の所謂積極的愛の關係を作つて來るのである。精神的完全なる愛が其處に築かれるのである。即ち自分といふ一個人が愛し愛せらるゝ所のものは、偏狹なる一個人の人格に止まらず、其の理解のある所は即ち親みのある所で、其の親みを感じずる所は即ち全き愛の關係である。我等はその關係を擴大しては人間を超越し、感覺を超越し、宇宙の靈と稱する無形なるものと相呼應するが如き精神状態にまで進むことが出来るやうになるのである。(宇宙の靈は、或人は之を人格化して神と呼んで居り、又或人は眞如と稱し、又絶對と名づけて居る。要するに無形なる宇宙の靈を人格化して呼ぶに親しき名を以てするのである。予はこれを神と呼び慣れて居るから、此の宇宙の靈を人格化して言ふ場合には、常に神と稱することを茲に斷つて置く)

そこで、人が其の愛の關係を積極的に擴大して行くと、其處に神の愛を感應することが出來て、神と人との關係交渉がつくのである。之を言ひ換ふれば、神はその廣大無邊なる愛を以て一個人の我に接し、我は一個のいと小なるものにして、而も廣大無邊の完全なる神の愛を感受し得る關係となるのである。

即ち斯くの如くなれば、我は形容に於てこそ一個の人格に過ぎざるものなれ、その關係は無邊の宇宙に互つて居るのである。彼の太陽の光の照らす處、其の熱に浴せざるものなきが如く、宇宙の凡てに我等の愛は充ち満ちて居るところなるのである。我が眼に映るもの、我が耳に入るもの、凡て愛ならざるはない。宇宙萬象は實に神の愛の笑顔に外ならぬのである。是れ即ち人間の眞の本能といふものは、神の愛に反應する感覺其のものであり、而して吾々が生活の動機は、此の愛を追求する自發力に存するものであるからである。それ故人の眞の渴望は愛であつて、之を導き之に満足を與へ、且つ之を發展せしむるものは信念の力である、即ち愛の信念である。

人類の感情が神の愛に連なる他の根幹を趣味と名づける。趣味は美を慕ふ感情であつて、愛情とは密接にして離る

べからざる關係がある。即ち美とは愛の完全に表れた状態、又愛を發展する心情を指すのである。故に美は愛の産んだ子供であるとも言へる。此の愛から生れた美といふ子供が發育し生長して、こゝに花笑ひ鳥歌ひ、風薫り雨煙る趣味の世界を展開し、吾等の壯嚴なる大宇宙に煦々たる悦と幸とを満たすのである。但し此の美の表現に就いては、後に復た言ふ機會があるつもりであるから、此處には唯其の大本を一言するに止めて置く。

信念に於ける情の要素は斯くの如くに重大な役目を持つてゐるもので、其の力に依つて、自愛と他愛、愛國と人道、社會心と宗教心との調和統一が出來、そこに永遠不朽、圓滿普遍の愛の全相が渾然として現れるのである。而して又此の力に依つて、人の全生活を上の方前の方に絶えず押し進め、人格實現完成の努力を永久に新鋭ならしめるのである。

四 信念と意志 (道徳と信念)

信念とは如何なるものであるかに就いて、之を智、情、意の三方面より解き來つた。併しこれは假に分けたものである。もとより信念の内容は一にして三、三にして一に歸すべきものであつて、其の何れをも一つ區別して離すといふことは出來ない事である。而も今茲に言はんとする意志の信念は其の最も内在の力である。力の中の力、信念の中の信念である。人間の此の力が、一度外部に向つて發展せんとする時、其處に生の要求が起るのである。「如何にして生きるか」、「如何にして價值ある生を見出すか」といふことは、生ある人間の止むに止まれぬ要求であり、願望であり、又凡ての力の動機であり、又生きた事實である。此の力こそは即ち人間が宗教を要求する所以で、此の力の要求を如何にして實現せんかに努力する力は、即ち意志の信念である。此の信念が日常の生活に又は精神生活に、乃至

日常の仕事の上に實現されることに依つて、始めて信念生活を爲し得るものといふべきである。

然るに屢々いふ如く、明治の教育はあまりに知識に走つた。そして其の極は此の人間の天性を無視し、此の止むに止まれぬ要求を他所に見、徒に人工的形式の生活に陥らしめた爲めに、青年は機械的知識に捕へられて、其の生活は淺薄無味となり、其の元氣は磨滅しようとして居る。併し人間は到底いつまでも、斯くの如く表面的知識に依つて、内なる心の満足平和は得られないのである。自然の要求は、遂に此の形式的知識生活、有限的人工生活に飽足らずして、茲に一大反動を起した。今日の藝術界、今日の思想界、今日の人間生活の衷心要求は、形式を超越したる所の、眞に内なる心の満足であつて、有限なる人智の世界を脱出して、直ちに無限なる永久の力を得、其處に生の價値を認めようとして居る。此の内なる心の満足が得られなければ、寧ろ死の力を俟つまでに殆ど必死の要求となつて居る。

斯くの如く、今日の青年男女が、其の必死の要求を以て如何に其の意志の貫徹を欲して居るかは、凡ての生活方面の事實となつて表れて居る。

予は昨夏所用あつて丸善書店に立寄つた際、試に當時の書物中青年に最も賣行きが多いのは何であるかを聞いて見た。それは八月中旬の調べであるが、かのタゴールに關する原書が既に六百部以上出て居る、メーテルリンクのものも原書で三千部以上に達して居る。殊に昨年二月十二日に翻譯し發賣したタゴールのものが、七月までに十版を重ねたといふことであつた。此の讀書界の傾向を以ても、今日の青年男女が如何に何を求めて居るかを察知せられるのである。

形骸ばかり残つた昔の信仰では満足が出来ない。その眞の要求を満たさうと思ひ、又眞に自分の要求する所を實現せんとする強い意志の自發力が其處に生れて来る。これは宗教の古い新しいではない。新舊共に何か新しい生命、其の生命ある經驗を願ひ求めて居るのである。クリスチャン・サイアンスの主唱者エヂー女史が、百萬人以上の信仰の

的となつたり、中山みきといふ一婦人が天理教を開いて、今日の盛大の基を築いたり、又ヴラバッキー夫人が靈智宗教を創始した如きは、何れも人間の眞の要求ある處を洞察して、其の求むるもの、幾分かをも充たす所があるからである。たとひ小さくとも其處に眞の生命の通ふ所があれば、生命に餓ゑ機械的生活に疲れたる人々は、恰も蟻の甘きにつくやうに集まつて行くのである。之に反して、たとひ嚴しい信條が如何に大なる權威を示さうとも、若しそれが生命のない形骸のものであれば、人々は煩悶し失望し遂に死ぬるのである。此の現象を見て宗教の權威が衰へ、人間の信仰心が薄らいだと思ふのは淺慮である。生命を求めて與へられず、形式の宗教に捕へられて不満を感じ、悶え苦む心は即ち人間の意志の根柢にある所の止むに止まれぬ力である。されば、これは決して信仰心衰頽の結果でなく、寧ろ信心堅固の平和満足を求めて止まぬ内なる力の發現である。益々よくこれを導き光明の方面に向はしむるものは、生きたる宗教の外に何ものがあらうぞ。

凡そ世の中の動搖の裏面には止み難い憧憬、熱望、愛慕がある。その自動的選擇力は、人間の心の裏に潜む意志である。即ち力の根柢であり權力である。それ故信念は即ち意志、生命は即ち意志ともいへるのである。意志は人間生活の根柢であり、又其の全體である。更に詳しく言へば、意志は態度の決定である。自分が自分を決める事である。——我が生に對する態度、宇宙に對する態度、自己に對する態度、人に對する態度、眞理に對する態度——の決定である。故に意志といふものゝ内容は實に豊富無限であり、多種多方面である。されば信心堅固なる意志の内容には、感情の流動、要求の満足、目的の確立、主義の確信、實行實現の熱誠がある。されば意志の活きは、もとより直觀的創始的活動があり、従つて理想高潮、人格の緊張、集中、自發自動の力の自由、精神生活の佳境に入るといふやうな實感を持つのである。

併し此の信念の態度を得るまでには非常の奮發力が要る。其の正しい態度を以て正しい決定をなすには、あらゆる

反對と戦ひ、あらゆる誘惑と戦ひ、凡ての感情を制御し統一して、動々もすれば動搖し混亂する思想に安定の満足を得ねばならぬ。斯くの如くにして、始めて眞理を愛する意志に満足を與ふるのである。これが即ち意志（道德的意志）の本務である。若し此の境地に達するまでの勇氣を缺き、理性を缺き、所謂他動的信仰に陥るならば、それは即ち人間の道德的意志の墮落であつて、迷路に入るのも自然の勢である。意志は實に態度の決定、境遇の決定、進路方向の決定である。譬へば知識は船の羅針盤であり、感情は之を動かす力であり、意志はその船長である。信仰の強いといふことは意志の力の強い事である。此の道に生活する時は、他の凡ての富貴榮華を棄てても孤獨を感じる事は無い。それは即ち永久無限に活き、益々修養し益々發展せんとする内なる力の意志の信念に生きるからである。意志の活動は即ち行爲である。故に行爲の件はぬ信仰は遂に衰へ遂に死ぬる。

「山を動かす信仰」といふ語がある。これは文學者が單に形容詞に用ひたものではない。實に眞の自分の意志は即ち神の意志であり、宇宙の意志であり、神の思想であり、宇宙の思想である。その思想意志と合體し、その理想目的に集中し、又一方には益々高潮に達し發展して行くと、其處に神の意志が體現せられるのである。つまり神と我と合體共同すること、人と我と同じ意志同じ主義の下に協力することである。世俗を離れ妄念を捨てた自己の意志の獨立であつて、其の力は絶對無限である。この力の實現する時、其處には必ず自己の天職といふものを見出して、自己の生活に對する態度の確立を得るのである。此の天職に向つて努力奮闘し、必ず爲すの力を以て堅忍不拔の態度を持するもの、即ち意志の信念である。

第四章 信念と修養

一 自己の信念

(イ) 自己の研究

人間は常に辯解的である、と泰西の哲學者もいつて居る。これが人間を精神的に墮落せしめるもとで、又行手の光明を失はしめるものである。何故ならば、若し自分に確と信ずる所があつて爲すことならば、それに何の辯解がいるであらう。其の實行の結果で凡てを説明する。即ち眞に自己を有するものならば、如何なる場合にも自分の心の證明ほど確なものはない。日常の生活の始終に於ても、自分に依るより他に最上の道はないのである。

けれども若し自分の心に信ずるものゝ亡くなつた時、人は自分の行に辯解をつけようとするのである。そればかりではない、徒に過去を思ひ、未來を信ぜず、人の心をも疑つて、何事に對しても踏趾逡巡、決定することが出来ない。それ故眞剣になることが出来ない。畢竟何物も得る處がないといふ事になるのである。さうなると人は誰も自分が不甲斐ないからであるとは思ひたくない。人のせいや境遇のせいにしたくなる。そして辯解もしたくなるのである。

斯様に自分の爲すことを常に辯解しなければならぬやうな立場に在る人は、即ち自分で自分の本心が行はれぬといふことを標榜してゐるので、言はゞ囚人のやうなものである。全く精神的に牢獄の生活をして居るのである。自分で自分の心を縛つて居るのである。自分で自分の心を虐待して居るのである。それだけでも人間として淺ましい事とい

はねばならぬ。併し人間の大方はつくづく自分といふものを省みると、果して此の精神的牢獄に繋がれて居らぬものが幾人あるであらうか。覺束ない事である。そこで先づ人が信念に生きようとするには、必ず先づ此の牢獄を破らなければならぬ。

つまり他人に依つて動かされ易い脆い心、外部の境遇に依つて變りがちな浅い考、さういふことのすべてから脱れ、眞に自分の要求から生きて行くといふ心持にならねばならぬ。自己の信念といふものも、其處で始めて得られるのである。それは、口で言へば唯これだけのことであるが、眞にその心持を作るといふことになる、さまざまの煩悶苦闘がある。

例へば人間が生きて行く上には、研究もし事業もして行かねばならぬ。其の時若し自分の考るだけのことも、思ふまゝにならなかつたら、どんなに苦み悶えることであらうかといふことは想像するに難くない。若し其の苦さを感じないものがあれば、その人の心は既に痺れ、その精神は既に死んで居るのである。自己といふものは生れないのである。

自己のある人には各自獨特の天職といふものがある。これを全うする事に依つて、自己といふものが社會に又宇宙に存在する意義が解つて來るのである。それには境遇の不遇よりも、外見の名譽權勢よりも、財産や地位よりも、先づ根本の自分自身の考といふものを強く深く持つて居らなければならぬ。即ち自己の信念といふものが必要になつて來るのである。

されば信念を得るといふことと、自己の天職を見出すといふこととは、どちらから行つても同じ結果になるものである。

(ロ) 自己の勝利

此の目的を達するための消極の方面をいふと、必要なのは忍耐（時機を待つといふこと）と勇氣（落膽せぬといふこと）の徳である。つまり何處までも目的を捨てず、境遇に支配されない人となることである。此の力を養ふに必要な試金石となるものは、人の世に常に跡を絶たざる人生の悲劇である。世の多くの悲劇が人に與へる困難な経験は、やがてその人に深い喜を経験させる階段となるのである。

古來人間が神の愛に生き、永劫の安心を得て満足なる生活をするに至つたのは、多くは其の人々は人生の悲劇を経験したことに基いて居る。例へば親に死に別れる、愛せらるゝものに逝かれる、斯ういふ悲しい境遇の人々は、嬉しいこと、悲しいことにつけて益々寂寞を感じて來る。併しこれが神の愛を見出す動機となるもので、これは實に、永久無窮の愛を見出さしむるものである。人生には幾多の困難があり悲哀がある。併し又その内に憧憬があり目的がある。それを求めて行く所に困難は益々加はる。けれども堅忍、耐久、目的を捨てず、努力を重ねて泰然として俟つ所に、神と合して得らるゝ所の眞の喜悅があるのである。主義の勝利、目的の勝利を得るのである。これが我に幸福、力、満足を與ふるものであつて、曩には境遇に支配されて居つた自分が、今度は境遇を支配するに至るのである。即ち信念の芽生である、言ひ換ふれば、天職の發見である。

(ハ) 自己の本體と宇宙の實體

さすれば、人間といふものは自分の心の置き所で悲しくも嬉しくもなり、強くも弱くもなる。人間の生活などいふものは本體の知れぬものであるといふ疑をもつてくるかも知れない。それが人間に大切な疑問であつて、つまり人

間の本質といふものは何であるかといふ問題になるのである。

自分は何であるかと、斯う正面まともに自分といふものを突き詰めて行くと、それは人間の一人といふ事になる。そして此の人間の形を備へて居る自分の身體といふものは見逃すことが出来ず、其の外に眼に見える何物もないやうである。それ故或人は此の自分の身體が人間の本體である、即ち宇宙の實體であると信じた。これは科學研究の上から發見した立論であるが、併し此の物質論は、やがて人間の死といふ事に至つて満足なる解決を與へることが出来なくなつた。そこで之に反對して起つたのは、人間の本質は精神即ち形而上のもので、身體はその容器に過ぎぬといふのである。されば自分の本質といへばその身體をいふのではなく、精神、人格、靈魂を自覺することに依つて認められるのであると。この説は多くの人に稍々満足を與ふるものであつた。けれども又あまりに精神萬能で、物質といふものを全く無視した立論なのである。其の説によると、人間の身體も死ぬれば形は無に歸つてしまふではないか。即ち本來の無に歸つたので、身體があると思つたことが既に人間世界の迷である。物質に生命はない。それ故生れるといふことが抑々迷の始である。病氣も實は迷である。死も全く迷である。物の形、物の色、さういふものは宇宙の本質ではないので、凡ての現象は皆人間の迷であるといふのである。併し事實、人生は永劫である。生活も永劫である。又物質も無であると否定することは出来ない。天地の間にありとあるものは、凡て宇宙の事實であるといふことは、誰も認めぬわけには行かぬのである。

茲に第三の説が起つて、物質も精神も其の程度の差こそあれ、凡て此の本質の體現であるといふ説明を以て、此の問題を解決しようとして居る。即ち人間の肉體も精神も全く別物ではない。有形の物質にも本質の體現を認めると同時に、無形の精神にも亦宇宙の本質體現を認めるのであつて、天地間に在りとあるものの凡ては宇宙本質の實體である。それが人間の眼に有形であらうと又無形であらうと、そは本質の體現に變はないのである。同時に人間に生命が

あれば、木にも草にも石にも土にも皆生命があるといふのである。

斯くの如く、自己の本質に就いては種々なる説があるが、要するに今茲に言ふ所の自己の研究を徹底すれば、宇宙の本質は何であるかといふ事も自然に解つて来るのである。又宇宙に體現して居るもの何にてもあれ、たゞ一つのものの研究を推し進めて行つて其處に徹底することが出来たなら、それに依つて同時に自己は何ものであるか、宇宙の本質は何であるかの問題をも解する事が出来るのである。要するに、何處からでも一つの問題を捕へて、それをつき詰めて行けば其處に其のもの本質を見出すであらう。一つのもの本質を見出さば、それは即ち自己の本質、宇宙の本質である。吾等が晝夜に求め知らんとする人間の歸趣、宇宙の歸趣の解決もつく。そして自己は自分に最も近い問題であり、疑問であり、追求であるから自己に對する信念を追求することは、やがて宇宙の實體を知る最初の問題である。

宇宙の本質は自己以外にも無限である。宇宙の現象は幾萬幾億實に無限である。けれども人間の自己の心理に體現する宇宙の本質も亦無限といはねばならぬ。而もこれほど自分に近く、又これほど單純に示された人生問題はない。之をさへ解決すれば何にも他に例を求むる必要はないのである。即ち此の人間の眞理を追求して解決する事が出来たら、眞の人間即ち信念ある人となる事が出来たのである。其處に價値ある人生が造られる。この事は人間生活に最も近い徑路で、又最も單純な事實である。けれども亦同時に人生重大な問題で、人の生死の巷に在る高遠な謎の如きものであつて、人生凡ての創意の基點である。

此の問題に就て多くの人は種々なる研究を試みた。或人は「私に本質の一片を下さい。さうすればあなたに宇内のすべてを見せて上げます」と言つて居る。即ち本質は吾等の意識の一々に籠つて居る。それを信ずることが出来れば、即ち其の意識を以て宇内の自然も神も人の本質も見事が出るのである。一片の本質——人間の眞髓——は凡

ての宇宙を見る眼である。それ故又或人は言つた「私の立つて居る此の土地の一點を下さい、さうすれば私は世界を動かして見ませう」。——（無限の力を得る意味である）テニソンが、草花の唯一つの本質を知る事が出来れば、世界の凡てを知る事が出来るといつて居るのも異口同曲である。

要するに自己の本質とは自分の考へて居る所、感じて居る所がそれである。即ちこれあるが爲めに自分といふものがあるのである。又我あるがために其處に宇宙本質の體現を見、神の體現を見るときも言へるのである。故に本質を知るといふことは、自己の内外にある無限の本質を自覺することである。その思想の眞髓を捕へる事である。そして其の最初に捕へたる一片の本質は、宇宙の凡ての通信を受けるボタンとなるべきものである。

（二） 自己と宇宙との關係

從來科學者は、宇宙を有機物と無機物とに大別して宇宙の説明を試みた。そして其の有機物は生命があるものと、無機物は生命のないものとした。併し今茲にいふが如き説明を以てすれば、宇宙の本質は一つである。生物、無生物の區別はない。それはたゞ現象の差異で、本質に於ては違はないのである。されば「自己の研究」はいと小さい問題である。けれども亦最大なる宇宙解決の鍵である。草花の生命、小石の存在に就いて考へる稚ない疑問は、又同時に宇宙を解決せんとする最初の努力である。自己信念を築く礎である。

そこで我々人間の個人は、宇宙の本質を藏する種子である。此の種子の核を包む層は幾重か重つて居る。芽生せんとする核の邪魔ものは、煩悶、傲慢、不眞面目、利己といふ幾層の外圍である。我々が赤裸々の自己を見出して、其處に自己の信念を築かうとするには、先づ此の外圍を破らなければならぬ。而もその外圍は幾層であらうとも、その中心に藏する核は死なない。即ち人間の意思は何ものといへども奪ふことは出来ないのである。

例へば世界の重さを以てしても、之を挫くことは出来ない。それは宇宙と同じ無限の價値を有する個人の生命であるからである。我々が之を自覺した時に、我々の眞の喜が得られるのである。最大の喜びは無限の喜びである。即ち皮相の自己を失つて眞の自己を見出すのである。されば自我の本質は、叡智直覺から來る神と我との交通する所に見出されるのである。即ち宇宙と共に自發し發展する意志である。これ程富裕なものはない。これ程愉快なものはない。これ程價値あるものはない。此處に即ち自己に對する信念が起るのである。

二 向上信念

(イ) 自然に對する信念の經驗

予の最近十數年間は、殆ど都會生活ばかりであるから、自然に接觸する機會が極めて尠い。たゞ一年中夏期の一句又は數句を、信州輕井澤の白雲翠烟の間に過す習慣になつて居る。予が自然に對する感情を深く養ふのは此處である。尤も幼少の頃は武士的教育の結果、鐵砲を持つて故郷の野山を走り廻り、猪や兎の跡を逐うて獵を樂むといふ風であつたから、求めずとも朝夕自然に接して居つたのである。けれどもそれは鳥獸を征服し自然と戰つたのであつて、未だ自然に親み、自然に抱擁せらるゝといふ溫い感はず味ひ得なかつたのである。然るに輕井澤に於ける自然に對する感情は、それと大に趣を異にするものがある。予が始めて輕井澤に行つたのは十一二年前の事であるが、其の後年々に度數を重ねるに従つて、其の偉大な自然の深い深い境地を益々深く探り得る心地がして、一向に飽く事を知らない。近年は避暑客がだん／＼多く集まつて來るやうであるが、予が始めて行つた頃は、夏さへ人煙稀な山間の一僻地であつた。予は其處で全く世間とかけ離れた自己の生活、自己の研究を試みたのである。

山の木蔭に書物を讀んで居ると、つい二三間前に、山鳩、山鳥などが群をなして飛んで來る。悠然として人を恐れ

ず、又向ふの谷へ飛んで行く。予は此の境地に立つて、嘗ては山へ行けば鐵砲を肩にし、鳥を見れば日頃の手並を試みたいとばかり考へた以前の自分と比べて、自然や動物に對する親みの心が養はれて行く事を思はずには居られなかつた。

予は又此の境地に居る時は、人々との面會も成るべく避けて、只自分一人で生活し、自分一人で研究に集中する事に努めた。相對するものは自然ばかりである。晨に淺間の噴煙を見上げては、雄大なる自然の活力を嘆美せずには居られない。夕に空々漠々の天空を仰ぎ、眼を遮るものもない高原の月や星を眺めては、莫大無限なる神祕の感を懷くのである。此の時何時も予は考へる。——誠に自然は斯くの如くにして人間を抱擁し、人間は斯くの如き崇高なる自然を友として親む事が出来るのである。——然るにたゞ其の境地に到るには、人間の思想があまりに賤しい、低い、狭い、そして淺薄である。若し人間の思想が自然と同じく偉大であるならば、其處には必ず人間と自然との交通が行はれる。人間が自然を解することが出来て、自然はあらゆる優美と崇高とを以て人間を慰め、人間を勵ますであらう。と

十九世紀文明の著しい特徴は自然研究に原因する。彼の進化説の大發見も此の世紀である。此の自然研究に基いて、即ち人間が自然の祕密を發見した程度に従つて、其の時代々々の美術、宗教、哲學、政治、社會政策、教育、凡てのものゝ進歩の跡が見える。如何なる偉人も、如何なる學者も常に敬虔の念を以て自然に對し、自然からいろいろと學んで居る。人間が自我を研究し自我を進めて行くのには、必ず其處に自然との交渉が起らねばならぬ。即ち自然から學ぶのである。自然を解するのである。自然を讀むのである。ところが人間には昔からの諺に「論語讀みの論語知らず」といふことがあるやうに、これほど日常自然に接して居りながら、自然が語つて居る意味を解せない者が澤山ある。書物も其の文字が語る所の意味を正直に解する事が出来て價值あるものとなるので自然が示す様々の現象

は、自然の意義を描き示す表徴であるからこれを讀んで始めて人間も自然の意義を體得するのである。今まで祕密になつて居つた世界を其處に發見するのである。

自然は幾世紀の久しき間、悠然自若として動かないやうに見へるが、實は時々刻々に變化して居るのである。たゞこれに接する人間の理解が、其の外面にのみ止まると、其の内面に及ぶのとの差である。書物を素讀するのと、之を理解して實行するのとの違と同じである。十九世紀文明は自然の研究である。即ち科學的研究の態度を以て、微細に自然の現象を分解し説明した。其處に多くの發見があつた。けれども量り知られぬ自然の祕密は、たゞ其の物質現象にのみ止まらない。元來物質は其の本質の表徴であつて、自然の意義を描く書物である。此の書物を讀んで其の深遠なる思想を了解しなければならぬ。其處に多くの發見が残されて居る。其處に人間の自發的生活が拓かれて行かなければならない。其處に新しい創造がある。此の創造こそは今世紀の新藝術であり、新宗教となるべきものである。自然の悠久を最も強く感ぜしむるものは天體である。殊に夜の星である。彼の無數に見える光の中には、幾千萬年前に發した幾億萬里外に在る星の光もある。エマソンは言つて居る。

「空氣の透明なるは、彼の諸々の天體に依つて、崇高の美の永久に存在することを人に知らしめんが爲めである」

「若しこれらの星が一千年に只一夜しか現れないものであれば、人は如何ばかり其の奇蹟的榮光を歡ぶであらうぞ。又如何にそれを語りつくことであらうぞ。併し此等の美の使節は夜毎に現れて微笑むが如く宇宙を照して居る」

と。併しこれは星のみではない。凡ての事物、何れの時間も何れの季節も——若し人間に於て眞に心を拓いて觀るならば——皆これに似た感銘を與へるものである。そして自然も人間も均しく生命ある同族であるといふ親みの念を禁

じ得ない。而も自然の美は崇高である。自然は決して卑陋な容貌を表さない。見苦しい着物を着けない。之に對すれば自ら敬虔の念が起る。如何なる賢者も、その秘密を見盡して遂に崇拜の念を失ふといふが如きことは無いのである。左に再びエマソンが自然に對する眞情を語つて居る一節を引用して見よう。

「自然は決して卑陋な容貌を表さない。最も賢い人でも自然の祕密を奪ひ、自然の完全を悉く見盡して好奇心を失ふが如きことはない。自然は未だ賢者の玩具となつた事はないのである。花や、動物や、山や、賢者の幼時の單純な心を喜ばしたと等しく、彼の最も圓熟した時代の智慧をば反映する」

「自然に就いてかく語る時、吾々は心中に或明確な、而も最も詩的な感を覺える。但し此の感銘の差は、樵夫の伐る一個の材木と、詩人の見る樹木との間に區別を生ずる差である。予は今朝、二三十の農園から成り立つて居る愛すべき景色を眺めて居る。某氏甲は此の畑を所有し、某氏乙はかの畑を所有し、又某氏丙は向ふの森林地を所有して居る。併し此等の中、誰一人も此の風景を所有するものではないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分を、全きものに統べて觀ることの出来る活眼あるものの外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。即ち斯くの如きを所有する人は詩人である。此の財産こそ、此等三人の農園に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證明書は、此の財産に對しては何等の權利を與へぬのである」

「現實の悲哀に暮るゝ身も、自然の面前に立てば、奔放なる喜悅の情が其の身内に流れる」
斯く詩人、哲學者は、藝術家、此の自然の畫を感得した時の、止むに止まれぬ喜悅の情を、その創作及び製作に表すのである。斯くの如く、自然の感化は實に無際限である。

(口) 自然が暗示する宇宙の問題

自然はさまざまの問題を提供して、人間の注意を引きつけようとして居るやうである。予は心靜に自然に對する時、子の頭腦の中には一物のわだかまりもなくなる。現實生活の煩瑣を脱して、識らず知らず思想の世界を辿つて行くのである。壯美な感情、悠久な感情が子の心の底を流れて來る。即ち、自然は常に絶對の世界を暗示して居る。靈に於て何物かを語つて居る。予は先づ自然が提供する第一の問題を解かうと思ふ。それは自然（物質界）には生命があるかといふ問題である。

人間の身體と精神が研究された結果、身體が働いて居る時は、精神の動いて居る時である。精神の活く時は身體も休んで居ないといふことを知つて來たのである。凡てのものは皆力であつて、力は凡ての活きの根本である。即ち精神は身體に移り、身體は又精神に活く——嬉しい、悲しい、痛いといふ感などが其の人々の顔色に動く。顔色の動を見て精神の動を見ることが出来る。——これは皆意識と身體との間に起る關係である。

そこで自然は宇宙の意識を映す身體である、宇宙の意識は自然に反映する。されば、又自然の活動は宇宙の意識である。即ち自然の力といふはその意識の表現である。かの、美しく可憐に咲く野の花にも、其處に自然の意識の表現を思はずには居られない。その形、その色は、花を以て表現する自然意識の表情である。人間はその表現を見て自然の神祕の情を受け入れ自然は其の情をさまざまに表現するのである。又彼の悠久無限に見ゆる天體も常に變化して居る。人間の眼には恰も靜止するが如くに映り、恰も死の如く見ゆるものも、皆其の中に動き活く力——意識——を持つて居らぬものはない。世界の萬物は皆人間と均しく生きたものであり、生命あるものである。この生命といふは絶對不朽の宇宙の意識である。斯ういふと人々は再び考へざるを得ないであらう。宇宙の意識とは何であるかと。

宇宙の意識とは宇宙の本質をさして言ふのであつて、又絶對思想ともいふことが出来る。人間が自然に對する時、

其の心境は清淨になる。そして其の自然の感化力は、無言の中に煩瑣なる俗界との交通を隔離せしめ、人間の想像力のある限り、其の思想の翼を擴げしめ、心靈の向上する極度にまで之を導き行く。そして誰も斯くの如き境遇に置かるゝ時、必ず多少（程度）何物か神聖なる感に觸れ、自らも亦神聖なるものとならざるを得ないやうになるのである。これは初めて絶対といふものに觸れたので、即ち絶対の思想を了解しかけたのである。今までは物質の關係といふだけの外は、何にも氣づかなかつた自分が、始めて物質以外の何物かを見、何物かを知覺し、何物かを了解するところが出來た時、始めて物質のみの關係は絶対意識から言へば、極めて遠い末技であつて、寧ろ生命には關係のない一場の夢の如きものであるといふことを悟るであらう。此の夢の世界から醒めた時に、自己の實在を見出すを得るのである。即ち物質——時間と空間とを含む——を超越した所に、不老不死の生命のあることを感得するのである。それが所謂絶対意識である、絶対の思想である。

(ハ) 自然は思想の産物である

此の思想こそは、無始の古から存在したものであつて、太古以來宇宙の諸現象は、此の思想を書き表して居るのである。即ち自然は思想の産物である。思想あつて自然が出來た。人間にも亦思想があつて、始めてこの自然に現れた思想を讀むことが出来るのである。

されば人間の直接の知識といふは、必ず吾心理状態である。即ち自然の思想を讀み得た程度に有するものである。それ故世界の思想の變遷するといふのは、人間が自然の思想をある一定の程度まで讀み了へて、より以上に進まうとする時に起る進歩のあとである。ショーペンハウエルは次の如く言つて居る。

「世界は理想である。理想は意志である。即ち目的的世界である。吾人が目的を持つ如く、世界も亦目的を持つ

て進んで居る。それ故世界と吾人とは互に了解し合ふことが出来る。吾人が知るといふことが出来、考へるといふことが出来るのは、これあるが爲めである。」

今日の所謂世界の知識の根元は、皆宇宙にあるのである。宇宙は凡ての知識の原書である。人間は之を翻譯し、此の書を読み其の思想を了解し、その心理状態と同じ形にならんとし、且つなりつゝあるのである。凡てのものの中には必ず思想がある。此の思想を悟らねば、人間の眞の生活は出来ない。此の意味が解つて、始めて人間生活の發達向上が出来るのである。つまり今日の科學の發見は、即ち自然の書を繙き、宇宙の思想の一部を發見したのである。

(二) 思想の交通

所謂、天啓といふは、人間が天地自然の思想を正しく讀むことである。之によつて、科學者も、哲學者も、文學者も、人生に新發見を齎し、新創作を生むのである。

「吾人は神の思想を繰返して考へるのであつて、科學の眞理も嘗ては昔一度書かれたものである。神の思想は吾人が之を讀む時、恰も地中に埋められたる寶を掘り出す如く、吾人の思想に翻譯せらるゝのである。言ひ換ふれば、宇宙の思想が吾人を通じて表現するのである。」

と一哲學者は言つて居るが、數學者も屢々これと同じ意味で「自然の中にも偉大なる知的概念が充ちて居る」を驚歎して居る。

されば神は到る處に——天の高きにも、海の深きにも、空氣の中にも——存在するといふのは、神が思想であるからである。思想である神を體現する自然界は、又勿論宇宙の思想である。天地は凡て此の思想の體現ならざるはなく、人間もまた此の思想の體現であつて、この完全に進まうとして居るのである。

されば科學者を通じて表現さるゝ自然の思想は、自然研究の實を結ぶのである。詩人、畫家、彫刻家、音樂家、建築家を經て表現さるる自然の思想は、藝術の光輝を放つに至るのである。殊に藝術は宇宙の最大最深なる表現である。宇宙の思想を最もよく讀み、深く感じたる印象を最も調和したる美の形式に依つて表現するものは眞の藝術である。一片の木の葉、一條の光、一幅の風景、高い山岳、廣い海、此等に表現したる宇宙の思想は、人さまざまに相似たる感銘を與へる。けれども藝術家は其の最も深き思想を讀み、之を新しき形式に創作し、表現するのである。故に自然の本質を解し得らるゝ人を得て藝術は進歩し、人生は向上するのである。言ひ換ふれば宇宙の本質を讀み得る人が、眞に自然の思想をも讀む人であり、又眞の藝術をも解する人である。

藝術は人間の直觀的創意に成るものである。即ち人間世界のさまざまなる翻譯や説明にのみ囚はれずして、直ちに思想を讀み本質を捉へ得るにあらざれば、藝術は味はふ事が出來ないのである。所謂自然の暗示を受けるといふことは、人間がよくその思想を讀み、自然を愛し、自然を知り、その自然と自己の思想の交通の儀に外ならないのである。

美は自然の感情である。詩人は此の自然の感情を讀み、此の自然の美を所有する人である。つまり藝術家は自然の感情を感受し、これをさまざまの形式に發表するのであるから、其の藝術は自然の感情の表現であると同時に、その藝術家の感情であるといひ得るのである。さまざまの形、さまざまの色は、皆自然の思想感情の表現でないものはない。故に藝術の産物は、とりも直さず宇宙の本質を書いた書物である。

(ホ) 自然は人を天性に歸らしむ

斯ういふことは誰も驕げに感じては居るけれども、たゞ漠然と見逃してしまふのである。が、今茲に、靜に自然に

接する機會があつて、其の充溢した自然の愛の默示に氣がつくと、誰もその日頃の疑問を追究せずには居られない。

靜穩なる風景の中に立つと、人は何となく恰も天性に歸るが如く美しい感情に歸る。そして其の時眼に映る野や山や崑や森は、恰も其れ等の自然と人間との間にある、不可思議なる關係を暗示するやうである。其の時自分の頭には孤獨といふ感は少しもない。草も木も皆知己である。野も山も清新な姿を以て接する舊友である。此の時人々が受け感應は、所謂高尚なる思想、高尚なる理性と信仰とである。草木と人間とは均しく偉大なるものゝ一部で、その間に何の差があらうぞ。若し暴風が靜穩なる空を荒す事があれば、人間の恐怖も彼等草木の恐怖も同じであらう。又日光の照り輝く下に喜悅の日を送るならば、人間の幸福も彼等の幸福の心と通ふであらう。自然の愛は何處如何なる處にも表れて居る。そしてそれは宇宙の目的々意志である。人々は此の思想意志を感受し得る程度に於て、今日の世界の文明を生み、今日の人類の活動を永久に進歩向上せしむるのである。

それ故凡ての基礎は勿論、自然の秘する思想意志に在る。けれども、これを人生に實現するのは、寧ろ此の思想意志を感受する人々の思想の調和に在るといはねばならぬ。感應する人々の思想の價値に依つて、自然は或は大きく、或は小さく、或は優美に、或は憂鬱に、或は愛に、或は冷酷に表るゝであらう。

第五章 信念と信仰（宗教信念）

一 絶對とは何ぞや

我々が絶對と名づくる、かの言葉に盡し難い宇宙の本質に就いて、その具體的説明を求むるものがあつたとして

も、それはたゞその體現象徴である所の自然の姿、形に就いていふの外はない。恰も人間の心とはどんなものであるか、といふ間に對して、我々の肉體及びその行爲によりて證明するの外はないのと同じである。我々が體と心といふ二にして一の人間といふものを成して居るやうに、宇宙も亦形に表れた宇宙と、形に見えぬ靈との二にして一のものである。たゞ我々人間は、何事も形に見ねば満足する事の出來ぬ習慣に囚はれて居て、形のないものを直ちに觀る事は出來ない。それ故形に見ることの出來る一方面と、形に見ることの出來ぬ他の方面との關係を探つて形無きものを觀、限り無きものを知る修養を積んで行かなければならぬ。但し此の關係が解らねば、我々自分の體と心の關係も解らず、従つて人間の感覺以上、有形無限の外の想像の世界、靈の世界、信仰の世界を知ることには出來ない。

二 宇宙の普遍的秩序と法則

具體的に表れて居る宇宙の形と人間の體、それに無形なる宇宙の靈と人間の心、それらを考へて見ると、普遍的秩序が全體に通じて居る。我等は此の普遍的秩序に馴れて了つて、その力が何處から來てゐるかなど一向に問ひもせず、不思議を不思議と思はないのである。けれどもかの所謂天の配劑の周到綿密については、數々讚美の言を聴くではないか。我等の肉體を見ても、その一絲亂れざる微妙なる活きは、人爲の動かし得ざる秩序ではないか。ジョージ・ハーバートといふ詩人は、此の微妙な構造を嘆美して次のやうに謳つて居る。

人の身體は悉く均齊にして、

釣合はざる所なし。右の手は左の手と、又凡ての部分は世界の全部と釣合ふ。

而して何れの部分も最も遠きに隔つるものをも、兄弟といひ得べし。

それ人知れぬ親睦の、頭と足ともあればなり。

また頭と足とは月と潮とも親睦をもてばなり。

又

我等のために風は吹き、

大地は休み、天は動き、泉は流る。

眼に見ゆるものは悉く吾等の利益となり、娛樂となり、實となる。

宇宙全體は糧を供ふる戸棚か、

はた吾等の娛樂室か。

星は吾等を寢床に誘ひ、

夜は窓掛を引き、日はそれを取り去る。

おゝ偉なるかな神の愛！ 人は一つの世界にてなほ己に侍く他の世界をも有てり。

斯くの如く、我等の體は決して無秩序無關係のものではない。肉體と心とは、二つの方面から説明こそすれ、實は離すことの出來ぬ一の調和體であつて、我等はこれを有機的關係といふのである。此の關係を知らんとして人は生理を學び、解剖を調べ、人間を論じ、自然を研究するのである。即ち宇宙を學ぶ爲めに、其の生理關係を學び、その解剖をするやうなものである。自然の姿と宇宙の靈との關係も、亦人間の肉體と靈との關係と同じである。勿論人間の

肉體にも、自然の姿にも、人間の心にも、宇宙の靈にも、凡てのものに通じて同じ秩序、同じ法則が行はれて居るからである。之を指して宇宙の普遍的秩序といふのである。

此の法則によりて、宇宙の凡ては統一されて居る。さればこれは抽象して出來た觀念ではあるけれども、所謂抽象ではないのである。實に世界の事實であり、絶對の眞理であるのである。

三 絶對は思想なり

外圍（自然）は内的世界（靈）の幻影である。といふのは、自然の世界も靈の世界も一つのものであるといふ意味である。もつと近いものに喩へて言へば、人間の肉體も心も一つであるといふことになるのである。それ故絶對は思想であるといふ時には、無形の靈の世界をも、亦有形の自然界をもさしていふのである。

そこでの靈の世界に秩序法則がある如く、自然の世界にも秩序法則があるといふことは、例へば天體の運行や、氣候の變移、風雨の原則の如きものを見ても明である。茲に於て、宇宙の思想を實現したものは自然であるといふ事が出来る。即ち絶對は一つの大思想であつて、其の思想を種々に實現したものが形に見える世界であり、人生であるのである。

斯くの如く、絶對は一つの目的に統一されて行く思想である。その目的を實現せんとする凡ての計畫があつて、此の計畫を立てる所に宇宙の秩序といふものが出来るのである。即ち、宇宙は常に目的を迫行し進化した居るのである。天地は悠々として靜なるが如く見えるけれども、其の中には常に目的に向ひて進行せんとする烈しい活動力が、地球の中心の熱火の如くに燃えて居る。これ即ち人間生活と宇宙の大目的と相一致し得る所以である。

四 絶對は感覺なり

前述の如く宇宙絶對は思想であるといひ得る如く、又感覺感情であるともいふことが出来る。即ち宇宙と、吾等人間の身體とに就いて考へて見ると、宇宙の身體である自然は、絶對の感覺感情の表徴であるといふ事を了解するのである。尤も植物以下無機體に就いていふと、その感覺は眠つて居り、その感情は動かないやうに見えるけれども、それは人間の眼に映る程度の差であつて、實は一つとして生命のないものはない。生命といふは感情であつて、自然に體現する美の根本である。——例へばかの雨の音、風の聲は、無心の如く、又有意の如く、吾等人間の感情を刺戟する。此の音が人間の耳に震動を與ふる力の根本は、即ち宇宙に充溢する生命の波動である。

されば無心に輝く日の光、冷くそゞ雨の音も、皆絶對の感情表現である。春、夏、秋、冬、四季さまざまに變る美觀、山岳、都市、千狀萬態の光景に對して、我等が感ずる壯嚴の感、敬虔の念は、皆自然の感情の表れから與へらるゝ人間の同感共鳴である。此の感情が、形に色に、空間的關係に表れたものが繪畫、彫刻、自然の藝術である。是れ即ち吾人をして、絶對は感情であると言はしめた所以である。中にも此の自然の感情を最もよく表現して居るものは音樂的藝術である。——雨の音、風の響、蟲の聲、鳥の囀り、皆此の天地自然の感情を謳ふものであつて、彼のベトーベン・ワグナーの音樂も、自然より與へられたる感情の自由を以て創造したものである。

宇宙絶對の感情は、音樂に表れる如く宇宙の凡てのものにも同じく表れて居るのである。唯これを聞き得ないのは人間の耳の感覺が不完全である爲めである。

昔聖人は、鳥の聲を解し、鳥と話をしたといふことであるが、是等は必ずしも架空な傳説ではあるまいと思ふ。如何なるものゝ中にも絶對の感情は動いて居る。此の感情のさゝやきが、或ものには聲となり律となりて、人々の感覺

に訴へるのである。之を以ても、矢張り絶對は感情であるといふことが出来る。即ち音楽は根本的に自然の感情に起因して居る。宇宙は又此の感情的調和であるといふことが出来る。

そこで宇宙の音楽は、絶對の感情が人間の感情に訴へる聲、精神と精神が共に相喜び相樂むところの感情の共鳴である。即ち音調に表れたる自然の美、絶對の美の要素である。されば吾人が絶對と合體する——神の經驗を了解するといふこと——は先づ此の音楽から受ける感情に依つて、初めてその境域に入ることが出来るといふものであらう。更に今一步高調に達したる感覺は、道德的感情——言ひ換ふれば最高の精神的價値である。これを名づけて善、或は善意志、或は高尚なる感覺といひ、この感覺の發達したるものを良心と名づける。所謂道德的生活、愛の生活といふのと同じことであつて、吾等人間の生活の最高要素である。此の感情は凡ての感情の調和したもので、即ち他愛の生活である。絶對に奉仕したる満足の狀態、人間最上の幸福生活、信仰生活である。

五 絶對は意志なり

人間は常に何物かを求めて居る。即ち我等は常に何物かを要求し追求し憧憬して止まない。さうして其の求むる心を集中して居る。否自然に其處に引きつけられて行くのである。内より外に展びんとする心はそれである。即ち人間の自發力である。此の力は徒に盲目的に走るものとは違つて、常に目的を有する所のものである。即ち理想實現の力、生の發展を欲する所の力である。これは人間の凡ての力の根柢であつて、その感覺感情がよく整理統一した時の調和された力であつて、意志と名づける所のものである。此の力は人間の力の根柢といつてもよいほどのもので同時に又宇宙の根柢であるとも言ふことが出来る。

前にも述べたやうに、絶對は思想である。又感覺である。又力である。これ等のものは宇宙に充滿して居るのであ

つて、而も此の力の動く處は常に目的を有し理想を有し、それを實現發展せんとして居る。恰も人間が常に何物か目的を見出して、それに向つて追求憧憬するが如くに、絶對の力も亦不斷にその目的に向つて進行して居るのである。是れ即ち絶對の意志、絶對の思想と名づくべきものである。而して其の絶對意志の力の實現するといふ事は、取りも直さずこれ等凡ての力を永久に保留する力それである。

我等の眼に映ずる宇宙は、即ち此の過去の力の習慣力で出來た世界の物質である。宇宙の力は自由選擇が出来るものであつて、目的にかなふものは保留し、かなはざるものは自然に放棄せらるるのである。即ち理想目的にかなつたものを選定し、これと反するものを制御する力がある。恰も吾人の目的に向つて集中し、目的に對する自由選擇の力を有するが如く、宇宙にもこれと同質の力があるのである。

六 我は絶對と共に生く

以上の如く、我等人間の本質は、自然が示す宇宙の本質と同じものである。言ひ換ふれば、吾等の憧憬する絶對神の本質は、吾等人間の本质と同一のものである。但し其の體現の差、程度の差はある。而して我等は、常に人間として假に限られたるその制限をより減じ、障害をより解除して、かの無限の絶對、無差別の神と共に生きんことを欲求して居る。然し又其の絶對と人間とその體現する所の異なる如く、此の兩者の間は隔たつて居る。されば人間が絶對本質を知らんとすれば、たゞ其の間の中介者に依るの外はない。而して其の中介となるもの示す所を、客觀的に又主觀的に研究し追求したる結果は、如上の如く（一）絶對は思想であり、又（二）感情即ち愛であり、又（三）意志である、といふことを信ずることが出来るのである。

但し此の要素は、たゞ我等が了解の便利の爲めに三つに分つたものであつて、實は別々に説明することは出来ない

ものである。何となれば、此等は決して分解し難き、調和統一されたる無限の生命であるからである。生きたる有機的關係であるからである。これは空想でも抽象でもない、眞に宇宙の普遍的本質である。此の普遍より生れて特殊の活きを表したものが吾等人間である。

七 絶對は完全無限の人格

絶對は普遍である。かの神在さざる所なしといひ、又如何なる人にも内在の神を認めることが出来るといふはそれであつて、神は即ち無限完全なる人格である。されば神の光を見、絶對と共に生くといふことは、其の本質の一點を見出してこれに觸るゝことである。其の一點は何であるかといふと、即ち我自身である。自分といふ鍵を以て開けば即ち絶對に觸れ、神を見る事が出来るのである。そして又他の一つの方面では、我自身が神を體現することである。神の思想を我が思想とし、神の感覺を我が感覺とし、神の愛を我の愛とし、神と共に考へ、神と共に語るといふことである。

第六章 信念と人格（信念生活の歸趣）

一 如何にして信念を體得するか

顧みれば、我等に若し我等の精神を統一すべき何ものもなかつたならば、其の日常の修養生活は如何ばかり不安なものであらう。そして此の貧弱なる知識と經驗を以て、變化極まりなき人生の行路を辿つて行くのは、恰も盲人が杖

もなくさまよひ歩くのと同じである。不安、孤獨、煩悶、自暴自棄は相蹊いでくる事は當然の道筋である。實に人間は生れながらにしてその孤獨を厭ひ、その不安を恐れ、その煩悶を忌むのである。そして常に不安より安心に、煩悶より大悟に、孤獨より愛の生活に入らんことを追求渴望して居る。信念生活はその追求渴望する理想に達せんとする修養生活の中心問題であつて、これは人生の活動になくてならぬ原動力である。即ち信念を體得するといふことは生死活の問題であつて、人の眞の満足も失敗も此の中に横はつて居るのである。

されば、我等は如何にしてこの信念生活に入るかを考へなければならぬ。言ひ換ふれば、我等は如何にして我が人格に信念を體得し得るかといふことである。即ち神（宇宙、絶對）の心をわが心として、神と共に働き、神と共に進化するといふことである。これは信念研究の最後に到達すべき問題である。

言ふまでもなく我等人間の自己は、極めて微弱である。けれども常に創造的であり、向上的であり、進化的である。この創造し向上し進化して行くといふことは、人間本來の性質であると同時に、宇宙の法則であり、神の進化的方面である。されば人間が其心の芽を育て、その理想を追求し、進化發展して行くことは、即ち神と共同し、宇宙の法則に調和合體することであつて、取りも直さず神の心を心とし、神の生命の永久と共に、人間も亦永久生命に入ることが出来るのである。其の生活は常に信仰であり、希望であり、創造であり、進化である。即ち信念生活である。

人の、斯くの如き微妙なる精神的震動は、如何にして何處より來るのであるかといふと、それは即ち人間に與へられた感情の根本活力である。此の力が神の暗示を受け、神の心を感じ、神の意志を體得するのである。此の根本活力は人間の意志の力となつて、其處に思想が湧き、目的が立ち、計畫が出来て、人間生活の活動實行となるのである。

そこで、人間といふものゝ一面には、宇宙の法則と共に絶對の權威を持して、他の何物にも侵されず、他に依囑せず、獨立獨歩自發的活動を營むものであるが、その自發的活動たるや、又宇宙の法則と同じく孤立して生長發達する

といふことは出来ない。それは物質的にも精神的にも、決して初より孤立して生れ、孤立して生長するものではない。人と人、物と物とは必ず相關係し、相互に影響を及ぼして、始めて其の生長を助け、其の發展を促がして居るといふことは、今茲に更めて例證を擧ぐるまでもないことであらう。即ち人間の力の根柢は感情である。その感情の力は孤立して居るものではない。或ものに與へらるゝ無形の精神的震動の力、精神的傳播の力である。

されば茲に言ふ信念生活も、或意味から言へば人間の精神的獨立生活とも云ひ得るものである。けれども、此の獨立といふ意味は、決して人を離れ、社會を離れ、神を離れて孤立無關係になることを言ふのではない。内なる心の發動創造の獨立である。これは人間各自の天職獨特の個性である。此の個性は孤立獨立で生長發展するものではない。必ず他の誘導關係によりて始めて啓發されるものである。併しそれは必ずしも有形に具體的の媒介を俟たず、よく無形の媒介によりても感應することが出来る。即ち心と心の活き、氣分と氣分の傳播、所謂暗示といふものを受け入れることが出来るのである。言ひ換ふれば、精神と精神の交通である。自己の精神と、自己以外の普遍的な精神と交通し感應する活きである。これは人間の直感力といふものである。

二 物質幻影説

ところで之れに對して又種々極端なる説もある。或一派の説では

「人間の活きの中にも、其の最も高尚なる活動とする所の精神作用が、凡て直感を以て行くものならば、その外形即ち人の身體といふものは、無用の長物ではないか、殊に人は其の身體より様々の苦しみ、病氣、煩悶を作るではないか。さうすれば無用物であるばかりでなく、却つて人間の罪惡を生む邪魔物である。されば理想に生きんとする者は、必ず先づ此の身體といふ邪魔物を取り除いた方がよい」

といふのである。此の説は唯心論者又一元論者の間では勢力ある説であつて、彼のエッチー夫人のクリスチャンサイエンスなどは、多く此の説に基いたものである。その説に

「神と精神（靈）は永久のものである。身體と物質とは無である、幻影である」と言つて居る。又曰く

「試みにその確信を以てすれば、かの人間が惱まざるゝ病氣も決して苦にならない。煩悶も何も起らない。何故ならば、それ等は皆幻影であるからである。物質は實體ではない、迷である。人間が想像で作つた習慣的概念である。迷信である。これを信じさへしなければ、即ちその精神から離してしまへば病氣も煩悶もない。言ひ換へれば、人間に病氣といふことがあるといふ信仰を止めさへすれば病氣は癒る」

といふのである。此の主張する所は、人間の病氣ばかりではない、それに對する身體の健康といふことも實はないのである。空氣もない、世界といふものもない。天體といふものもない。それ等物質は皆吾等人間の幻影である。形に見えるといふことばかりが幻影ではない。無くなること、人間の死といふことも習慣的に信じた一種の迷信に過ぎない。此の死ぬといふ迷信を去りさへすれば、人間に死といふことはない。宇宙には生きるといふことより外に何物もないと信するのである。つまり宇宙間にありとある物質界の現象は、人間の心が妄りに作り出した誤謬であるとするのである。しかし我等はこの説を全く信ずることは出来ない。

既に如上の各章に於て述べた如く、宇宙の靈界に對する自然界、人の精神に對する肉體といふものは、靈（神）の表徴たる自然であるが如く、精神を形に表す所の人間の肉體であるが故に、これを離して考へることはどうしても出来ないものである。のみならず、寧ろ精神の芽はその身體といふ畑がなくては生長もせず發展もしない。それ故身體は精神と共になくてはならぬ人間靈性の一面である。尠くとも精神活動に必要な材料である。又凡ての物質はそれを

利用するに従つて、前にも述べたやうに、精神界の電線となるものである。又直ちに精神の發現といひ得るのである。

斯くの如く、身體と精神とは絶対に無關係のものではない。唯精神界の法則には自由があり、不休の生長發展があり、常に進歩し、常に動的であるのに比べて、物質界の法則は、一定の型を成して固定的である。さうすると茲に死といふ問題が起つて来る。一つは無窮で一つは有限である。此の二つをどうしても離して考ふことが出来ぬものとするれば、其處に兩者の調和すべき點を見出さなければならぬ。身體と精神との關係、靈界と物質界との關係を、更に明瞭に了解しなければならぬ。

三 神と我（自己）との關係

神と人間との關係は有情的である。此の感情が互に生きかけ生き合ふことを、神と人との交通が出来たといふのである。其處には信賴があり友情があるのである。

それ故、神と人との關係は遠いものゝやうに考へられてゐるけれども、實は最も近いのである。即ち神と共に考へ、神に相談し、神と相互の感情的生活が出来、神と共に創造的生活が出来るのである。

次に、その神と我との感情又は意志を發表する上に大切なる精神生活、即ち自他との精神關係も亦個的になつて表るゝものである。神と我と、即ち普遍（神）と普遍の一部分（人間）とが相愛し相信するといふことは、我等の日常生活に於ける兄弟關係、父子關係、夫婦關係、友情關係等の理想的愛の生活が行はれ徹底することに依つて、始めて行はるゝものである。つまり神と我との關係も、これ等の關係と同じものであるからである。

第三には神と我との關係は、以上の如く常に普遍より個性に向つてのみ活く感情ばかりではなく、或場合には反對

に、個的より普遍に向つて活く意志ともなるのである。神と我との感情が相交通する時、それはやがて意志の力となり、目的となり、創造力となるのである。即ち人間世界の美術、音楽、教育は、すべて神の感情を讀むことに依つて作りなす人間の創造である。この創造は、人々の自己の生活及び自己の社會國家に對して活くと同時に、宇宙の創造となるものである。つまり個的から普遍的に擴大するのである。これが神の普遍的愛である。即ち精神の調和者、人格の調和者のつくりなす世界である。或人はこれを天國と呼び、或人はこれを極樂と名づける。即ち理想的愛の實現せる世界である。理想的人格の調和せる形である。人の信念生活の歸趣は此處に在るのである。

四 暗示の經驗

然らば我等の日常生活に於て、果して以上の如き神と我との關係を保ち、神の考を考へ、神の計畫を以て自己の日常の生活として行くことが出來得るであらうか。つまり斯くの如きことは天才の發現を俟たねば出來得ることではないやうに考へられるのである。然り天才でなくては此の神人合體の生活は出來ない。天籟の聲を聞き神の默示を悟るといふことは、形式に依つて受け得らるゝものではないからである。故に若し凡ての人々が此の精神に達せんとならば、彼の天才の發現するが如くに、内なる個的の感情が動いて來なければならぬ。

そこで感情といふものは、もとより固定的のものではなく常に流動して居る。而もその力は無際限である。これが即ち天才となる力である。又此の力の無限に出る活きを人間の自發力とかいふのである。それ故天才といふことは、畢竟、人間の本質たる情緒、情操の力が自發發展することをいふのである。言ひ換ふれば、我等の人格を偉大にするものは經驗であつて、その經驗は感情の發動から起るのである。されば感情は凡ての力の根源である。(但し此の感情の發動といふことは、感情の盲動ではない。情の克己修養に依るものであるといふことは言ふまでもない。)例へ

ば感情は蒸氣汽關の如きもので、軌道や機械に動力を與へて、價值ある活動を爲さしめるのである。ところで人間が欲求する所の力といふのは、此の動力の如きものであつて、これを集中し制御統一するものは意志である。意志は即ち軌道ともなり機械ともなる力である。

されば暗示を受けるといふことも、矢張り自發的でなくてはならぬのであるが、それは即ち天才的熱情が内に燃えて來れば誰れにも其の力が發現するのであつて、其處に信念も得られるのである。そしてそれを眞に人格とし、日常生活の上に表すことも出来るやうになるのである。

五 生活の歸趣

さて我等が眞に人生の意義を全ふして、その價値の満足を得るといふことは、言ひ換ふればわれ等の感情の満足を得るといふことである。これが即ち我々の要求であり、又神の本質である。

そこで我等人間が神と交り、神と融合し、或は合體し、或は大我に入るといふことは、つまり神の感情を我に感じ、神の心を眞に理解し、神の情と我が情とが一つになるといふことである。即ち宇宙の大潮流と我等人間個體的さゝやかなる小川の流れが、其處にそそいで行つて一つになることである。

此の大なる力と合し、その交通が出来るといふことが人間に不思議なる力を與へ、人間の世界に奇蹟を表すものである。かの天才の發現といふは即ちこの神人合體したる不思議なる力をいふに外ならぬのである。

而も人間は神が作り與へた藝術である。我等の身體、我等の特性、我等の人格は神の大藝術に到達すべき要素を備へて居るのである。此の個體的の人格の経験を積み重ねて、その人格を築き擴大して行くところの精神的生涯は、必ず神と合體すべき宇宙の法則の下に在るのである。

いふまでもなく、神は知らざることなく、到らざることなき全きものである。而もその完全は凡ての特種、凡ての要素、凡ての種類が融合した完全無缺の調和體であつて、複雑極まるものゝ融合である。人間も亦斯くの如き氣分、斯くの如き調和、斯くの如き經驗を得ようとするのが生活の理想である。同時に人間の修養である。人格生活の歸趣である。

六 生活即藝術

我等は臆げながらも人生の歸趣を見出すことが出來た。さすれば此の上は如何に生活すべきかの直接問題、即ち生活の理想實行、即ち生活の藝術を知らねばならぬ。

抑々凡ての藝術は人生の表徴である。人はこれに依りて神に接し神を見るのである。繪畫彫刻及び自然の美は、形と色との空間的關係を以て絶對を表徴する人生の藝術である。人はこれに依りて神の感覺を受け暗示を受けるのである。

人生を最もよく表徴する藝術は音楽である。音楽は時間的關係を以て表徴する藝術であつて、喜怒哀樂、崇高壯嚴の情を無形の震動に依つて細微に傳へるものである。恰も無形の感情を表はすに最も適切なる直感的藝術といふ事が出来る。

又音楽の律は、恰も人生生活の律を表徴して居るのである。我々人間の生命は流れのやうなものであつて、常に動いて已む時はない。この流れは或は急激に、或は緩慢に、或は高調に、或は低音に、自ら律をなして居るのである。この人生の調和ハモニーが出来る所に、眞の人生の歸趣を見出すのであつて、音楽も亦調和に依つて始めて生命あるものを作り出す事が出来るのである。されば恰も人生の時間空間の關係を表すべき藝術は、この音楽であると言ふべきであ

る。

斯くの如くにして人生の調律を語り、斯くの如くにして人生の歸一コンユートを教へ、斯くの如くにして動的なる人生を表徴して居る。人の生活はこの音律を調べて行くやうなものであつて、而もその調律の高きを貴ぶのである。而して、我等は人生の最も高き調律に生きんことを欲するものである。

生活篇

第一章 婦人の天職

一 性の研究

特に婦人の職分使命に就いて考へる場合に、先づ研究しなければならぬことは、男女關係の問題、兩性の相違、兩性の一致の問題である。此等の關係を知らなければ、婦人の問題、個人の使命は決めることが出来ないのである。されば先づ人間の生を支配して居るところの兩性の原理法則の研究から始めねばならぬ。

宇宙にありとあらゆるもの、小は最微の原子から大は宇宙全體に互り、すべてを通じての本質は兩極になつて居る。その一極は男性で他の一極は女性である。宇宙の理想は一言以て之を蔽へば此の兩性の調和である。

前に「宇宙は愛である」といふことを述べて置いたが、それはつまり此の兩性がその理想に向つて進むところの活動である。

又「宇宙は生命である」といふその生命といふことも、此の兩性の活く關係を言ふのである。例へば靈氣にも陰陽の二つの流れがあり、磁石にも南北の兩極があるやうに、人間の精神の活きにも男女の兩性があるのである。此の兩性の親和力が宇宙の凡てのものゝ力であつて、此の力は即ち愛である。愛は宇宙に新しき生命を生む力である。

又一方には此の親和力があるのに、他方には反撥する力がある。即ち調和に進まんとする他の半面には、必ずこれ

に反對する力の活きがある。これが性の兩極のある所以で、又宇宙の本質そのものである。

此の性の兩極といふことは、啻に人間男女の別のみではない、凡てのものに通じて居る。それ故一個人も亦兩極の性を持つて居る。女にも男性的のところがあり、男にも女性的のところがある。これあるが爲め男子が女子を解し、女子が男子を解する事も出来るのである。されば男女の別は全く相異なる兩極ではなくして、その個體に含む兩性の要素の多少であるといふことになる。つまり男女の別をたゞ身體の事にのみ思ふのは間違である。靈に於てその本質の要素の差を持つて居るのであつて、身體はたゞその表徴に過ぎない。

此の兩極は、常に理想的調和に向つて進まうとして居るといふことは前に述べたが、併しその理想實現といふことは、容易に達し得ることではないので、人生の煩悶が其處に起るのである。これ即ち兩性の戦ひである。

古來男女の歴史を見ると、互に相引き相捉へようとして居る。ところがそれが理想的親和に至らずして、力強き者は力弱き者を捉へて奴隸とし束縛を加へて居る。即ち自然に背き、自由を妨げ、人格を縛らうとする爲めに、相引き相愛する力は遂に相反し相惡むものとなり、親和は毀れて離反となつて来る。これは一個人、一家庭に於けるばかりでなく、社會に於ても、國家に於ても、これと同じくその兩極關係が調和せぬ爲めに、人生にどれほど力の勞費をして居るかしなければならないのである。そして男も女もたゞ此の習慣の鎖に繋がれて、愛に餓え戦に疲れて居るのである。これが爲めに樂しかるべき人生は無味乾燥となり、人は終生眞の人生の意義を發見する事が出来なくなつて終るものが多いのである。

人間が此の状態を續けてゐる内は、實は何時まで根本的に生活の土臺が出来ず、人生は煩悶に終る外はないのである。

然らば先づ此の煩悶を解決して、理想的調和を來すにはどうしたらよいかを考へねばならぬ。若し之が解決が出来

ねば、人は到底孤立孤獨となるの外はなく、而してその孤立孤獨は人生の理想ではない——男女關係、家族關係、友情關係、團體關係、國家關係、此等凡ての關係に於て、眞の人生味が味はれるのである。

二 女性の使命

されば如何にして調和するか。如何にして理想的の親和は得らるゝか。此の必要に應じて、此の目的を達することが女性の使命であり、天職であるのである。婦人が此の天職を全うするといふことは、取りも直さず男女の兩極が理想的の調和を得て、完全なる人生を造るといふことに外ならないのである。もとより兩極は相異なるものゝ表徴であるから、たとひそれが調和を得て完全に近づいたからとて、二つの同じものが出来るのではない。二つの相異なるものがあるが故に、調和の必要も起るのであつて、又それが完全を追求する所以である。それ故此の完全に向はんとすることが兩性の共通點であつて、言ひ換ゆれば其の向上的精神を發達せしむること、即ち人格の修養向上といふことは男女共通であるが、兩極の各々の爲すべき職分使命は異なつて居るのである。

此の人格の完全を期するには、婦人は婦人自己の缺點を補足し、自己の特性を發揮することが必要である。

そこで女の特性の一は比較的直觀的であるといふことである。即ち愛、同情、調和、完全、統一、美といふやうなことは皆女子の特性である。

男子が凡てに於て比較的分解的、歸納的であるのに對して、女子は建設的演繹的である。

男子が職業的であるのに比べて女子は精神的である。此の特性を特性として自由に發達せしむるやうに修養することが即ち女子の人格を養ふといふことであつて、これは即ち一方にはその長所とするものを養ひ、又一方にはその缺點即ち男子の長所とする所をも理解することになるのである。つまり女は女としてその特徴を發揮し、而も今一步男

子の長所の學ぶべきを學ぶといふことが婦人の人格完成の方法である。

そして又此の目的を達することが出来れば、それと同時に男女の關係を完全にすることも出来るのである。これ即ち人間生活の凡ての土臺となつて、國家をも社會をも改善する力となるものである。個人が進歩するといふことは同時に全體の進歩である。

前にも言つたやうに、人間は如何なる場合にも孤獨で生活するといふことは出来ない。決して他と關係無しに生きて行くことが出来ない。故に人は必ず社會に對して何か己の天職を盡し國家に對して何か公務を引受けねばならぬ。

古い書物の中に斯ういふ譬喩談がある。

或時樹木が集まつて植物界に王を戴かうとした。そこでまづ橄欖の樹の處に行つて、「汝われ等の王となれよ」と言つた。ところが橄欖の樹はこれに答へて言ふには、「我いかでわが油を造ることを棄て、往きて樹木の上にとそぐべけんや」と言つて、自分はそんな事よりか外に自分の爲すべき天職があると云つて斷つた。そこで又無花果樹に行つて、「汝來りてわれらの王となれよ」と言つた。ところが無花果樹も亦「我いかでわが旨き善き果を棄て、往きて樹々の上にそぐべけんや」と言つて斷つてしまつた。樹々はまた葡萄の樹に、「汝來りて我等の王となれよ」と言つた。葡萄の樹も亦前の二つの樹と同じく、「我いかで神と人とを悦ばしむるわが葡萄酒を製ることを棄て、往きて樹木の上に戦ぐべけんや」と言つた。

そこで樹木は最後に荆棘に、「汝來りてわれらの王となれよ」と言つた。ところが荆棘は直ちに樹木に言ふには、「汝等まことに我を立て汝等の王となさば、來りて我が庇蔭に依れ。然せずば荆棘より火出で、レバノンの檜樹を焼き盡すべし」と言つたといふことである。

人間は若し各自が盡すべき職業の外に、國家に奉仕すべき公職あるを眞に自覺することが出來ず、徒に孤立を守つて其の凡てのものゝ關係を無視する時には、この樹木の例への如く思はざる結果を見ることがあるであらう。けれども、世には兎角自覺して立つべき人が、その公に報ずることを避けて孤立するの傾があり、淺薄なる野心家が時を得てその利己心を逞しうするのである。それではいつまでも理想に近づくとはい出來ない。缺陷は益々深くなり、安全は益々遠ざかつて行くのである。適材を適所に置いて、その活動を自由にするといふことは、自分一個人の爲めにも、又全體の爲めにも極めて必要である。

そしてこの關係を繋いで調和を計り、完全に近づけるものは協同、同情、理解、建設の力、即ち兩性の中にも、より多く女性に與へられたその特性に依るのである。即ち婦人は先づこれを自覺しなければならぬ。

三 男女の能率

(イ) 婦人の迷信的偏見

何事にも習慣因襲から來る迷信といふものがある。婦人は最もその因襲的迷信が強い。「女子は智力に於て男子に劣つて居る。とても男子のやうな活きは出來ない。又さういふ能力を呼び醒さうとしても、所謂一知半解に陥つて、家の爲めにも自己の爲めにも不幸を招くもとである」といふ女子に對する偏見は、昔からあるところのものである。此の偏見は、今日婦人が男子と同じくその人格を養ひ、その特性を發展せんとするに當つて、一難關となつて居るのである。故に先づ此の偏見を征服してかゝらねばならない。

ところが此の因襲的迷信は歴史的に作られたので、勢力がなかなか強い。成程婦人とても如上の如き弱點が少し

もないとは言へない。けれども其の弱點は教育に依つて改めることは出来るのである。其の爲め的人格修養であるのである。然るにそれを修養しても逆も駄目であると信じて、未だその結果をも見ぬうちに自暴自棄してしまふのは、婦人がその弱點に魅せられて迷信的偏見に捉はれて居るからである。

我國では明治になつて所謂新しい女といふものが出來た。これは彼の誤られた自然主義の副産物である。これは眼醒めかけた女子が、其の淺慮を顧みず徒に自由を要求し、盲目的に自然主義を崇拜して、従前の社會秩序を顧みることとせず、又自然の法則をも無視して、たゞ其の誤れる自我の欲望の儘に生活しようとする、所謂無方針、無計畫、無主義の人である。

斯くの如き似而非新婦人ほど困つたものはないので、女性の缺點を缺點として顧みないばかりでなく、その人道の軌道をはづれた生活を以て、これが人間の本來要求して居る自然の生活であると自稱して、高慢、放縱、あらゆる個人主義の醜狀を暴露して恥ぢないのである。これを見ては誰でも、彼の古聖人が、「女子と小人は養ひ難し」と歎じたのを眞理と許すの外はなくなるのである。爲めに彼等が世の嘲笑を招くばかりでなく、同性の進歩をも障害すると夥しいのである。

さて斯様な結果になるのも、勿論女子自身の弱點から招くことには違ひないけれども、又従前の社會の因襲的偏見が、女子の教育を一定の型に箝めてしまつて展びる力も展ばせないやうに壓へつけて來た、その反動であるといふことは否むことの出来ない社會の罪である。従前の因襲的教育が、到底女子を男子に及ばぬものとし、これに自由を與へるのは嬰兒にメスを與へるやうなものであるとした。そして婦人に眞の自由を與へず、眞の修養法を知らしめなかつたが爲め、此の始末に立ち至つたのである。

此の社會的偏見は、當に我國の婦人にのみその影響を残したのではない。西洋に於ても、かつてはこれと同じ偏

見的時代もあつたのである。有名なる英の文豪シェークスピアの劇「悍婦馴らし」(Taming of the Shrew)の中にも、ツルーチオといふ人が、その妻のマセリに對する態度を書いたものがある。それを見ると、

「私は私自身のものを支配する。そして妻は私の家財であり動産である。妻は私の家であり、私に便宜を與へる道具である。私の小舎であり、私の馬であり、私の牝牛であり、私の驢馬であり、私の凡てのものである」

といつて居る。それが三百年後の今日に至つては、歐米先進國の婦人に對する社會の態度といふものは大に變つて來て居る。それは言ふまでもなく婦人の人格を尊重し、婦人も男子も自由を共有して居るのである。これを見ると、西洋各國に於ても婦人はその古い因襲的偏見を破るまでには、夥多の努力を以て幾十年か奮闘したことが想像されるのである。

現にその歴史を見ても、歐米婦人も亦永き年月の間、多くはその覺醒せんとするものよりも、因襲的偏見の主張者の方が、常に勝利を博して居ることが明瞭である。

けれども、倦まず屈せず、眞の自由を求め、眞に精神の覺醒を爲し得た婦人が彼の國々にはあつたので、十九世紀の半頃となつては、遂に因襲的偏見の強勢を以ても破ることの出來ないやうな婦人の眞の力が表れ來り、そこで始めて婦人の強い決心が識者の間に認められ、信ぜられるやうになつたのである。

此の事實は、やがて婦人自身も亦今までの迷を醒まし、因襲的偏見を開く心強い導火線となつたのである。これに比べると日本の婦人界は、婦人自身の努力もまだ足らぬ處があるし、又社會の形勢も、歐米婦人界に比べては約五十年も遅れて居る。即ち彼のシェークスピアの書いた夫が妻に對する考は、我國に於ては今日も尚多くの男子の腦裡に往來して居るやうである。實に「どうしても妻は夫に對して絶對服従すべきものである」といふことは、日本の男子の多く信仰する所である。男子ばかりではない、女子も亦少數の外は矢張りこれを眞理の如くに信じて居る。中には

相當の教育を受けて自ら覺醒し得たりと稱する婦人さへも、まだ無意識的に此の思想の支配を免れないのである。彼等は一度他に嫁すれば、自ら稱して自我を捨て、夫の保護のもとに生活することであると考へて居る。それ故自我の主義、自我の人格といふやうなものは、結婚と同時に亡くなるのは必然の傾向と全然甘受して居る。殊に婦人が家庭以外に専門學の研究を續けるなど、いふ事は到底その努力の點に於ても續かず、又續ける必要もないものゝやうに、結婚生活の單なる物質の保護に甘んじて居る状態である。

そしてそれ等の婦人は自ら眞理を發見したるが如く、恬然として曰く、「自我實現とか、人格とか、研究とかいふやうなことは、學校生活時代の空想であつて、まことは世の中へ出て見ればさういふ夢は忽にして消えてしまふ。強いてそれを續けようとすれば、彼の所謂新しい女と稱するものゝ如く、慘めなる獨立生活をせねばならぬやうになつて來る。結婚生活はさういふ夢を見て居つた自分を逸早く醒まし、そして自分を今日の安全なる生活に置いてくれた」と、恰も大悟するものゝ如く感謝の悦に入つて居る。

結婚生活必ずしも人の進歩を停滯せしむるものではない。否これから大に發展すべきものであるが、婦人の弱點はその保護生活に甘んじ易い。そして僅に眼醒めんとした過去の努力を裏切つてしまふ。斯くの如くにして、少數の先進婦人も徹底する處まで行き得ずして、忽にして脆くもその自我を折り、意志を擲つてしまふやうな有様である。

成程結婚後婦人がその意志の獨立を維持するといふことは困難なことに相違ない。併し此の偏見的暗示を婦人自身が先づ破り、その壓迫の天地から自由を見出さなければ、婦人の覺醒する時機は何時來るであらうぞ。今日の日本婦人がその人格を築かうとして努力しながらも、たゞ世の中の變るのを待ち、時勢に押し出されるのを待つて居るやうな態度では、社會の強い因襲的偏見に勝つべき時は永久に來ないと言はねばならぬ。

(ロ) 物質科學的偏見

此の外に尙今一つの障害は物質科學的偏見である。

一部の科學者は、「婦人の智力は男子のそれに比べて著しく劣等である。婦人の腦力が根本的に低能に出來て居る」と證明を與へて居る。

今日科學萬能の世に於て、その科學上の證明を以て婦人の能力を否定するとなると、前に説く所の因襲的偏見よりも、その根據は一層確かで一層有力なるものといはねばならぬ。此の偏見の根據は、「腦の大小は智力に正比例するものである。さうして婦人の頭腦は男子の頭腦よりも小さく出來て居る」といふのである。

處が、此の推論の當否は兎も角も、此の論の根據とする所の、腦の大小が智識に正比例するといふ學説は、今日の進んだ心理學、解剖學の研究によつては、漸々に認められなくなつて來て居るのである。即ち頭腦の大小は智力の活きにのみ關係するものではない。其の證據としては、寒帶人は溫帶人よりも腦が大きいといふ事實が見出されたのである。

此の研究によると、歐洲で一番頭腦の大きいのはラブランド人(ヨーロッパ)（歐羅巴の最北）で、其の次が瑞典スウェーデン那威人、それから獨逸、佛蘭西、伊太利といふ順序になつて居る。露西亞人と佛蘭西とを比較して見ても、露西亞人の方が大きい比例になつて居る。

畢竟腦の大小は氣候に關係することが證據立てられたのである。その上に又文明の程度を見ると、頭腦の最も大きなラブランド人が最も遅れて居るといふことは、従前の説に對する皮肉な證明である。此の外には又古物學、人種學の研究は次の如き結果を發表して居る。

二千年前の人の頭腦と今日の人の頭腦とを比較して見ると、二千年前の人の頭腦の方が大きい。又現在ニューヨーク市の進歩して居る白人の頭と、建築に従事する工夫の黒奴ネグロの頭とを比べると後者の方が大きい頭腦を有してゐる。

これ等も亦従前の科學の偏見を打破るべき重要な條件である。又人類學上から見た豪傑偉人の頭と、平凡人の頭とを比較して見ると、彼のガンベッタの頭は一一五九瓦、ナポレオンの頭は一一五〇二瓦あつたといふことであるが、これは人類學者のグローカの調査した黒奴の平均重量よりも、ガンベッタ、ナポレオンの頭腦の方が軽いのである。又同じく人類學者のバイマンズの調べた世界最劣等の人類亞非利加のホツテントット人のそれよりも尠い。

又現今世界中で名高い人類學者七名の調査になる體量と腦の重さとの比較を見ると、歐羅巴人の平均は三〇に對する一で、即ち體量が三十貫あるならば腦の重さは一貫である。(これを他の動物に比較して見ると、彼の鯨は——最も體と頭との差異の甚しいものであるが——三千貫に對する一貫の割合である。)

これを男女で比較して見ると、歐羅巴では男は一三八一瓦、女は一二三七瓦である。即ち女の頭の方が一四四瓦だけ尠いのである。

併しこれはたゞ腦と腦との重さを比較したもので、體との割合を取つたものではない。體との割合を比べて見ると、英佛に於ては男の脊の高さを一〇〇呎とすれば女は九〇呎である。

此の割合によると、男の腦は女のそれよりも一オンス重いといふことになるけれど、體重との比較から見ると等差がないのである。

腦の大小に就いては以上の通りであるが、今一つ專門的研究となつて居るのは、彼の腦の前額(又は灰白質)の大きいものは智力が發達して居るといふのは従前の説である。ところが世界中で一番前額の大きいものは鯨と象である。けれどもその大きさに比較して智力が優つては居らぬ。又彼の黒奴の腦が白人のそれよりも灰白質に富んで居る

ことも事實である。

そこで人の頭腦の價値は、その灰白質の多少、腦の大小に依つて定めることは出来ない。たゞその實質がよく活動し、所謂變化流動が盛んなものを以て優良な頭腦とせねばならぬのではあるまいか。

然り、以上の新證明は従前の頭の組織や分量や形状を見てその智力の鋭鈍を卜する所の證明を否定しつゝあるのである。又全然之を否定しないとしても、婦人の腦の組織分量及び素質といふものが、今日の解剖學、生物學、人類學の各研究の結果として、男子のそれ等に比して少しも大小差別がないといふ結論が下されて居るのである。

されば如上の科學的證明といふものも、根據の危いものとなつて、今日ではそれが全然偏見と見做されて來たのである。

(ハ) 實力問題

唯此處に残つて居るのは事實上の力の問題である。歐米に於て男子が女子よりも優つた能力を有して居るといふ説を堅く信じて居つたのは獨逸である。ところが其の獨逸すら今日に於ては「智力に於ては男女の區別なし」といふ説に變つて來て居るのである。されば亞米利加、佛蘭西、伊太利、白耳義などといふ國々では、全然此の偏見がとれて來て、最近五十年間婦人の能力を著しく認めて來て居ると同時に、婦人自身も實際に著しい進歩を示して居るのである。

然るに悲しい事には、我が國ではまだ以上に述べた如き偏見が依然として勢力を持つて居て、婦人の實力の認められるべきものがないといふ有様である。尤もこれは偏見の多い従前の日本の社會に育つた婦人には無理のないことである。たゞ今後彼の歐米婦人が先づ事實を以て證明して居るが如くに、日本婦人も亦事實の證明を擧げて、此の従前

の偏見を破つて行くといふ強い確信を持つて貰ひたい。さうして現代の婦人が自ら試み、自ら實驗し、自ら努力して行く内には、やがて歐米の婦人と同じく、押しも押されぬ事實を産み出すべき時が来るであらうといふことは疑ひのないことである。

十九世紀の初になつて、彼のジョン・スチュアート・ミルは言つて居る。「男女は同じものである。けれども、唯一つその人種の異なる如くに、異なつて居る。此の外は今後若しも女子に男子と同じ教育を與へたならば、全く同じものになる」といふことを言つて居る。これが今日の歐米に於ける實際である。

そこで上述の二つの偏見、即ち習俗的偏見と、科學的偏見を除くといふことが、進歩的婦人の信仰とならねばならぬ。そしてその自我の傾向、自我の興味、自我の深い要求に積極的態度を持つといふことが、その研究的生活の土臺を作るのである。

四 婦人と研究

以上は「女性にも研究の能力がある」といふことの客觀的及び主觀的假説を立てるに足る重要な條件であるが、尙此の外に一層強い消極的潜在意識が今日の婦人の頭に残つて居て、その決心を鈍らせて居るものがある。それは即ち古聖賢の教訓、及びその婦人に對して宣言した格言である。例へば東洋に於ては釋迦や孔子の如き偉大な聖人の訓言を本として、その信仰者が婦人に對する教訓を組立て、それを強い信仰として居るのである。西洋でも同じく哲學者のカント、ショーペンハウエル、ソクラテス、プラトリーの如き學者先哲の格言は、時代を隔てた後世まで金科玉條として残つて居る。

もとよりそれは價值のある言葉には違ひはない。けれども後世はその言葉に囚はれて、偉人の教へた言外の眞意を

汲み取ることが出来ない。況や聖賢の言語と雖も、時代を経て、事情を異にしては、言ひ表すべき言葉も異なるものがあつたであらう。けれども言葉に囚はれたる後世人は、婦人をその言葉の範圍内に限つてしまつた。さうして孔子の所謂「女子と小人は養ひ難し」、又釋迦の訓の「女は罪障深し」、又カント及びショーペンハウエルなどの思想から來た「婦人は子供と大人の中間物」とかいふやうに、何れも凡ての婦人を未製品として取扱ひ、之を一括して侮辱の宣言を下して來た。試にカントの婦人に對する説を抜萃して見ると、

「凡て抽象的科學（論理學、哲學の如きもの）凡て無味乾燥なる智識は、如何に人生に有用であつても、腦力の堅實なる男子の手に委ねなければならぬ。此の故に、女子が幾何學を研究するといふことはないであらう。」
と又

「抽象的科學は、子供や女には不可能である。子供と女とは抽象的學問には適しない。故に婦人の頭は普遍的眞理に到達することは出来ない。未だ嘗て女にして哲學や論理の如き問題を七分半の間考へ得るものに出會つたことがない。」

女は我々男子に缺けて居るところの性質を持つて居る。それは特殊的の知識と、そして言ふ可からざるところの魅力である。併しながら、論理、又推理、又思想を構成する、又知識の原理を結びつける所の思想と思想の間、原理と原理の間の關係を捕へる如きことは不可能である。たとひ最も天才であつて、又最も高き能力を與へられ居る婦人であつても、平凡なる男子の達する高さに行き得る者は稀である。」

と言つて居る。即ち哲學、論理學、又は修辭學等の如き凡ての研究、發見の力の本は頭腦の活きにあるので、これが婦人には出来ないといふことを宣言して居るのである。

このカントは獨逸國に於ては、その政權者として哲學者として最も崇拜された人であるが故に、その所説がより多

く重んぜられたのである。それが爲めに獨逸が女子の高等教育を認めた事も他の列強國の何れよりも遅かつた事は誰も知る所である。カントやショーペンハウエルの消極的婦人觀が、凡てに積極的なる歐洲の、而も列強第一流の獨逸に於て、斯くの如く信ぜられた事を見ても、それが一面の眞理として見らるゝものであることは疑がない。

然るに一方には文明の光の照り輝いたグリーキ、ローマや、又は近代文明のアングロサクソンの如き、その勃興の原因を見ると、必ずその根柢には婦人の頭腦、婦人の能力に華の咲いた時であることが、證據立てられて居る。又婦人の力の凋落した時には、文明の華も亦凋落して居るといふ事實もある。此の事實を信じ、彼の偏見的思想に捕はれなかつたグリーキやアングロサクソンの國々では、早くより婦人自身が自由に進歩して居るのである。これがその國々の婦人が他の婦人に先んじて覺醒し、婦人自ら其の境遇を拓いて、その社會をして早く女子の價値を認めしむるやうになつた重大な原因であらう。左にそれ等の國々に於て、古來婦人にして男子と等しくその能力を發揮して、學界に認められた模範的婦人の一二を擧げて見ようと思ふ。

五 文明に現れたる婦人

(一) ハイペーシア (Hypatia)

文明に現れたる婦人の例として、茲には先づグリースのハイペーシアを擧げる。

ハイペーシアは紀元四世紀の末から五世紀の初に互つて、其生涯を研究に捧げた一婦人である。ハイペーシアはアレキサンドリアに教授として、又著述家として、又發明家として名聲高く、當時の有髯男子をして辟易せしめたのである。のみならず十二世紀の初に、彼のニュートンが新發見の發表をするまで、彼の女の右に出るものはなかつたのである。

ハイペーシアは初數學をその父に學んだ。その後は別に大學にも行かずして、彼は遂に數學、哲學にその天才を發揮したのである。けれども彼はその天才を以て所謂學者ぶるといふやうなことや、又は高慢になつて婦人としての人格を傷つけるといふやうなことはなかつた。即ち婦人としての禮儀作法は一つとして彼に實行の出來ぬものではなく、優美にして謙讓なるその淑徳は、益々その人格に光輝を添へた。けれども學問上のことに就いては常に進取主義であつて、其の態度は實に宗教者が神に對するが如く、信ずるものゝ外には、たとひ如何なるものの前にも一步も譲らなかつたのである。それが爲めに不幸にして時の大僧正と競争するの止むなき場合となり、彼は遂に僧正の黨人に虐殺され、非業の最後を遂ぐるに至つたのである。此の時彼の多くの著書も悉く焼き棄てられたのであるが、それが爲めに彼の學識、徳性は光を失ふことはなく、當時の識者は皆彼の學徳に敬服して、大にその横死を歎じてゐたのである。當時グリースのある詩人は次の如く彼を稱へた。

「偉大なるハイペーシアよ、御身は知慧の表徴であり能辯の理想である。予は御身の言葉を聞く毎に、又御身を
見る毎に、げに崇拜の念を禁ずることが出來ない。」

と。又監督のシニーシアといふ人は、嘗てハイペーシアに就いて學んだ人である。此の人も

「ハイペーシアに接してその聲を聞き、その人格に觸れる時に起る感じは、即ち哲學の神聖なる神祕の眞理を握つて居る人といふの外はない。」

と語つて居る。又或人は

「ハイペーシアに接すれば、我が恩人、我が先生、我が姉、我が母といふ情を禁ずることが出來ない。」

と敬慕して居る。ハイペーシアは實に斯くの如き輿望をその一身に集め、古代文明の華と咲いた人であつた。

今一人矢張り古い時代の人で例を求めて見ると、グリースにアスペシアスといふ婦人哲學者があつて、此の人には

彼のソクラテスでさへ、非常に尊敬の念を以て接したといふことが、當時の歴史に残つて居る。斯くの如き歴史を持つた歐米の婦人界に於ては近世に至つては益々有爲の婦人を輩出し、婦人の科學研究家さへ出て種々の發見を爲し、社會の改善に資したのも尠くない。彼のマダム・キューリー（ラヂウム原素の發見者で、一九〇三年にノーベル賞金を受け、現に佛蘭西大學の教授である）ミセス・フォーセット（英國の大學教授）マダム・セルマ・ラーゲレフ（瑞西の著述家、一九〇九年ノーベル賞金を受く）パロネス・バースフォン・サトナ（ルーマニアの人で、これもノーベル賞金を受く）等がある。此等の人々は比較的専門科學の方であるが、近頃誰も知る女流教育家としてはドクトル・モンテッソリーがある。

女史は現存の人でもあり、且つその研究が一般の人々の興味を引く所のものであるから、左に少しくその研究的態度を紹介して見ようと思ふ。

(11) ドクトル・モンテッソリー (Dr. Montessori)

女史は伊太利の國に生れた。その研究力は世界の學界之を認めて居る。近頃亞米利加へ行つてその教育主義を宣傳して居るが、ハーバート大學教授のホルンス氏は、女史を紹介して次の如くに言つて居る。

「モンテッソリーの説は顯著にして刷新、且つ重要なものである。その組織的實行的方面に於ては慥に獨創的なものがある。」

と稱へて居る。此のモンテッソリーが研究し發明した原理に著しき價值があるといふのは、女性の特徴が加はつて居るからである。即ち婦人獨特の同情、直觀の力が、その社會的觀察に加はつて居ることである。而も科學的訓練をなし、集中した研究をして居るから、その蒐めた研究材料は凡て女史の獨創的發見であつて、恰もペスタロツヂ、フレーベルの熱心及び其の活きに比較すべきものがある。否その教育界に貢獻したる婦人の創始的能力といふ點に於て

は、ペスタロッヂやフレーベル以上であるといふことが出来るのである。女史は研究的態度といふことを語つて次の如く言つて居る。

「一體どういふ人を科學者といふことが出来るか。

物理學の研究室に入つて、その器械を上手に使つて居る人であらうか。又化學の研究室に入つて、試験管を使つて上手に實驗をして居る人であらうか。又博物の研究室に行つて、多くの標本を集めて顕微鏡を見て居る人であらうか。決してさうではない。

私どもはどういふ人々に科學者の名を與へるのであるか。つまり此の實驗をするのは一つの手段であり、一つの導きである。かの生命の深い眞理に生きる爲めに、及び私どもを恍惚たらしむる程の祕密を知る爲めに、其の祕密の前に掛つて居る幕を開く爲めに——即ち眞理に行く道を開く爲めに研究しつゝある人が眞の科學者である。

道の爲めに盡すといふ事は、自然界にある所の神祕的祕密を、自分の心の内に愛する熱情である。自分といふ考へが遂に失くなつてしまふまでに眞理を愛し慕ふ心、それだけの熱心興味を以て自然を研究する人が眞の科學者である。

科學者といふは、決して巧なる器械の取り扱ひ者ではない。彼は自然を崇拜して居る人である。恰も或宗教信仰者が自分の神を拜む時に、己を忘れて禮拜して居る時のやうに、自然を崇拜し、研究する者、即ちその表徴を通じて神を信ずる宗教者の如き生活を爲す者が眞の科學者である。又彼の簡易生活を送つて、その全力を仕ふるものゝ爲めに費し、よく沈黙を守り、たゞ祈りに耽るトランプリストの態度の如き態度を以て、その研究に集中する人こそ眞の科學者である。」

と言つて居る。

以上は歐羅巴に於ける尊敬すべき研究的婦人の代表を擧げたのであるが、茲に此の章の結論として今一言述べたいことは、即ち眞の研究せんとするものの爲めに最も大切なことは、以上モンテッソリーも繰返して言つて居る如く、精力の集中といふことである。

或る人々は、研究といふことは知的方面のことであるから、第一に才能がなくてはならないといふ。勿論才能も必要には違ひないけれども、淺慮に陥り易い人間の缺點は、才能が必要だといへばそれにばかり興味を向けて、動々もすれば才能そのものゝ爲めに轉々と目的興味を變じて、遂に何事にも成功を収めることが出来ないといふやうになり易いのである。世にいふ「何でも出来る」といふことは、本當は「何にも出来ない」といふことになつてしまふものである。畢竟才能に任せて目前の興味に走り、才能に驕つて一つのものを実着に守るといふことが出来なくなるのである。それ故才能ある者に限つて集中力に乏しい。眞面目に一つのものに集中するといふことの出来ないものが多いのである。それは即ち根本的に研究の態度に反するものであつて、到底終極の目的を達するまで精力を續けることが出来ないのである。研究とは決して無味乾燥なるものではない。けれども又決して華やかに人の興味を集め、一躍して成功の峰に飛登らしむるものではない。所謂熱烈なる宗教信仰者が、何ものをも忘れて神に祈るが如く、其の眞摯なる態度にほの見ゆる主觀的興味である。即ち精神力の集中である。言ひ換ふれば、堅固なる信念がその凡てのものの根本となるのである。之は將來の婦人の生活に大關係のある重大なことである。

六 婦人生活の改善

今後の婦人の生活上に、必ず來るべき改善といふのは、即ち先づ婦人自身が従前の如き一個人、一家庭に限られたる束縛を破つて、其の人格を國家的に又社會的に擴大することである。即ち従前の日本婦人に見るが如く、徒に男子

に依り頼み、男子の保護をのみ俟つものではなく、寧ろ男子と協力し、互にその人格の長を助け短を補ひ、相互に好伴侶とならねばならぬのである。

前にも述べた通り、宇宙の原則からして、兩極の完全なる調和を以てその理想とするのであるから、人間はその宇宙本體の單位である以上、若し男女の關係が不満足である場合には、忽ち其處に缺陷を來すのである。即ち個人にも又社會にも、病氣、煩悶、秩序紊亂といふやうな、其の他あらゆる缺陷が生じ退歩を招くのである。されば此の關係の調和不調和は、個人及び社會國家の平和と不安、幸福と不幸、光明と暗黒の分岐點であるともいへるのである。しかも此の關係をして、完全なる調和に近づかしむるものは、男性的の剛毅、果斷、分解、破壊に俟つよりも、寧ろ女性の特徴たる同情、直觀、建設の力に俟つものが多いのである。されば婦人が其の特性を自覺し、其の理想に覺醒して責任を盡すといふことは、取りも直さず此の關係を完ふすることの第一着手であるのである。即ち婦人が個人的にも、家庭的にも、今一步その人格を擴大して、國家的にも又社會的にも貢獻するを得るその最初の基點は、自己の人格を圓滿に修養し、家庭生活の圓滿を計ることにあるのであつて、それは同時に家庭の改善ともなり、社會國家の進歩ともなるものである。婦人の天職は、全く其處にあるのである。次に擧ぐるものは、某詩人の謳つた婦人の大意である。

婦人の道

婦人の道は男子の道、

よし小人となるとも、

神々しき人となるも、

はた、奴隷となるも、
自由を得るも、
彼等は共に浮み、
共に沈む。

婦人は未成品の、

男子にあらざるのみか、
もと／＼性を異にするもの、

若し

婦人を男子の如くなしたらんには、
美しき愛は損はれ了らん。

男子が最も愛する絆はといへば、

同性相愛の情にはあらで、

異性愛慕の切なる情、
而も

永き年月の間には、

好尚次第に相近づき、

男子は婦人に、

婦人は男子に、

兩々相相通はん。

男子は、

婦人の優しき情と高き徳とに、

得るところあるも、

而も

乾坤一擲男らしき勇氣を失はじ。

婦人は男子の廣き知慧を學び、

而も小兒の哺育を怠ることなく、

又無邪氣な心も失ふことあらじ。

終には

歌詞曲譜と融合して、

こゝに完璧なる音楽を作りなす如く、

婦人は男子に自らを捧げる。

是等二つのもの兩々相並んで、

「時」の裳にふるゝ時、

そこに充實されたる偉人の力は現れ、

互に刳入を分ち、互に種を蒔き、

互に尊敬の情を交しつゝ、

又同時に各々自己をも重んじ、

個性の別を明瞭にすれば、

こゝに愛人互に似通ひ來る。

その時

いとも氣高き理想の樂園は歸り來り、

貞操和樂の光りは輝き渡り、

世は黄金の時代とならん。

.....

つまり婦人がその天職を見出し、その使命を全うするといふことは、婦人が人としての各自の目的を達するといふのと同じである。

眠れる婦人の覺醒を促すのも、迷へる者に信念の光を見出さしめんとするのも、皆此の各自の目的を見出さしめんが爲めの道筋である。かくて醒めたる婦人は自ら現在生活の病源を見出し、又自らに與へられて居る偉大なる力を信

じて、各々其の目的を達する方法を選ぶのである。此の方法は婦人自身が考へるより外に道はないのである。諺にも「誰か店に行つて太陽の光を買ふものがあらうぞ」といつて居る。光は即ち自分自身の態度一つで照るのである。眞に醒めたる者の眞摯なる態度は、即ち人格の光を生む。其の人の意志は即ち神の意志である。神の意志を以てする方は他に求むべきものではない。自分自身の中に發明する力である。

第二章 家庭の根本義

一 男女人格の完成

家庭の根本義といふこともいろいろの意味に言はれるけれども、要するに其の根本の根本に溯れば、男女の人格の完成といふ一言に盡されるのである。

言ふまでもなく、天地が陰陽の氣で出来て居るやうに、又萬物が兩極より出来て居るやうに、人格といふものも、兩性がよく調和する事によつて始めて完全に至るを得るのである。そしてその完全人格の單位は夫婦によつて造られ、それが擴充して社會關係となり、國家關係となり、遂に人類關係となるのである。されば夫婦は凡ての人類關係の範例であり、其の關係は凡ての人類の根本要素である。此の關係から父子關係、君臣關係、朋友關係、社會關係、國際關係、又は人道といふやうなものも起つて來るのである。畢竟個人的人格と人格との關係がだん／＼擴大して社會的となり、國家的となり、世界的となるのであるが、其の根本は、家庭否その家庭の根本たる一個人と一個人たる夫婦の人格關係に基くのである。されば今一步溯つて、家庭といふものを造り出す男女の結婚といふことからして

言へば、それは又いふまでもなく、個人の人格と人格との結合から成立つものでなければならぬ。然らざれば、如何に形の上に夫婦關係を結び、家庭を造るといつても、人格の無い所には、決して圓滿なる調和關係が成立するものではないのである。即ち根本義の生活を營み得る人格者の結婚が必要なのである。

そこで婦人の生活の本領は、良妻賢母となる事に存するといふことは、以上述べ來つた意味から言つても、婦人の人格に動かすべからざる要素となるべきものである。けれども此の良妻賢母といふことは、婦人の人格の要素ではあるけれども、その人格を養ひ育て、又發展すべき方面はその外に種々異なるべきものがあつて、決して徒に良妻賢母を振り翳し、之によりてその人格に制限を加ふべきものではない。例へば、妻とし又母としてその人格を發揮すべき境遇に非ざる場合にも、其の婦人の人格を無視するものではない。否一個人としての人格が備はつて居ればこそ、良妻ともなり賢母ともなることが出来るのであつて、良妻賢母といふ名の外に、婦人の人格の發揮すべき所はないといふのではない。殊に日本に於ける所謂良妻賢母は、たゞ／＼家庭に在りて夫に柔順に、舅姑に奉仕し、能く子女を養育すれば事足るものとしたのであるが、時代の進歩と共にその思想にも變動を來し、此の家庭に籠居の良妻賢母も、世に出て、所謂文明の常識に富める活動をなすの實例を屢々見るのである。斯くの如きは畢竟良妻賢母の内容がだんだんに變つて來て居るといふ明な證據であつて、名は同じく良妻賢母であつても、内容の知識感情、言ひ換ふれば、その人格が非常に進歩發展して居ることを證明して居るのである。故に婦人の天職本領といふものは、良妻賢母といふことに存するけれども、それが必ずしも家庭に限られたものではなく、時代が社會的に、國家的に、又世界的に進歩するに隨ひ、婦人も亦その時勢に伴ふ社會的、國家的、世界的人格を備へたところの良妻賢母とならねばならぬといふことである。斯くいへば、婦人は從前の如く家庭の人として、何の不安もなく、何の不満も抱かず生活して居るのに、何を苦しんで社會的人格を養ひ、或は國際的關係に耳を傾けて、一知半解のことに心身を惱ます必要はないの

ではないかといふ人もあるかもしれぬ。けれども、それはあまりに婦人の生涯を樂觀したものである。

例へば、一朝自分が今まで頼り處として居た親や夫や子を失つた場合、或は其の他の困難に遭遇した場合に、確たる意志の判断によつて一身を處理し、新生命を開いて行く事が、今まで家庭以外に何も辨へのつかぬ婦人に出來ることであらうか。よし又近親者若くは朋友の力によつて一時保護を受くるとしても、それは決して積極的生活ではない。遂に或は自暴自棄に陥りて生涯を誤るといふことも寧ろ當然の事である。そして自分を亡ぼすのは自業自得としても、延いては一家を亂し一族を惱まし、眼を蔽ふやうな悲惨な状態を招くやうな例は數多い事である。余は斯くの如き社會の因襲に捉はれた婦人をさして、假りに因襲的婦人といふのであるが、斯くの如き因襲的婦人が、萬一不幸にして夫に先立たれ、子に後れるといふやうな場合を見ると、既にその夫と共に倒れたも同然、唯軀のみが生きて居るといふやうなのが多い。茲に至ると西洋婦人、殊に現在の英國婦人などは、夫が戰死すると直ぐ自分が夫の代りに立つて國家の爲めに盡すといふやうな健氣なる者が多い。誰にしても夫に別れた悲しさはさる事ながら、夫と共に國家の單位として、努めて居たその責任を忘れず、今度は夫に代つて働くといふ覺悟を持つて立たねばならない。又さうあるべき筈であるのであるが、従前の所謂良妻賢母の保守的人格をのみ養つて居つたのでは、この理想と隔たることが益々甚しくなるばかりである。要するに家庭の第一義は婦人の人格向上といふことであつて、それには先づ女子の生活を改善して、良妻賢母の内容を改めて行かねばならぬのである。それが家庭生活改善の根本義である。以下これを少しく具體的に述べて見ようと思ふ。

二 生活は時勢に伴うて變遷する

さて人間の生活といふことに就いてはいろいろの解釋がある。言ふまでもなく人が生きて行く爲めに饑えては食を

求め、疲れては眠り、寒を防ぐに衣を着けるといふことも生活の事實である。併しながら今茲にいふ生活は、斯くの如き簡單なる意味を以ていふのではない。少くとも人としての價值ある生活といふ意味をつけ加へたいのである。即ち此の中には、人として何人も爲さねばならぬ職務といふものがある。此の職務を全うすることが出来ねば、價值ある生活と言ふことは出来ない。

又その生活は進歩して行かなくてはならぬ。即ち四圍の境遇に順應して自己の境遇を開き、自ら研究し自ら發明し、自己の力によりて自己の進路を開き、自己を完成することである。

又人格者の生活といふことでなければ價值があるといふことは出来ない。即ち自己の性能を發展し、知識を磨き、意志を練り、感情を洗練して之を統一し、其の活動に生命あらしめる所の所謂人格の力、人格の光が備はらなければならぬ。

これ等の要素が備はらなければ、人間の生活には何等の價值もないのであつて、教育も修養も、信念涵養も、皆此の要素を養ひ育てて、人間の眞價値を發揮せんとするに外ならないのである。ところで從來の日本婦人の生活、言ひ換ふれば、婦人の職務として第一に數へて居つたことは、その家庭に於ける仕事である。勿論現今も亦將來とても、婦人の仕事の大部分が、平時に在りては主として家庭に在るといふことに就いては大差はないであらうが、併しこれを婦人の生活として考へるにはいろいろの見方がある。

即ち婦人が家に在りて、妻として夫に仕へ、母として子供を育てるといふ大任を盡すに當つても、或人は在來の風習の如く三従の教を守り、柔順にして唯命之れ從うて居ればよい。其の仕事は臺所を掌り、裁縫をなし、子供に乳を吞ませ、拭き掃除が器用に出来ればよいといふ考を以て、婦人の全生活を律して行かうとするのである。さうなれば何も六ヶ敷い事を言ふには及ばない。殊に精神修養とか信念涵養とかいふやうなことは、女子には直接必要な事では

なくなるのであるが、これは古い時代の風習を其のまゝに固守して來た頑迷なる考といはねばならない。若しも我が國一般の社會が、かの封建時代からの習慣を其のまゝに守つて、國家の形勢がどう變遷しやうが、世界の大勢がどう推移しやうが頓着なしに今日まで來ることが出來、又將來も行くことが出来るものとすれば、それでも結構な事であるかもしれぬと思ふが、併しさういふことは世界の事實が許さない。現に家庭の状態さへも、日一日と變つて行きつゝある。これは當然のことであつて、世の進むにつれて、一家を處する婦人の職務も變つて來る筈である。

三 家庭の仕事の變移

第一に、家庭に於ける女子の仕事すら漸次に變遷して來つゝあることは大に注意しなければならぬ。電氣の應用が盛になつてから、今では地方の小都會でも電燈を用ひ、瓦斯や水道の爲めに臺所の仕事は非常に手輕くなつた。第二には製造工業の發達によりて、家庭の仕事の大部分が工場に移された。即ち一方には各種の發明によりて、人手を借りた仕事が器械で出來るやうになつて非常に減少して來た。他の方面には家庭の仕事が工場に移されて、紡績とか織とか製絲などの仕事は、大仕掛の器械力によりて經營せらるゝやうになつた。然らば之に代るべき新しい仕事が出來なければ、從來の婦人の仕事は、社會が進めば進むほど、社會が變れば變るほど輕減せられて仕舞ふといふことは疑なき事實である。

そこで新時代に於ける婦人の職務——家庭の主婦として、妻として、母としての職務——が一方に輕減して、一方に新しい職務が増して來るとすれば、婦人も亦從來の習慣にのみ捕はれて居る時ではない。從來の如き弱き女、力なき女で居ては、到底今日の生活に堪へることは出來ない。

四 妻としての婦人

次に夫に對する妻としての職務も亦變つて來た。即ち從來は妻なるものは夫に隸屬して居つた。伴侶といふよりは婢僕の如き有様であつた。經濟上にはたゞ消費をして夫の勞働に依頼する者、社會的には一人の人間といふよりは一家に附屬した一種の器物の如きものであつた。併しながら今日の家庭にありては、隸屬に非ずして共同者である。婢僕に非ずして伴侶である。依頼者に非ずして相互に扶け扶けられるものである。夫婦の結合は法律の約束に依るに非ずして、一個の人と人が相信じ相信じられて自由なる意志と同情による結合である。服従は命令に依るに非ずして自分の犠牲的精神による奉仕である。自分の能力に依りて選擇し、意志によりて信頼し、其の計畫に同情し、其の事業に翼賛し、其の技能を信用して、生涯の同情者、好伴侶となる事である。されば前に述べた第三の要求、即ち人格ある一個の人間として、よく其の性能を發達せしめる必要がある。然るに進歩も要らぬ、人格も要らぬ、唯手足さへ動けばよい、裁縫が出来ればよい、料理に器用であればよいといふことは、今日から言へば、家庭に必要な或器械となればよいといふのと同じである。婦人の具有して居る天賦の性能の芽を摘んで了ふのである。斯様な傾向は實に婦人自身に取つて不幸であるのみならず、國家は其の一半の國民の發達を阻害され、言はゞ半身不隨の如き國民が出来るのである。殊に將來の國民を育て、國家に捧げる責任に於ては、母親たるべき婦人が當然負はねばならぬ重大な責任である。裁縫や料理が決して賤しむべき仕事といふのではないけれども。社會の進歩、國家の發展、人類の改善を其の雙肩に擔はねばならぬ婦人が、母としての職務は一層高尚となり、尊貴なるものと言はねばならぬ。勿論從來とても、婦人が母たる職務を司るといふことに於ては同じであるけれども、其の生活の意義は非常に變じて複雑となり、仕事の分量や性質が非常に重大なるものとなつたのである。此の資格を全うせんとすれば、唯傳來の女の職務を

果すといふだけでなく、一層進歩したもの、一層力あるものとならねばならぬ。即ち自分の力を進め、常にその生活に對する準備の修養をなさねばならぬのである。

五 婦人の職務は妻と母とのみ止まらず

婦人が人の妻とし母として盡す任務は斯くの如く重大なるものである。けれども又婦人の中にも、種々なる希望に依つて早く相當の教育を受け、社會に出で、職業に就き、獨立の生活を爲す者もある。又は最早妻たり母たる任務を盡して悠々餘生を送る者もある。又は不幸にして夫に別れ子に先立たれて、止むを得ず獨立の生活をなさねばならぬ者もある。是等の婦人は、言はゞ妻たり母たる任務を免れて居るものである。が、さらばといつて妻の生涯、母の生涯に捧ぐる時間と力を空費してよいといふ事は無い。苟くも進歩向上の人、人格の人といふことであれば、其の活動は生涯休止すべきものでなく、墓に入るまでは働かねばならぬ。その人々の境遇に應じて、或は社會の不幸なる人々の爲めに其の貧苦病患を慰めることもよい。同胞姉妹の爲めに何事か貢獻することもよい。又其の人々の學力や技能に隨つて、教育の爲め宗教道徳の爲めに盡すのも喜ぶべき働きである。此の外に千人の中に若くは萬人の中に、一人は稀有の天才を有する婦人もある。斯くの如き婦人は母としてよりも妻としてよりも、それ以上尊重すべき貢獻が、其の天才を發揮することによりて爲し得らるゝのである。美術、音楽、若くは宗教、教育等の事業の爲めに、一生を捧げて働く事が、自己の進歩完成といふ點からも、又國家社會の利益といふ點からも幸福であるといふ場合もある。要するに婦人の職務といふことは、職務それ自らに價値を有するには相違ないが、それは其の職務によりて自己を進め、自己の人格を作るが故に其の價値が尊いのであつて、進歩がなく人格がなければ全く器械に等しいのである。

六 活きた生活と死んだ器械

同じ仕事をするにも、活きた働と死んだ働とがある。即ち手を動かし、足を動かし、若くは眼に見、耳に聴くといふことには、誰しも異なる事はないやうである。併し手足と共に心が働き、眼と耳と共に心の眼、心の耳が働き、斯くの如くにして、身體の働きにはその人の精神が籠つて居ることゝなつて、始めてその働きには生命があり進歩があるといふことになるのである。一家の主婦が三度の食事を調理するにしても、活きた働きと死んだ働きとがある。即ちよし經濟上の注意は缺かないまでも、材料の取り合せに心を用ひず、魚介、肉類、野菜、穀類の含有する成分などには少しも考へを及ぼさず、唯習慣的に煮るものは煮る、焼くものは焼くといふだけでは、營養の目的を達し健康の保全を計ることが出來ず、即ち主婦の働を全うするとは云はれない。いはゞ炊事の器械と同じである。之に反して同じ値段の材料を使ふにしても、その取り合せを工夫し、食欲の要求に應じて調味を按配し、家族の體質、老幼の區別、寒暑の加減、労働の繁閑等に注意を怠らぬやうにすれば、其の仕事は活きて、やがて家族の健康の保全といふ責任を全うすることが出来るのである。

七 賢母の愛

母としての職務を盡すにしても、同じく二様の別がある。即ちたゞ哺乳の任を果し、衣食の世話をするといふだけであるか、或は富貴に任せて美服を着飾らせて虚榮を誇るだけでは、まだ母の職務を活かして盡して居るといふ事は出來ない。成程親として子を愛する情に於ては、尊きも賤しきも、富めるも貧しきも、乃至賢きも無智なるも、厚薄の差はないのであるが、其の愛情を實際に現す仕方 に於ては、著しき相違があるのである。即ち其の子の身體精神の

發育する順序を考へ、戒むべきを戒め、訓ふべきを訓へ、衣服を纏はしむるにも、常に子女の精神上に及ぼす影響に注意を拂ひ、殊に運動と衛生の方面より之を選ぶべきである。斯くの如くにして、各種性能の發達に平衡を得せしめ、其の性向を察し、其の發育を指導し、心理状態と生理状態の兩方面を細かに注意し、發育に應じて適當なる教育を施すといふことは、賢母の愛に非ずしては活かすことの出来ぬ職務である。

八 専門的知識と學問の活用

斯く言へば、或人はかう考へるかも知れぬ。即ち食物の性質を研究するとか、或は兒童の心理状態や生理状態を研究するといふことは、専門の教育を受けなければ出来ないことで、一般の婦人のよく爲し得る處でないといふやうに、考へるかも知れない。素より我等は、婦人に悉く専門の化學者となれとは言はない。又心理學者となれとも言はない。況や一人にして經濟學にも生理學にも化學にも悉く熟達して、其の蘊奥を究めるといふことは出来ないことである。併しながら、若し眞に知識を消化するの力があり、研究する方法を知り、判斷する力さへ具へて居たならば、即ち普通の教育を受けて居つたならば、假令専門家の如き微に入り細に互る知識は得られないにしても、専門家の説を聞いてこれを實際に施すだけの實力はあるべき筈である。のみならず、若し主婦として母としての職務を全うせんとする熱心と誠意が之れに加はれば、自己に必要な知識の渴望は、必ず實行の方法を見出すことが出来るのである。活きたる生活とは即ち此の事をいふのである。心の眼の明な人、同化力ある頭腦を有つて居る人は、よく専門學者の知識を必要に應じて實際に活用し、一面には學說の効果を實地に現して、社會の進歩に貢献し、一面には自己の發展を爲すのである。

要するに、職務に對する熱心誠意と、頭腦の力がよく消化に堪へ統一し得る婦人にして、始めて家庭をも進め、社

會をも進め、その職務を發展せしむることが出来るのである。

九 職務と其の價值

そこで一步を進めて、何故に人間はその職務に忠實でなければならぬかといふに、それは前にも屢々述べたやうに、我等各個人が自營自給の道を立て、生活を豊富にし、人格を鞏固にする爲めである。併し此のことは飽くまでも徹底して居らねばならぬ。何となれば、我等の生涯の職務や又事業は、時としてはその全生涯を費しても成功し難い場合もある。時としては一朝にして中止せねばならぬ場合もある。其の志を繼ぐ次代の人を待たねばならぬ場合もある。斯様な場合には、我等の職務は水泡に歸するのであるか、又努力の生涯は徒勞に屬するのであるか。斯く考へれば、職務に對する誠意は、必ずしもその人の眞價值と同一視出來ぬものとなるではないかといふ人があるかもしれぬ。けれどもよくよく考へれば、その淺見は打ち破らるゝであらう。我等人間の生涯には、その職務を通じてその眞價值を見出し、その眞の目的を追うより外に道はないのである。即ちたとひその事業に失敗しても、成功を見ずして死んでも、其處に萬世の後までも朽廢しないものがある。言ひ換ふれば、人間として賦與せられてある眞價值を發揮するのは、その職務の成功と失敗とはなくて、その職務に對する熱誠である。歴史ありて以來、偉人と言はれ英傑と稱せられて、我等の尊敬を受くる大人物の跡を見れば、赫々と光輝を放つて居るのは大事業大成功といふことよりも、其の大事業大成功によりて現はれて居る其の人の人格の光りである。其の人の職務に依りて發揮せる品性である。

人は各々異りたる性能を有し、特質を具ふるが故に、或は政治家又は軍人として、或は商業家又は工業家として、或は宗教家又は教育家として、各種の職務を執るが如く、皆其の性向に従ひ時代の要求に應じて、其の性能を盡し其

の職務を全うするのであつて、婦人が母として妻として、若くは宗教とか教育とか文學とか、其の他の事業に従事するとして、要するに人間の眞價値を發揮するといふ點に於ては、其の間に何等の徑庭がないのである。

一〇 生活の充實

既に屢々述べたやうに、人間は或一つの大きな目的に向つて進んで居るのである。そしてそれは知らず識らず人間の知識的興味となつて表れるもので、此の興味の盛んな人ほど進歩の度が早いのである。此の目的を追求するに就いて最も大切な知識は先見の明である。人には今日一日の仕事をするにも見定めといふものがある。況て今日より明日、明日よりは明年、明年よりは三年後、五年後、十年後、否一生涯を通じて目的を一貫するといふ事は、先見の明がなくては出来ないことである。此の先見の明がないといふことは、同時に目的がないといふのと同じことで、目的もなくして無方針、無計畫、手當り次第に仕事をしては、決して良好な結果は得られないのである。併し世にはたまさか思ひ儲けぬ良結果を得ることもあるが、それは所謂僥倖といふもので、決して永久の勝利ではない。従つてそれはだんだんと積み上げて行く堅實な土臺とはならず、何時水の泡のやうに消えてしまふかもしれないものである。さて人間が大目的に向つて進んで行くといふのは、常に一貫した目的に向つて進む努力である。如何にすべきか、如何に進むべきかといふことを常に計畫して、だん／＼とその道を拓いて行くのである。即ち將來の社會、將來の境遇の爲めに、言ひ換ふれば必然に導かれて行く宇宙の大方針に従つて、それに順應する自分を作つて行くのである。これを我等人間の生活の向上といふのである。

近い例が目下の歐洲戰爭の結果はどうなるであらうか、といふことに就て、早く先見の明ある國民は、此の戰爭を劃して人類社會の向上を來すであらうし、然らざるものは戰爭の終結と共に遂に衰亡の運命に傾くの外はない。

戦争の結果、獨逸が負けるか、聯合軍が勝つか、その結果世界の大勢はどうなるか、政治家は勿論、教育者も勿論、實業家も勿論、現在の形勢を見抜いて、遠い先の事を明に知ることの出来るものが最後の勝利者である。ところで若し吾々が活眼を開いたならば、即ち吾々の内に在る良心の眼が眞に醒めたならば、明日のことは愚か、來年のこと、否百年後のことが解るのである。

今獨逸と聯合軍と、各々の戰鬥力がどれだけ續くかといふと、先づ獨逸の統計に由れば、獨逸は戦争前には、満十八歳以上四十五歳迄の男子が四百萬人あつた。ところが一昨年開戦以後滿一ヶ年の間に三百五十萬人戦死して居る。これに對した聯合軍の方でも亦凡そそれだけの壯丁を失つたかといふ事は想像するに難くないのである。さうして彼の戰鬥力はどれだけ續くものであるか。——或人は「あれだけ聯合軍が攻めるのに、獨逸は一度でも敵を國內へ入れた事はない。それ故獨逸はどこまで強いものかわからぬ」といつて恐れて居る。

如何にも獨逸は強い。それもその筈、獨逸は長い間かゝつて戦争の準備の爲めにあらゆる研究を續けて居り、彼の中から毒瓦斯を放つといふやうなことも、既に五六年前から何時でも使用の出来るやうに研究してあつたといふことである。それ故獨逸の男子は戦争といふことを中心にして、凡てに於て所謂玄人に仕立てゝあるのである。又最近のサンデーマガジン（セントルイスの同社出版）の中に、次のやうな記事が掲げられてある。

「獨逸婦人フロー・ヘールといふ人は、日頃から食物研究をして居る人であるが、今回の戦争に就いて、軍隊には常に食用品が缺乏して來ることを直ちに察知して、如何にもして之を補ふことの出来るやうに工夫しようとして、その研究を續けた結果、今までは牛馬家畜の踏みにじるのに任せてあつた雑草の中から、人の食物として、而も美味に食べられるやうに改良を加へて造り出した食用品が幾種かある。此の種のものが既に二十種もあるといふことであるが、その中でソヤ(Soya)といふ豆から、油のやうな臭氣があつて、その汁は實に苦く、とて

も人の食物にはなかつた程のものであるが、フローヘルはその豆を研究製造して粉末とし、滋養に富み且つ美味なる食用品としたのである。(かすは肥料とする) 此の製粉一斤の價は日本の十四錢である。而も滋養の點からいふと蛋白質に富んで居るから、その一斤の養分は、牛肉一斤の養分の約二倍に相當し、價は牛肉一斤の六分の一である。その上に又重量からいふと、粉末であるから至極軽く、且つ腐敗の憂がないので、遠方の戦地に輸送するにも至極輕便である。

これは戦争が始まつてから後十ヶ月ばかりの間に、その研究の効果を擧げるやうになつたのであるが、今日では此の製造所が十數ヶ所も出來て、そのために働いて居る婦人が三十萬人に達して居るといふことである。

此の外に又馬鈴薯の皮からアルコールを製造し、其のかすは牛馬に食せしめる。又櫻實の種子から食料用の香のよい油を採る、といふやうに、今までは捨てるより外に道のなかつたものを改良して、皆有用なる食物としたのである。(因みにフローヘル夫人は、此の種の改良食物の研究を蒐めた「戦時食物類纂」といふ書物を著述して居る。その他、出でゝは婦人同盟會の會長となり、頻りに其の研究の發展を計つて居る。)

此のサンデーマガジンの記事を信するならば、此の一獨逸婦人の研究の効果は、實に驚くべきものといはねばならない。勿論戦争中のことであるから、凡てを信するのは或は早計であるかも知れない。けれども、獨逸婦人が日頃から勤勉、忠實、努力といふやうなことを以て、其の特性とすることを思へば、全然無根の事でもあるまいと思ふのである。彼の研究心の強い、又その實行に力を吝まない獨逸婦人が、その日頃の研究室を開放して、戦時の祖國の爲めに盡瘁するといふことは、敵國ながら實に天晴れな活動振りと言はざるを得ないのである。まことに、國亂れて忠臣を思ひ、家貧しうして良妻を思ふ、といふ言葉の通り、其の場合に應じて、直ちに役に立つ良妻賢母となるには、日頃から矢張り各自の職分に精通して居らねばならぬ。即ち今後の良妻賢母は、日本の今までのやうに家のみ居る良

妻、事のない時の賢母で満足して居ることは出来ない。明日のこと、今後の時勢を考へて、その活きを選んで行かねばならぬのである。

ところが現在の我が國でも、又英國の如き國でも、戦時に對する國民の實力は、一部分だけ玄人に仕立てゝあつても、大多數は素人である。スワといふ場合に、直ぐ出かけて、直ぐ役に立つものは小部分である。

或戦者は、どちらにしても、戦争がもう九ヶ月續くと戦闘力がなくなるといつて居る。次に、金力は何時まで續くか、兵糧、彈藥等は何時まであるか、といふやうなことも、統計的に研究して見れば大概の見當はつくのであるが、それ等のことを數字の上で調べて見ずとも、どちらが勝つか、最後の勝利は何れに歸するかといふことは、その國民の精神力で卜することが出来ると思ふ。即ちどの目的が勝利を得つゝあるか、どの目的に一致するものが勝利を得るかといふ先見のつくものが、最も正しい勝利の豫言者であると思ふ。

併し靜に考へて見ると、どの國も眞の目的に適つて居ないのではあるまいか。なぜならば、獨逸の目的は勿論獨逸萬能主義である。さういふことは今までの世界侵略史にも澤山あるけれども、何時として宇宙の目的はそれを許さなかつた。さて聯合軍の方を見ても、英國は今日の狀態を維持して行かうといふので、屢々利己的分子の加はつた目的の下に働いて居る。さういふことも亦宇宙の目的が許さない。他の國々も皆宇宙の正しい目的の鏡にかけたならば、果して何れが一點曇のない公明正大なる目的をかざして戦つて居るのであらうか。

斯くの如く、世界の大半が修羅の巷となつて、いつ果つべくとも思はれないのは、要するに各々の國々が、その利己心から招いた天の罰であるといつてもよい。獨逸の戦死者の數は既に四百萬といふがこの先き幾百萬に上るであらう。否、何處の國でも最も大切な壯丁を澤山失ひ、次には折角稼いで築き上げた國の富も、此の戦争の爲めに、皆亞米利加に流れ込んで居るといつてもよいのである。これが宇宙の目的に適うて居ることであらうか。否、これはそ

の目的に背いたものゝ罰せらるゝ天火である。宇宙の目的は、この戦争を以て世界が眞の平和となるべき道筋を暗示して居るのである。されば心靜に此の戦争によつて示さるゝ宇宙の目的を讀み、將たその使命に感じて立つことの出來るものが、此の戦争によりて與へらるゝ最後の勝利者である。我等日本國民にはどういふ使命があるか、又眞に此の使命に感じて立つことが出来るかどうかといふことを考へて見なければならぬ。これが即ち時代の精神であるからである。時代の精神を讀むことは先見の明である。これが又人間生活の充實向上の道である。

第三章 社會的生活關係

一 外部的生活

さて日常處世の態度といふことに就いて見ても、外部的生活と、内部的生活とがある。外部的方面といふのは、主として人間が日常生活上に必ず起つて來る政治、經濟、職業などゝいふやうな種類のものをいふので、内部的方面といふのは、精神的思想方面のことをいふのである。

そこで茲には先づ、外部的生活方面の傾向を述べて、之に對する 諸子の正しき判斷を促したいと思ふ。茲に言ふ外部的生活とは即ち人間が生きて行く上に、必ず起る團體生活の主義主張を言ふのである。

第一 社會主義又は自然主義である。この主義を生活の標語と極端に走る黨人は、虛無黨といつて極端な個人主義を鼓吹して居る。彼等は曰く、人間は各自に自然の衝動のまゝに働くのが、第一の人間の快樂である。それ故、此の衝動のまゝに生活するといふことは、人間の最大幸福である。これを政府といふやうな團體が作つた制度の力で壓迫し

ようとするのは、人間の自然に逆つたものである。そこで政府も有害、國王も無用であるといふのである。

併し若し政府もなく、國王の統一といふものもなかつたら、一部の人々の衝動的快樂を果さんが爲めに、國民全體又は人類全體の幸福を亡ぼすことになりはしないか。例へば、人間の身體には種々の情慾がある。その中の一部分的情慾をのみ恣にして、他の損害を顧みなかつたならば、その幸福を全うすることは出来ぬ。結局は、その一部分的情慾をも亡ぼされてしまうことになる。又自分の一時的快樂を得んが爲めに、盜をしたり、人を害したりするものがあるとするれば、その害は自分に報いて歸るであらう。極端な個人主義は、さういふ近い將來の事さへ考へないのである。否現在の自分の事さへ全體に行き渡つて考へることの出来ない動物我であつて、進歩發展の出来ない道である。

第二は寡頭政治、又は君主政治と稱するものである。君主政治と言つても、一人で政治を行ふわけではないから、小數の貴族、即ち金持とか、學者とか、其の國の一番偉い人を拔擧て、其の擧げられた人々の團體が政治を執るといふことになるのである。其の目的は國民全體の爲めであつて、又個人々々の安寧幸福を保たんが爲めである。故に其の小數の人々が眞に偉い人ばかりであれば宜しいのであるけれども、人間はさうばかりは行かぬ。そこで若し其の小數の人々が名譽を求め、奴隸であつたとすると、即ち小數の貴族を以て成り立つて居る此の寡頭政治は、小數の人々の御都合本位に執り行はれてしまうことになる。さういふ經驗をした後に考へ出されたのが第三の共同政治である。

第三 共同政治とは立憲政體のことである。これは一部の人々の幸福にのみ偏し傾かないやうに、國家全體の幸福を目的とするのであつて、總ての個人に對して相對善を旨とするところの團體主義である。今日進歩した國々は皆この制度であるが、併し此の主義の中にも又種々の程度があつて、或は自國內の範圍では殆ど理想的共同主義を執るが、一朝他國と相對する時は、忽ち自國本位を一步も譲らず、自國の爲めならば他國を踏みつぶしても構はないといふやうになるのが、今日の世界の列強である。若しこれが今一步進展して、自國の幸福を全うすると共に、他の國々の幸

福をも保たねばならぬといふ考が實行せらるゝやうになれば、それこそ徹底したる共同政治であり、人間最高の理想の實現となるのである。が此の理想に達するまでには種々の衝突矛盾が起る。今日の獨逸對聯合軍の戰爭も、人類の團體生活に、此の理想實行の程度を髓めて居るやうなものである。

以上は一國としても一個人としても同じことであつて、自分の目的を達すると共に、他人の目的をも達せしめるといふことが、人間生活の根本であつて、これに依つて人々の活力の差を生じて來るのである。たとひ家庭をも作らず、國家的關係をも離れ、社會的生活の發展をも全く斷絶しようとする人でも、この人間の團體的生活から成立つところの團體的生命から離れることは出來ない。支那の老大國に年中戰亂の絶えないのも、其の國民に團體的生命がないからである。而も國民の一人々々に就いて見れば、英雄豪傑と言はれる人々は、常に蝸牛角上の災に惱まされ、人材は世を避けて亡國の恨を懷き、野心家は出で、國政を恣にしようとする。理想の國政が築かれよう筈がないのである。世を捨てた憂國の士も、朝に立つ執政者も、その團體的生命の滅亡に病まざるゝことは同じである。世界の諸國はその虛に乗じて、自國勢力の進展を計らうとする。國民は疲弊して朝夕に安き心もない有様である。

又獨逸の國が世界の聯合軍を相手にして、今日尙優勢を示して居るのは、比較的此の團體的生活が進んで居るからである。獨逸では、その國民の中に愚なる者のある事は國家が許さない。國家が強制して、誰にも彼にも教育を受けさせて、其の國民としての教育程度を高めるのである。數年前の統計によると、獨逸國では目に一丁字なきものは一萬人に就き三人しかない——英國では一萬人中十三人、伊太利では一萬人中三十人、露西亞は一萬人中六十人——といふやうな状態である。一人の弱者を出すことは、其の團體の生命がまだそれほど弱い點を持つて居るといふことを示すことになるのであるから、この團體的生命に加はつて行くことの出來ぬ人は、自分一人ではない、團體の總てに關係を及ぼすのである。従つてその人が如何なる知者であらうと、富者であらうと、關係を離れ孤立して、永久の生

存の出來やう筈はないのである。遂に滅びる者と思はねばならない。

翻つて今日の進んだ婦人と言はれるその人々の頭には、此の團體的生命が出來て居るであらうか。否出來つゝあればよいのであるが、果してどうであらう。日本婦人の生命を養ふ日本の婦人界は、世界の國々の文明制度に比べたならば、果して、何れの状態に比すべきものであらう。從來の日本婦人は、君主專政の如き家庭に唯盲従し、時勢の激變に遭遇せる過渡の時代には、極端なる自然主義的風潮に煽動され、或者は支那のその如く、互に野心を抱いて暗闘嫉視し、或者は白耳義のそれよりもつと不利益な境遇に立つて、眼に見える經濟的方面ですら、容易に團體的生活が出來ない。而もより大なる問題は日に日に婦人の生活改善を促して居るといふ有様。任は重く力は弱い感を持つこと、恰も歐洲戰爭に於ける白耳義の如き立場である。此の難關を切り抜ける唯一つの道は、婦人の團體の生命を築き、團體的生活の態度を作ることである。此の難關を通過しなければ、將來日本婦人の地位を高めることも出來ず、又眞に婦人の内部的生活を高調に達することも出來ないのである。

二 内部的生活

曩に内部的生活方面といふことを一言して置いたが、これは予の所謂信念生活のことで、以上述べ來つた本書の内容は、徹頭徹尾此の事を説かうとしたものであるが、併しまだ悉く讀者に理解を與へたかどうかは予の懸念するところである。否斯かる問題は、到底一から十まで言葉や文字の上で説き盡せるものではない。願はくば本書を繙く諸子の態度が、活きた電線であつて貰ひたい。そこで内部的生活又は信念生活といふことは、廣義の宗教的生活といふことである。人間は程度こそ違へ、必ず此の宗教的生活を渴望するものである。何故に宗教的生活を渴望するかと言へば、其處には人間がその宗教的生活を通じて、何か求める所の目的物があるのである。それは即ち永久の生命であ

る。神と共に生きる所の不滅の生命である。此の要求は、決して小數の特別な人々の渴望ではなく、人類幾萬年來の渴望である。宗教もそれと同じく、古く幾千年の星霜を積んで此の世界に傳はつたもので、決して獨斷的空想的のものではない。そこで人間の内面的生活といふのはつまり宗教的渴望宗教的思想の追求から起る宗教研究といふことに初まるものである。

「宗教は言葉ではなく精神である。信條ではなく信仰である」と昔の哲學者も言つて居る通り、これは人間の内面的生活の現はれである。

さてこの内面的生活に大切なものは禱である。されば人間は、そも如何なることを祈るかといふと、種々ある。極く低い宗教は、私利私慾を得たい爲めであるが高尚になると罪の救である。クリストでも、釋迦でも、動機は一つで、此の世の中を救ふと云ふ事であつた。其の救といふ中には、罪を救ふといふ意味がある。又此の世を天國のやうにしたいといふ事である。今日の偉大な人も、此の社會を幸福にしたい、人類を救ひたいといふのが願である。かういふ事が宗教心の起である。即ち人間の内部的生活の眞髓である。予は、七つの時自分の一番慕つて居た母を失ひ、其の母にもう一度逢ひたいと言ふ事が何よりの希望であつた、これが予の宗教心の起つた初めである、それから又自分の尊ぶクリストとか、釋迦とか、孔子とか云ふ人に逢ひたいといふ心が起り、又未來といふ事が氣にかゝり出した。死んで後に未來と云ふものが有るであらうか、どうか有りたいのである。それは地獄と云ふやうなものでなく、極樂のやうな處に行きたいのである。即ち人間は誰れでも其の内心を聞いて見ると長く生きたいといふやうな事が、凡ての場合の内部的生活に絶えず起つて居るのではあるまいか。

三 生活願望の根本

この内部的生活の願望が、人間世界の宗教といふものゝ起源に關係する事は、餘程深いやうである。

夫れで先づ最初に、宗教の起源といふ事に就いて考へて見ると、いろ／＼な事が件つて居る。宇内を見て宇宙を統一したいと云ふ。これも心の中の願である。そこで宗教は、多くの哲學者、生物學者、或は宗教家の一致する所の考を詞に表して見ると、生存の願望といつてもよいであらう。此の生命を得たいといふ事から考へて行くと、段々解つて來るけれども、或人は、此の宗教といふことに就いて次の如く説明して居る。「宗教は理想的の存在に關する凡ての思想、凡ての感情である。其の理想的の存在とは、人間の希望であり、又要求であるのみならず、これは人間の希望に應ずる事の出來るものである」と云つて居る。故に詞を換へて言へば、人生の願望と要求から出たところの理想であると言つてもよい。獨逸の有名なる哲學者フオイエルバッハは、「神は實現なり。宗教は人間の願望が、思想上に實現せられたるものなり」とも云つて居る。人間には智的慾望がある。それも現在のものゝみでは満足せず、未來に就いて願望するのである。故に此の人は又「若しも人類が必要を持たず、慾望がなかつたならば、宗教といふものは出來なかつたであらう」と言つて居る。

同じく獨逸の哲學者ハルトマンは「若しも悲と惡事とが無かつたならば、宗教は起らなかつたであらう。神とは人間が自分に持つて居らぬ力、即ち自分以上の力に外ならぬ。其の力に依つて救はれたい、苦から逃れさして貰ひたい、幸福を與へて欲しいと云ふ願望である」と。

されば此の生存の願望とは如何なるものであらうか。これは換言すれば、發達の向上心と云つても宜いであらう。即ち完全に進まんと思ふ所の心である。生きて居るといふ中には保存と云ふ事もあり、第二は幸福と云ふ事、第三は完全なる生活を得たい、立派なる人間になりたいと云ふやうな願望もある。そこで願望と云へば、唯感情だけのやうに思ふ人もあるが、さうではない。其の主なる要素は、人類全體の發達を目的とするのである。即ち宇宙の根本であ

るところの意志の發現を期待するのであるから、云はば理想的の目的と云つても善いのである。兎も角も、宗教は人間の願望から起つて居るのである。

印度の宗教は、人生を悲觀し厭世から起つて居るが、佛の立たれた目的は、やはり救ふといふ事であつた。人間に願望がある爲めに苦痛がある。其の苦痛を救ふには無我になり、無差別にならねばならぬと云ふ事である。故にやはり人間の欲望といふものに源を發して居るのである。人間は、生存の慾を全うせしむると云ふ事と、慾を殺すと云ふ事とは、詞の上から云へば矛盾するやうであるけれども、段々溯つて行くと、つまり人類全體を幸福にしようとする事になるので、若し神が人格的のものであるとするならば、それから自分の罪を許して貰はねばならぬ。そして、益々完全な者に達しようと云ふ事になる。これは各自の經驗に照らせば直ぐ解る事であるが、要するに、宗教は決して自己的欲望ばかりではない。

ゼームスは「宗教の目的は抽象の神ではない、生存である。其の生存は、もつと大なる、もつと豊富なる、もつと満足の出来る生存、これが即ち宗教の目的で有る」と云つて居る。生存を愛すると云ふこと、これが即ち如何なる程度の方に於ても、常に宗教心を鼓舞するものである。そこで宗教の起は、第一生存の欲望であるが、次にもつと進んで來ると理想追求となるのである。即ち現在の生存は不完全であるからより大なる、より幸福なる生存を願望するのである。そこで人間の理想より拵へるのであるから、昔から人々によつて描かれた神が違つて來るのである。其の理想といふことをもつと宗教的の詞で云へば信仰である。其の信仰とは何であるかといへば、其の理想を慕ひ、理想を實現すると云ふ熱心であり、希望である。

四 宗教的生活の眞髓

前にも言つた通り、宗教は信條ではなく、信仰である。如何となれば、信條は死んで居る形式であるが、信仰は生きて居る所の精神である。其の理想と云ふものは何によつて出来たかと云ふと、生存の願望に由るのである。そしてこれは唯感情のみではなく、亦た靈力と意力との働から出来たものである。又此の理想は、宇宙全體から出来て居る所の大宇宙が、小宇宙なる人間の心に映つたものであるとも考へらるゝのである。この考へは唯空中樓閣を描くのではなく確に實在するものがある。但しこの理想が出来て、これが宗教の生命となるには、信仰が必要である。信仰が無かつたならば實現は無い。實現がないならば生命は無いのである。夫れで宗教に於て最も大切な生命ともなり力とも成るものは此の信仰である。所で此の信仰と言ふ事と、迷信といふ事とが、同じもののやうに考へらるゝのは大なる誤りである。

屢々聞く事であるが「學問をさせると信仰心が薄らぐ、即ち道理が解ると信仰と云ふものは無くなつてしまふから、成るべく信仰を破らぬ程度に學問もしなければならぬ」といふ。又或場合には、「あの人は何か宗教に入らせるやうに、有難やの所へでもやるが宜からう」といふ。是れは醫師でいへば匙を投げた病人に根本的の治療が出来ないので一時的の治療をするやうなもので、一時的の安心を與へる爲めに宗教心を強ふるのである。けれども、眞の宗教は斯くの如く、匙を投げられた病人を扱ふものではない。眞理に不徹底な宗教は文明の光に接し、科學の眞理に照らされると此迄の信仰に矛盾を來すのである。其の矛盾した考の中に留まつて居れば、決して宗教の生命は得られない。これ即ち迷信といふべきものであつて、今日の宗教の力の無いのは此所である。昔の清教徒の如き信仰が、今日宗教界にないといふのは、多くは斯くの如き迷信家が、眞理に逆つた迷郷に止まつて居るからである。眞理は常に迷郷を蔽ふ雲間から輝く靈光のやうに、此の迷信的信仰を破壊せんとするから、之を防がんとして益々頑迷に陥る。迷信は益々迷信に深入り眞の信仰とは遠く隔つたものになる。眞の信仰は、決して知識と矛盾し、眞理に逆つたもので

はない。昔から眞理に逆つた者は必ず滅びた。其の一例を云へば、ホゼヤと云ふ豫言者がイスラエル人に云つた詞に、

イスラエルの子よ。イスラエルの國民よ。主の詞を聞け。

我が人民は、知識を缺きたる爲めに滅びたり。汝曹は知識を

排斥したる故に吾れ汝曹を排斥す。

といつて居る。

昔から眞理を好まない者は迷信に陥る。けれども彼等はその古き信仰を捨つるのは罪惡の如く思ひ、知識を拒み、眞理に逆ひ、迷信に屬する信仰を續けようとして、遂に眞の信仰を失ひ、己れを滅し、國を滅すのである。

若し一粒の種子地に落ちて死なずば、一つにてあらん。若し死なば多くの實を結ぶべし。
とある。

人間の内部的生活の種子が地に落ちて、其の種子が一旦破れなかつたならば、芽を出す事は出来ない。人間が古い信仰を變へまい、信條を破るまいとするのは、丁度胡桃の堅い皮を破るまいとすると同じことである。けれども其の皮を破らねば、其の中の芽は出る事は出来ない。山を移す程の信仰は出来ないのである。皮を割り迷信を破るといふのは、一層堅固なる、一層進みて止まざる信仰に入る一步でなければならぬ。

若し芥子種程の眞の信仰があらば、此處の山を彼處に移さうと思へば必ず移すことが出来る。信仰の人に能はざることはない。

と云はれて居る。彼のコロンバスが、大陸發見の時の信仰を舒した詩に、

その時——甲板に見つめて居た

彼の蒼ざめた雙頬には、

いちじるしい疲れがみなぎつて居た。

闇の中をすかし見た。

オ―その夜、黒暗々たる夜、

一點の光は

するどく

彼の眼を射た。

光！光！光！光！

次第にひろがりひろがりて、

一ながれの旗は

星明に照らされて開かれ、

かくて

時代の曙光はここにほのめき、

彼は世界を得て、

その世界に大なる教訓を與へた。

進め！帆かけて進め！

.....

コロンバスの信仰は、迷信者には到底出来ないと思つた事が出来たのである。即ち信仰があれば、成し能はざる事はない。今吾々は誠に纖弱い婦人の手を以て、大正維新を成し遂げようと云ふ事を企て、居る。我が日本のみならず、東洋に新天地を開き、世界に平和の福音を齎せようと云ふことは、彼の富士山を海に移すよりも一層困難である。けれども、若し芥子種程の信仰が日本婦人の内部的な生活にあるならば、何事といへども出来ぬことはない。

國運を下する婦人の力

今や我等日本國民は、曠古の御大典の神氣に浴し、又世界を蔽ふ砲火に警醒せられつゝあるのである。開闢以來未曾有の大刺戟は、そもわが日本婦人に如何なる覺悟を與へた事であらう。即ち國民の義務を痛切に感ずると共に、人としての修養を世界的に擴充し、賢母良妻としての徳を、國家的に發展するの覺悟を定めなければならぬ時である。そこで此の巻を結ぶに臨んで、尙一言今後の日本婦人は、國民としての義務責任を如何に盡すべきやに就いて繰返して置きたいと思ふ。

今後我々が、世界に對して遜色のない偉大なる國民となるには、先づ第一に、國の母たるべき婦人の人格が出来なければならぬ。又戦後我が國民が、世界の競争場裡に馳驅せんとするには、先づ我が國婦人が、知識に於て、活動に於て、將た愛國心に於て、正義人道に於て、列強の婦人に譲らざる決心を持つて立たなければならぬ。如何となれば、古今東西に互つて、國家の興亡も、國民の大小も、其の根柢原因には、必ず國家の母たる婦人の人格及び叡知が與つて力あるものとなつて居る。其の一例を擧げて見ると、我が國母、天照大神の聖徳因を爲して、大和魂は生れ、又神功皇后の如き烈婦賢母があつて、我が忠勇なる國體が育つたのである。西洋の文明の跡を尋ねて見ても、スパルタの武道、ローマの文華、凡て其の根本には必ず婦人の尊い力が基をなして居らぬものはない。然るに大正の我が國婦人の状態はどうであらう。これを昔に比べ、又列國の婦人に比べて見て、果して如何なる感が起るか。予は丁度目

下の歐洲戰爭の始まる少し前に、歐米を廻つて見たのであるが、其の特殊に感じた事は、西洋の婦人は學術研究に於ても男子の扶助者たり、家庭の經營に於ても良人の好伴侶たる實力を慥に持つて居るといふこと、又目下の聯合軍側の各國に於ても、又獨逸、墺國に於ても、其の最高學府に於ける大學生の數は、其の十分の一を女學生が占めて居たことである。然るに開戦後今日に至つては、男學生の數はそれよりも又段々と減じ行き、僅に總體の五分の一となつて居るが、尙此の上に戰爭が長引けば、終には女學生のみになるかも知れない。これは何を意味して居るか。戦後は是等の國々の研究機關は、多く婦人の學生を以て補はれなければならぬやうになるといふことは、誰にも想像の出来ることであらう。又今後平和克復の暁となるまでには、少くとも一千万近くの有爲の青年は死の運命の俘虜となつて、その配遇者たるべき有爲の女子は、餘儀なく各種の公務に携はるの必要を生じ、従つて以前とは異つた奮闘生活を營まねばならぬやうになることも、眼前に來る事實である。其の結果、婦人は必然あらゆる方面に其の智徳を研くやうになるであらう。斯くて得られた實力と向上心とは、國家を左右するものとなるであらう。即ち歐洲の烈強は、婦人の力に依つて其の國運を卜する時が來たのである。斯くの如き重大な責任を持つた彼等歐洲婦人は、又其の使命を全うするに足るべき意氣と實力を有して居る。彼等は獨り家庭衛生に、家庭經濟に、其の分を全うするのみならず、進んで國家衛生、國家經濟の方面に於ても大に力を延ばし、此の國難の時に際しては、不衛生より生ずる諸種の病魔を撃退し、經濟變調より襲ひ來る貧苦を防禦して居る。戰爭の最中に於ても、特に教育改善の如き、信念涵養の如き、國家生活の根本を養成する事業の如きは、重に婦人の感化力に由つて、着々效を奏して居る。又最近に於ては、家庭改善の爲めに、學術研究の爲めに、國際道德向上の爲めに、萬國婦人大會を開き、有力なる運動を開始して、これに我が國婦人をも、東洋婦人を代表せしめんと頻に加入を促して居るが如き有様である。之に引きかへ、我が國では、平時に於ても、トラホームの如き、肺結核の如き、病魔の侵入を恣ならしめ、之を傍觀するかの如き姿で

ある。斯くの如く、國家衛生にも未だ手が出せぬ位であるから、況してや國際的に、世界の婦人と提携するの用意は出来て居らぬのである。其の他歐米の婦人に比べて、教育の程度も（尤も中等教育の普及は近年盛になつたけれども）今日のまゝでは、とても満足することが出来ない。

さればと言つて、強ち西洋婦人を摸倣せよといふ意味ではない、けれども今日の日本婦人は、單に従順の美德のみを以て足れりとすべきものではない。必ず往古の日本婦人の勇をも併せ、尙今の泰西婦人の明知にも倣つて行かなければ、今後列強の國民と歩調を揃へて進むことは出来ないのである。

要するに、吾人は國家の前途を考へ、我が國の東西に關聯する大使命に鑑みて、今後の世界的大競争に對する我が國民の耐久力を、今より蓄へて置かねばならぬ。それに就いて、此の大責任を負ふべき國民生活の根本を反省してみると、どうしても、これを今此の一大時機に生れ出でたる我が國の女性三千萬人の婦人に訴へたいのである。斯ういへば、かよわき婦人に餘に重きを強ふるものであると感ぜらるゝ人があるかも知れない。けれども、假令かよわき者にしても、若しこれが天の配劑であると信ずる事が出来たならば、又此の配劑が實に古今に通じて謬らず、東西に施して悖らざる公道であることを信ずるならば、又此の公道の響こそ宇宙の大靈が發する命である事を信ずることが出来れば、さうして此の天の命が婦人を選んで、此の使命を下し給ふものなるを信ずることが出来れば、いかでか弱きの故を以て逡巡躊躇することが出来やうぞ。願はくは此の期に際し、此の聲に應じて立つの決心を内に確めて、我が國婦人が、此の際勇ましく各自の任に赴かれんことを切望するのである。

——大尾——

（大正五年八月出版）